

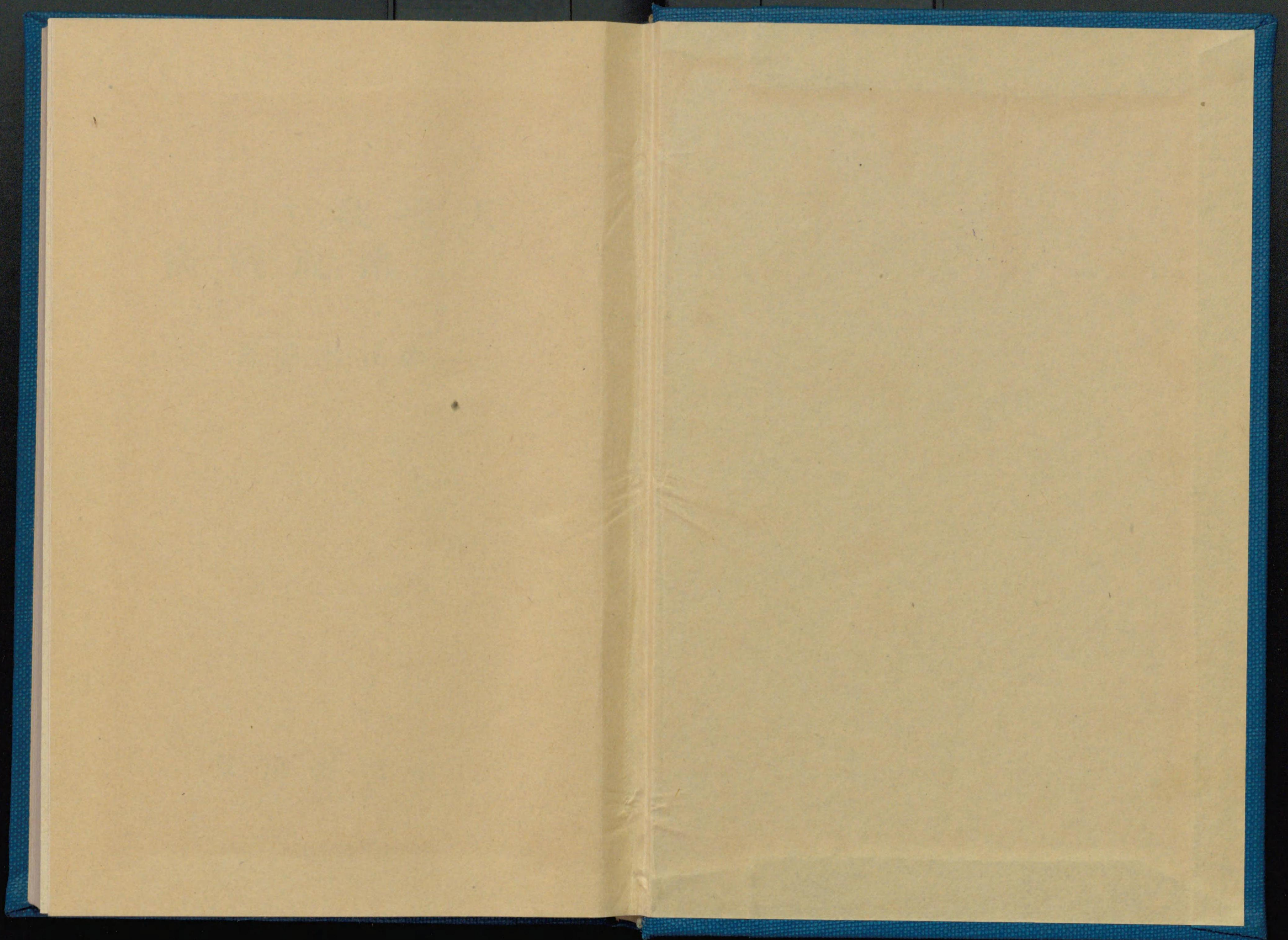
609-64



1200501533634

609

64



1598

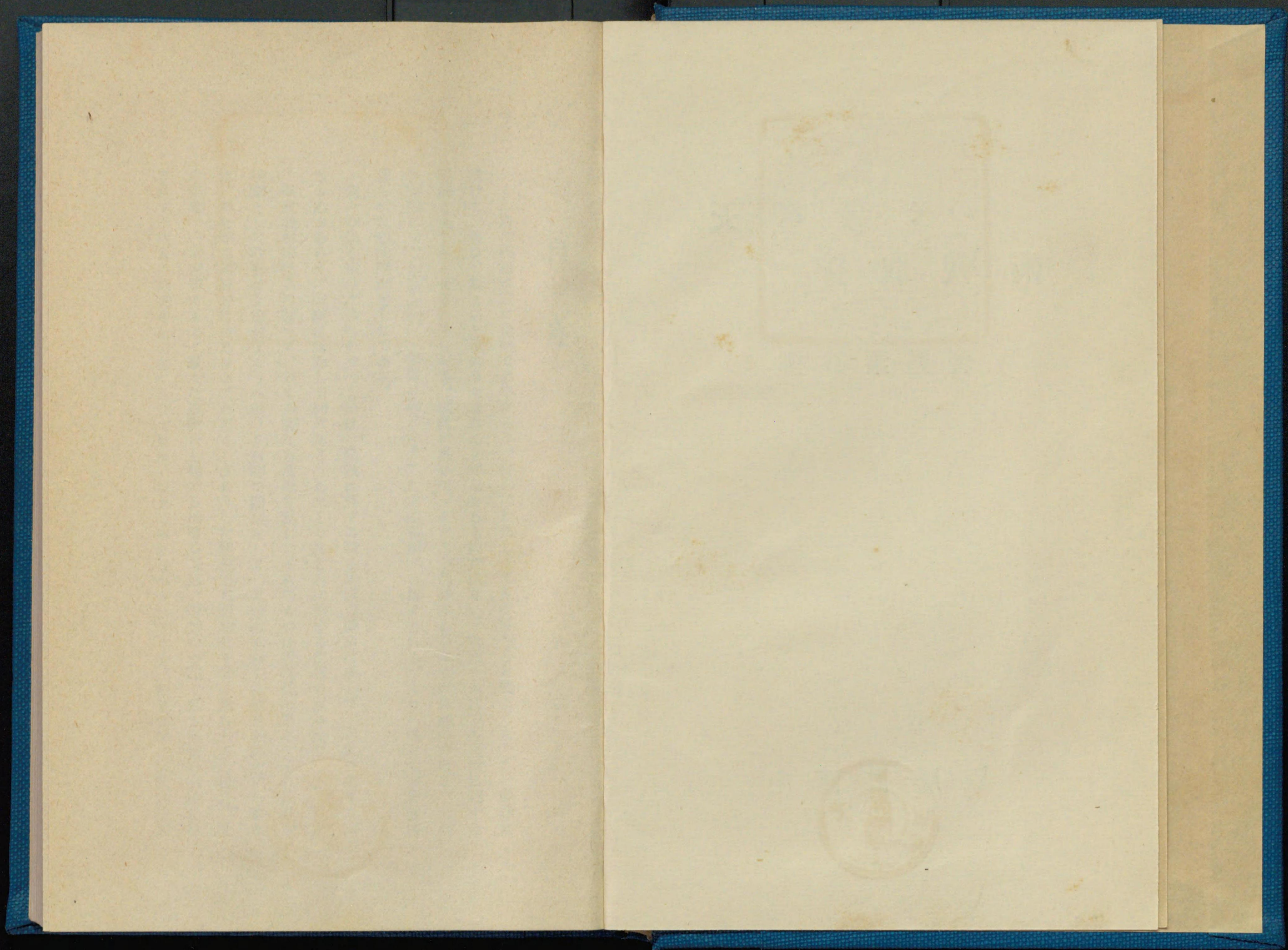


柳谷素靈著

東京

中西圖書房版





609-64

## 自序

この書の標題は寔に奇妙であるだらう。併し、わたしとて人の好奇心を唆るべきやうの標題を設けて、強ひて無き名を世にうたはれんとてなせるものではない。ただ一人にでも宗教に關する理解を興へんとせるに外ならぬ。現代に於いてマルクスの名は多くの人々の口邊にのぼる。それに附隨して、「宗教批判」「宗教は阿片なり」などの言葉が宣傳せられる。これに對して宗教家は盛んに反動的態度を示してゐる。

我々の如く宗教に關心を持つものは、宗教に對する斯る論議の渦中に處して、再思三考せぬばならぬであらう。宗教ははたして阿片か？ わたくしはこれに對する反省を試みた。

現代我が宗教界に於いて、最も活潑なる活動を爲しつゝあるものは天理教である。それ故社會現象としての宗教を検討するうへに、これ等の綜括として、天理教に對する検討を以てすることは、あながち無理ではあるまい。わたくしはこうした觀點から天理教々勢の然らしむる譯合、その組織、一素寒貧でもよく豪大なる教會を建てるに至る方法、信者の心理、最も入信の過程を取り易すい病人の扱方等を考慮に入れて見た。以上の事を考へ合はすとき、何故に同じ宗教團體が

振はぬか？ との疑問に對する回答の任務を果すだらう。と同時に宗教の阿片性が、どんな方法で撒布するものであるかに對する、具體的な觀念を明らかにすることが出來得やう。宗教は阿片なりと抗撃しても、具體的な例證を掲げるのでなかつたら、その抗撃は民衆に對して聲低きものである。醫家に對する批判として醫療の社會化が提唱されて來た。病者を取扱ふ醫者と同じく、病者を取扱ふ天理教々師との態度はどう異なるか、然もその病者を癒したとの謝禮は醫者は決められた小額を受け、天理教々師にありては、家も田地も寄進させることの出来るのは、何故であるか？ わたくしはこれに對しても考へて見た。

要するに振はざる宗教團體に對してはその振興策を、宗教を抗撃する社會運動家に對してはその具體的例證を、患者の取扱ひになれざる醫家に對しては、その巧妙なる取扱法を眼前に提供したつもりである。

こうした意圖のもとにもなされたる書なるが故に、専門の學者や明知なる識者に贈らんとてなせるものではなく、それよりも多くの宗教に關心をもつ民衆に對する、著者の忠言であると見てもらひたいのである。殊に天理教の信者又は信者たらむとするものに取つては、一つの自燈となることと信するものである。

最後にわたくしはこの種非研究的の書を世に送るに際して、恩師並に先輩又は天理教に於ける朋輩諸賢に非常にお氣の毒に思はぬでもない。だが然し今は最早やそれ等に躊躇してをるべき秋ではないと思はれるほど、事態は急迫を告げてゐるのではないだらうか。教祖の眞意義は現代の如き形骸化であつたらうか？ わたくしはそうは思はぬのである。だからこそ天理教の現在に信仰派と經濟派との二流の色彩があるのではあるまいか。余は之に答へた。

終りにのぞみ蔭となり日なたとなり、著者に力を添へて下された某天理教々會長に對して、深甚の謝意を表す。又著者に研究資料を貸與して下されたる、恩師先輩、並に同輩諸士に對して心からの御禮を申し上げます。

昭和五年盛夏

目次

第一章 金を集める豫備手段……………三

- 一、不景気には天理屋が一番儲かる……………三
- 二、體や財産は天理王命の貸したものであるから返すのが當然だ——借物貨物の理……………二六
- 三、肉體は神のもの、財産も神の貸物……………二五
- 四、天理教の神が存在するとは眞赤な大嘘言だ……………二四
- 五、なるもならぬも前世の約束……………二四
- 六、たんのうは人を無氣力にする阿片なり……………二九
- 七、埃りとは搾取の第一前提……………二五
- 八、労働は働らかざるものに強ふべきものだ！……………二八
- 九、醫家の注意すべき天理教の病理觀……………二四
- 十、勝手に附ける死の解釋、不體裁にもボロが出てゐる……………二七

第二章

天理教は どうして 今日 の 發展 を した か ?

天理教は どう云ふ 風 に して 金 を 寄附 さ せる か !!

天理屋の金儲法の公開

- 一、寄附させる方法の梗概……………二九〇
- 二、借物を使ふに利子はきつと要る……………二九二
- 三、雛型を通り終れば無一文……………三〇〇
- 四、埃りをば掃除するのも、お金、金、天理の神もお金次第で……………三〇三
- 五、因縁と足納の理の含む阿片性に最も注意せよ  
    下手すると財産を引つくり返すぞ……………三〇九
- 六、天理屋の教理をナルホドと合點したときから  
    有形のものは取られるものと思へ……………三二二

附 録

- 一、貧乏してもそれが因縁、これが天理教の不景氣挽回策とはアキレル……………三五
- 二、天理教の未信者、信者、下級教師に忠告す……………三四一
  - 第一表 現天理教入團者の心理的原因……………三四三
  - 第二表 天理教に於ける現勢維持及發展の方策……………三四四
- 三、何故に天理教の信仰療法で病氣が癒るか?……………三五六
  - (イ)、信仰療法で病氣が癒るものか?……………三五八
  - (ロ)、何故に信仰で疾病が癒るものか?……………三五九
  - (ハ)、神様が病氣を癒すものとすれば、  
    神様はどうなるか? 疾病はどうならねばならぬか?……………三六四

目次終り



天理教

その擽取戦術

天  
天  
天

## 第一章 金を集める豫備手段

### 一、不景氣には天理屋が一番儲かる

都會と云はず、地方と云はず、飽くことなき不景氣風は各門戸の奥の奥まで、遠慮會釋もなく渦まいて吹き狂つてゐる。失業、生活苦、就職困難、奔走、失望、消衰、彷徨、剽盜、強盜、一家心中、支配階級の暴壓、被支配階級の機械化、平和の美器に盛られる改制革命の渦泡等々、これ等が現代の如實の世相であることを認識したならば、何人たりとも膚に粟することであらう。現代社會は今や、眞に噴火口上に於ける靜かさに等しき形態を示してゐるのである。待つべき一瞬を得て、瞬時の間も容赦なく噴上し來る危険が、吾人の足下に存在することを知らずして晏如たるもの果して幾人かある。

人々、口を開けばどうにかならねばと云ふ。どうにかなる。必ず成ると云ふ。どうにか成らねば仕様がないと云ふ。斯く口にする人々は多く收入少く、その日暮しの勞働者に多きことを知る

時、爲政者は、此等労働者の合言葉たる「どうにかならねば」と云ふことを如何なる意味に取るか、ナンセンスとか云ふて、感覺生活を求むるに飽くことなきプロヂユアの遊蕩兒は、「どうにか必ずなる」との労働者等の決意を何んと見るか。

「どうにかならねば」、「どうにか必ずなる」「俺等の時代」等の言葉の裏を究めんとすることなき、爲政者、資本家、教育家、識者、宗教家等が若しあるとしたら、それ等の人は甚だ幸福であり、よい人であり、又大馬鹿であると云はねばなるまい。

彼等労働者の合言葉たる命題は、彼等が日日毎日、黙々として働くべく餘儀なくされてゐるその態度と比較するときは、丁度眞綿の中に鋭利なる針の數本を含ませてあるやうなものである。外容は如何にも、柔かい、が一度それを握り絞めるとき、遠慮なく鋭利な針が、握つた手掌を突き破るであらう。そこには、鮮血の淋漓があり、苦痛があり、外容の柔さに似ざる——その外貌もて事物を決した、疎漏、不注意、認識不足を、しみじみと味ふことだらう。決して柔く見え、眞綿なるが故に無害と決めてしまふことが出来ないことと云ふことを、心の奥底から知ることが出来るであらう。だがその時は、最早や、手肉を破られ、鮮血を出した後である。この創痕はありふれた、創のやうに、すぐ直るやうなことはない。癒るべき時の来るまで——恐らく来ることは

ないであらうところの時まで——消えるやうなことはあるまい。それほど、根深く、劇く、ひどく、突いて来る鋭利なる尖端である。だから、その時になつて後悔しても、所謂俚諺の、轉んだ後の杖で何んにもならぬ。だから、物の解つた、狡猾な、商賣氣たつぶりな、自我主義の張つた人はこの危険を知つてゐる。だからこれが對策を考へるやうになる。

何んでもかまわぬ、その針を折つてしまいたい。これが一つの信條である。

何んでもよい。その鋭利な尖端を磨り減して、鈍麻にし、握つても害を及ぼさぬやうにしる、と云ふ、これが第二の信條である。

こんな方策を講じてともすれば、眞綿の表面近くあらはれ勝な針を抑へに抑へて来た。そして出そうな針を折る時に、しばし、多かれ少かれの、怪我を知つた伶俐な連中は、比較的金のかゝらぬ、第二の信條を奉じて、その鋭い尖きの磨滅師を備い入れるか、これ等と結托して仕事をするやうになつた。こゝに磨滅師の仕事が一つ、職業として分立するやうになつた。

磨滅師は、針の取り扱ひになれたものでなければならぬ、だから、磨滅師の初代は、磨滅師の現在の仕事とは反對な、ときや——鋭い尖を針につける仕事をするもの——のごく下劣な、腕の悪い、下劣な、巧利的な、主我的な、なれの果なのである。昔しは砥屋が多かつた。が、そ

れも、二代三代となれば、もう駄目になつてしまふ。だから、手なれた、手つきで磨滅師になつてしまふのだ。

今の世には、砥屋の看板をかけた堂々たるいかさま砥屋——磨滅師が、そんなじよ、こゝらにうじよ／＼してゐる。砥屋の看板も、先祖の顔で通ふてゐるやうなものだ。その實はこゝせんを取つて、うまいことをしてゐる、砥屋ならざる磨滅師が随分ゐるのである。

砥屋の標本は、印度の釋迦、支那の孔子、老子、アテネのソクラテス、パレステナのキリスト中頃では、日本では日蓮、親鸞、等がまあ、砥師の代表的ものだらう。だが今の砥屋は、先祖の看板を賣つて食つてゐるやうなものだ。だが、だん／＼いかものをやると云ふことが知れるやうになつてから、大部、砥屋一般に對して信用が無くなつて來てゐる。そして、各人は各々のもつてゐる、針を自分自身で砥ぐやうになつた。がこゝに、今までの古る顔に並んで、新店が一軒出來た。それは、「砥師天理屋」である。

「天理屋」は店も大きい。職人も随分と多い。顧客も多い——目のきかないものばかりだ、又はきいて利用する奴とか、何もかも知らない書生あがりとかばかりが多いが——だから、一年の収益が一億と云はれてゐる。何んともまあ、この不景氣に、豪勢なものではないか、支店も出してゐる、全國に一萬からある。顧客が六百萬と號してゐるんだから、偉ではないか。今までの砥屋のうちで一番繁盛してゐるのは、眞宗屋さんだそうだが、その眞宗屋さんの向うを張らうとするに至つてゐるのは、眞に驚ろくべき繁盛振りだと云はねばなるまい。

著者は、この天理屋が、如何にして、今日の大を爲すに至つたか、現在猶ほ發展しつゝあるのは何故であるか、その經濟機構がどんなになつてゐるか、顧客の心理はどんなものか、その他、砥師の儲ける方法を展開して行くであらう。

この偽砥師——磨滅屋たる天理屋の機構を明瞭にすることにより、我々は之に類する偽砥師——磨滅屋の面皮を剥ぎむいて、彼等をして先祖の如き眞の砥師——大衆に眞實の力を與へるものたらしむべく仕向けるか、不正利得をむさぼる磨滅屋——努力奮闘、進運開化文化向上をさまざまけるやうにするものを、葬むるかしなければならぬのである。

故に著者は以下順次以上の主題に就いて述べるであらう。

著者は嘗て、或るさゝやかな飯屋で次の如き會話を聞いたことがある。一人は、印絆天に、ワラジばきの労働者であつた。他の一人は、ヨウカン色に剥けた洋服を着、古るぼけた帽子を被り

垢じんだ靴を履いた外交員風の男である。前者は四十位で後者は三十位の年恰好であつたらう。二人は飯を食ひながら隣り合せて座つてゐた。時は初夏の夕方である。二人は何か話してゐる。それは、

労働者 「何んと不景氣ですね、これが長く續くと死んでしまひませう」

洋服着 「全くですね、この不景氣にあ、ほんとうに困つてしまいました、ねお互に」

労働者 「そうですね、然しあなた等はようがんしよ。月給でせう？」

洋服着 「何んの、今どこの、銀行でも會社でも、人を入れることをしません。入れるどころか、人員淘汰だとか、整理だとかと名目をつけて一寸の事にかこつけ、首を切つてしまふんですよ、だから我々のやうな、引きの無いやうなものは、月給のとれるところへは働きたくとも働くことが出来ません。今私はつまらない保険の外交をやつてゐますが、ほんとに電車代にもなりませんよ、ほんとうに、何んともなりませんよ。」

労働者 「だがまあ何んとかなるでせう。私つしらも、子供は五人もある。おやじがその日／＼の米代を握つて行かねば、米の汁も飲むことが出来ないんで、それも、米代が毎日握れ／＼ば

ようがんですが、この不景氣ぢあ、一日の米代も出ませんや。嬬や子供に食はして行くことが出来ないもんですから、散散のありさまですよ。おはすかしい話ですが、嬬も小供等も内職をやつてゐましたが、この不景氣で、仕事もなく、まつたく皆餓え死にですよ。」

洋服着 「全くですね、私し等もそうですよ、生じ、學問をしたばかりに、労働したくとも、體が云ふことをきゝません。車引きも、荷物負ひも、やりました。土をもつて車力の眞似もやつて見ましたが、次の日に體の節々がいたんで起きることが出来ませんで、止むなく止めねばならなくなるんですよ。」

労働者 「全く體がきかないのも困りませうが、體がどんなに頑強でも仕事が無いのにあ、閉口ですよ。まあなんにしても、どうにかならなければ、仕方がありませんね、政府のやりかたも悪るいし、資本家もひどいですよ。」

洋服着 「そうですね、ひがみで言ふのではありませんが、第一資本家が、金を握つたまゝ、離さないんですから困りますね、我々の手に金が渡つて來つてありませんね、こんな時に何んの商賣が一番よいんでせうね。」

労働者 「今何んの商賣をやつても駄目でせう。そればかりではありませんよ、商賣をやつても、

小さい商賣人等は賣れなくてやり切れず、店を閉ぢねばならず、今のところ、これと云ふ商賣はありますまいね。まあ、口さい達者で、少ししやべる人でさへあれば、天理教の教師などはよい商賣のうちでせうなあ。」

洋服着「天理教の教師と云ひますと？」

労働者「遊んでゐて、口を働かしてゐれば、それに迷ふものがあるもんで、たちまち、金が出來るらしいんですよ。私の知つてゐる者等は、五年位の間に、立派な教會を建てましたからね。」

洋服着「そんなに儲かりますかね、最も家敷を拂ふて助け給へてんてこの命とか云ひますから、

信者は随分神様にもあげ、でせうね。」

労働者「あげるところではありませんよ、財産はをろか、命までもあげると云ふやうな熱心ですからね。」

洋服着「それでは、餘程御利益があるんでせうな？」

労働者「ハ、御利益があるから、家も何も皆神様にあげてしまつて、食ふ米がなくなつて始めて目がさめて、食ふ爲に今度は、本氣で信者になるんです。まあ、天理教等はこうして、皆

から捲きあげるんだから、たちまち、大きくなりますでせう。小さい教會等はすぐですかね。もつとも、教へがうまく出來てゐますよ、私も少しお話しをきいたことがありましたが止めましたがね、まきあげるやうに、うまく出來てゐますよ。」

洋服着「そうですかね。」

これで會話は終つた。二人は忘れてゐたものを思ひ出したやうに、飯を食い初めた。

著者はこの會話を聞いて、天理教は、何んと世間から云はれても、金を集めると云ふ點に於いて非凡の教理と、腕と、熱をもつてゐるんだなあと思つたのである。

實にその内情を検討するときに、彼の労働者の云つた通り、捲き上げるには實にうまく教理が組み立てられてゐるのである。その教理を一過するだけでは、全く誰れでも、そうかなと思はれるものである。たゞそれは、そうかなと思ふだけで信仰に入る人は少ないであらう。然し、何回もこれを吹き込まれるならば、人間はその暗示性の然らしむるところに従つて、遂にはその人の言を信するやうになるのである。不注意と、認識不足の衆俗は、迷ふのも誠に無理からぬことである。

だから著者は次に、如何なる方法で、金品を神の御名によつて、神前に供置せしめるかについ

て、確實なる根據を示しつゝ述べることにするであらう。

而して、今天理教徒は虚心坦懐に、自らの経過と、入信の動機等をよく考へて、迷つてゐるなと思つたら、すみやかに、眞の自覺に立ち返らねばならぬのである。

彼等天理教師が、常套手段とする捲き上げ法は、その教理より出てゐるものであるから教理の一般を典據によりてこれを示し、之れが批判をして行くこととする。又天理教當局者に質す所とするのである。

以上述べた事柄について、天理教當局は三つの態度の一つを取るであらうことは豫想するに難くないのである。それは、

其一、天理教は國家公認の立派な宗教團體である。一時的のものでない。商賣とは何事ぞと。

其二、貴様のやうなものに天理教が解るかと云ふ心持ちより、相手にしないやうに信徒等に申渡すか。

其三、又は雄々しく筆陣を張つて、拙著に對論するか。

の三様の態度であることは見易すきことである。

第一の態度は著者を抗撃する姿勢に出づるに至るであらう。之に對して、著者は少しく辯じて置くことは必ずしも不要のことではあるまい。天理教徒は斯く云ふ。

「世間では天理教とさへいへば淫祠であり邪教であるかの如く思つてゐる。この頃では餘程こう云ふ觀念も薄らいで來たやうではありますが、それでも矢張り一部の人々の間には劣等な宗教の内にに入れて了つて、進んで教義の如何をも窺つて見ようとはしません。

中には世の學者と稱せられる人々でさへその著書に、天理教は淫祠邪教なりと論斷して頭からけなしてゐるのでありますが、これ等の人々は科學者の立場をも忘れて人がいふからそれに違がないのだらう位に思ふてゐるのでありませう。迂濶にも又甚だしいと云はねばなりません。天理教は六百萬の信徒を有する一大宗教團であります。六百萬といへば、日本の人口の約九分に相當する。然も年々歳々驚異に價する程の發展を示して、その勢駭々たるものがあるのであります。論者の言ふが如くんば、日本の人口の約九分は、愚夫愚婦なりといふに等しいことにならるのであります。かくの如きは自ら好んで、日本民族を侮辱してゐる事といはねばなりません。」(地場思潮社發行『天理教は如何なる宗教か』頁一——二)

右の論説を見るに、すうと一讀して看過し考へない者に取りては、誠にもつともものやうに聞へ

るであらう。道理らしく見えるであらうと云ふが、もつともらしくあり、道理らしくあるかと云ふに、左に摘録して見れば、

1、學者が天理教を淫祠邪教と論斷するのは人の受け賣りであり、科學者らしからぬ態度である。

2、日本國民の約九分が天理教徒である。だからこの約九分の信徒を愚夫愚婦と論斷するのは恰も國民九分を愚とするもので日本民族を侮辱するものだ。

上掲の二項は道理らしく見えるところであるが、非常な、詭辯のあることを見逃してはならぬのであります。學者は天理教理を中心とする、天理教々團に對して、宗教學的研究によつて、得たる結果上、淫祠邪教と論斷するに至つたものであつて、決して、受け賣りの、悪むいと人が云ふから、悪むいんだと結論を決定する學者は一人もないのである。そんな學者がもしあつたにしても、六百萬の信徒があることから、その信徒の言も一應は聞くだけの熱心さが、少くとも、科學的に宗教現象を取扱はんとする者には、だれにでもあるのであつて、この科學的態度の無きものは眞の意味の學者とは云はぬのである。たゞの物識り、とは言ひ得るかも知れぬが、學者と

は如何にしても云へぬのである。この學者と云へぬものを學者と云ふのは天理教の勝手につけた名稱である。然れども、天理教に對して、淫祠邪教と評論せるものは學者ならずと雖も確かに、卓見を具有せるものであることは余もこゝに論斷して置くところである。よし、その結論が、深き研究に俟たずして導びき出されたものであつても、確かにその人の論斷が、肯綮にあたつたものであると云ひ得るのである。それは、以下順序をふて述べる、内面暴露によつて、明瞭に讀者の眼前に展開され來ることであらうから、こゝでは深く論述せず、後に譲ることとする。

たゞ、こゝでは、天理教側の辯論は自の非を掩はんとするの窮策の然らしむるところにして、之れを目して、淫祠邪教と評するを妥當とするものであると云ふことを、知つて置いて頂きたいのである。

次に第二の問題であるが、この論たるや實に論理すら辯ぜざるものゝ論理であると云はねばならぬ結論を、導びき出してゐると云ふことである。

先づ、日本國民の約九分が天理教徒であると云ふことから、吾人は天理教徒にあらざるものは日本國民の約九割一分であることを知ることは、いとも容易な數理である。さて、



天理教徒——日本國民の約九分

故に

天理教徒をば愚夫愚婦と云ふことは、

日本國民の約九分が愚夫愚婦だ。

故に

斯く論斷することは日本民族を侮辱するものだ。

と云ふにあるのである。然るにこゝで、注意すべきことは、彼等天理教徒は、自らは「お道の人」と稱して、救はれたるもの、優れたるもの、因縁のよいもの、と稱する。が、天理教徒以外の人を以つて「世界並みの人」と稱するの一事である。然もそれ等の人々は救はれ、優れたる因縁のよい彼等天理教徒の反對なるものなる故、救はれざるもの、劣れるもの、悪因縁のものとなることである。

さて問題はこゝにあるのである。學者先生は、日本國民の約九分を愚夫愚婦と稱するのが日本國民的か、それとも、日本國民の大部分が、迷へるもの、劣れるもの、悪因縁を積んだ、所謂過去世に於いての悪人だと評するのが日本國民的か？

これ等は考へるまでもなく、後者をよく評し前者をして前者たらしむるやうに評するのが、學者ならざる普通の俗人でも、日本國民でさへあれば、當然過ぎるほどの當然なる論斷であると云はねばなりませんまい。

殊に、天理教徒の實情を見るに、實際愚夫愚婦の寄り合はせに於いておやである。されば、數の多いと云ふことが、必ずしも、優勝なる、宗教教團であるとは云ひ得ないのである。嘗つて、釋迦が、次のやうなことを云つたことがあると聽く。

「千人の人間中に於いて、耳の一つより無い人間が九百九十九人、耳の二つある人間が一人あつたとしたら、その二つある耳の人間を片輪だと云ふであらう」

と。これを、そのまま、そつくり天理教徒にあてはめることが出来るのである。愚夫愚婦が少數をもつて、常識のある、文化向上に貢献してゐる普通人を目して「世界並みの人」救はれざる人「悪因縁の強き人」として遇するのである。如何に、盲目的態度であるかど知れるのである。

次に商賣だとは何事だと云ふであらう。神聖なる、宗教事業にたづさはるものに對して商賣と云ふは何事ぞと、食つてかゝるかも知れぬ。だが、天理教徒諸君よ、心を静め、所謂、君等が常

に口にする「たんのう」(我慢と云ふ意)して、手を胸にあて、よう聞かれよ。宗教一般は、慰安を與へてその代り報酬を受けとつてゐるのが、現代に於ける如實の宗教團體に於ける社會形態なのだ。嘗つて、某大學文科宗教科に籍を置く男が、こんなことを云つたことがある。

「金を取つて慰安を與へることを批難するけれども、物質で精神的慰安、安心を得たら少し位の財産位い易いものではないか」

彼はまだ、三十前の男である。無形の精神的なもの——これも、實踐的効果を奏する、生活指導に對する力となるものであればいざしらず、單なる借物貸物の理だの、たんのうだの、ひのきしん、だのと云ふやうな教理——を受けて、有形なる物質をあげさせる等々は、實に宗教の阿片性を露骨に表明したものである。これを商賣と云はずして何んと評するか、與へることのみあつて、受けることなくして實社會に働きかけることのみが、現代にありて最も價值ある宗教的態度と云はねばならぬのではあるまいか。これ等の天理教々師に對しては後述することとする。こゝではたゞ、教理を與へて、金品を受け取る天理教々師の態度は、商法的態度であり。従つて、商賣であり、營業であると云ふてもよいのである。

だが然し、教理をきき、有難いと思ひ、餘裕のうちから、志として教師に禮を差し出すは所謂禮儀として、商賣と斷することは或は早計に失するかも知れぬ。だが然し、初めより、神前に供へせしむべく、上げさせるべく利を貪ぼらんとして、教説をあへてするものがあるならば、それは一般の商賣人よりもにくむべく、何等かの取締を要とする、一大恨事であらねばならぬのである。

然るに、天理教の實狀はどうであるか、まさに、醜き形態を横たえ、暴利をむさぼる、悪商人にもまさる行爲を恬として恥じず、神の名にかくれて、如何ばかり、良民を泣かしめてゐるか。然も勞働することなく、口先きばかり、うまいことを並べて、搾取の爪をとぐは、これ等遊民的の天理教々師である。次に示すものは、比較的若輩の天理教徒で、宗教心の有る人間の述べたものであらうと思ふ。これによつて、天理教内に於いても、迷から目覺めかゝつてゐる人間のあることを知り得て、たのもしくもあるのである。即ち、それは、

「近來不思議な御助けが少くなつたのは、遊民に等しい教師が多くなつたからだと思ふよ……中略……お助けに専念するどころか、教會は全くオフィス(office)店、商賣)化してゐる處が僕を知つてゐるだけでもザラにあるよ」(「みちのとも」第二十九卷第十九號頁六六——六七)  
とは、眞實のことを示すものでなくて何んであらうぞ。

然も、天理教は、純信仰派と、經濟派との二流の傾向があるときく。そして、經濟派（外的勢力をはらんとする方のもの）が本部であり、而して實際の勢力もあると云ふことである。これによつても、既成天理教の教團に宗教の精神は失せて、個人の胸底にのみ眞の宗教心あることを、析出するのは容易すいことではないか。即ち、上掲の論者は眞に信仰（所謂現在云はれてゐるところの）を有するものであり、論者の論鋒にあげられてゐる、オフェイス化する教會は、所謂著者の「天理屋」であるのである。商賣屋である。藥九層倍以上のもの、と云ふことである。

國家は斯る、無資本で出來、然も、非常な利益をあげる斯る商賣に對して、營業税を免許し、額に汗する勞働者の、血と汗との塊りたる、勞金の如何程かを沒收するとは、そも何れに、その根據を有るものであるか、形式の時代はもうとつくに過ぎ去つた筈だ。その形式を見ることなく内容實質より、物事の判斷をなし、營業化した、以上の如き、教會、寺院には重税を加すべきである。圓る儲けはあに坊主のみならんやである。

そればかりで無く、教師養成も一つの營業と見ることが出来るのだ。眞偽は今保留して置くが、教校（彼等教師の養成所である）を卒業するには、三ヶ月で二百圓近く入用だとのことである。而して、その實情を知るに至れば、大金を投じて修得することを投げ出すに至るものが多い。こ

れ理性に目覺めたるものゝ必然取るべき態度にして、これ等の事實たることは左の一文によつて知ることが出来るのである。

「おみちにも無駄が澤山ある。それはお授けを頂き乍らお授けを取り次がない事、尊い時間と費用を使つて別科を出て、布教に出ない人が多くあるが、これは最も大きい無駄である」（「みちのとも」第三十九卷第二十二號頁六五）

とある如く、天理教本部より見れば、正しく無駄も無駄大むたであるに違いないのではないか。云はゞ、支店向きの免許を與ふる爲に、權利金を取る。そして、一人前と爲つたと、印を押し店をもつ事をしきりにすゝめる。店が出すのも、各人の金でやるのだ。本部は何等これに關係しない。そして、店が繁盛すれば本部にをさめる（つくすと云ふ）と云ふ。こゝで、小さい説教所又は宣教所は食ふものも食はずに親教會（上級の教會を云ふ）につくすをやる。即ち金をおさめるのである。斯くて、二重の搾取に會つてゐることを知らぬ。それは、天理教々理の然らしむることゝ、その教理を眞に味識し、検討するの精神、換言すれば、盲目的服従をこれ事として研究心無きの致すところである。

かくて、本部は太るに太るばかりである。中山美伎が無一文になりてより今日まで五十有餘年

を過ぎざるに、一萬の教會、六百萬と號する信徒、年收一億と稱せられるつく、金を得るに至つてゐる實狀を見ても、如何に彼等天理教の組織的擗取に奔走するかを知り得るは難しいことではあるまい。

現代の社會制度下に於いては、人をして眞面目に、熱烈にせしむるものは、生活苦を打破せんとする熾烈なる意識である。天理屋がその獨特の信仰たる、天理教々理をもつて、何人たりとも無一文と爲して仕まい、生活させねばならぬ。然も、道はたゞ布教あるのみを教へることによりて、死にも、狂に布教せしむるに至らしむる巧妙なる策戦には、何人たりとも刮目して驚かざるを得ないのである。

人は不幸不運に際してこそ、神佛を念ふものである。然もそれは安固なる生活を得んが爲めに外ならない。何もかも無くして、否無くさせられて、それを挽回する方法として、唯一つの方策を示されたならば、何人も、死にも、狂いに、その方策を實現するのが人情の必然である。天理屋は、たくみにこの人情の虚所弱點を握つたものであると云はねばならぬ。天理教が、宗教——新宗教——の美名にかくれて、普通の商人よりも一層ひどき方法に於いて、後述するであらう如き實踐に於いて擗取するの事實を見ると、何人がこれを商賣以上の商賣、惡むべき營利業と判斷しないものが果して一人たりともあるであらうか、余は斷じて無いとこゝで明確に論斷して置くのである。

次に述ぶるは、其二の問ひに對する、豫想的回答である。

この第二の態度は、常に天理教々師並に教徒の頑迷に固守する態度であつて、これを吹き込むものも、これを吹き込まれたものも、共に、「これ」を固守することをもつて、神の奉公之れに過ぎたるもの他に無しとさへ考へてゐるものであるかに思はれる程、所謂「お道一筋」を高調もすれば實踐もする。そして、斯の如き態度に出づることを誇りとさへ思つてゐるものが、實に枚舉に追まなきに驚かされるのである。

「世間並みのものにお道のことか解るものか」

こうした考へは、消極的、固定的、頑迷的態度を招來することは、誰れ人も肯定出來るであらう。これ等の態度が、知識の權威と、合理性の否定に結果することも又當然であると云はねばならぬ。こゝに遺憾もなく「よらしむべし、知らしむべからず」との封建的專制的壓迫が加へられてゐることも看過してはならぬのである。

余は今こゝに宗教家の責務を是非せぬ。だが、今までの宗教家に於いて、眞の宗教家と目され

てゐるものであつたならば、結果は神に移して、自分は黙々として他者の回心を禮心を持つて待つものである、現在の天理教々理は又之れを教へるのである。「たんのう」「たんのう」「忍耐、勘忍と云ふ意味である」と口に筆に之れを大聲し疾呼する。だから、天理教に於ける教師も信徒も皆「たんのう」に宗教的色彩を加へた理念を實踐躬行してゐる筈である。否、眞に宗教的信念に自覺したものは起座進退少しのゆるがせもなく此の宗教的色彩的「たんのう」を實踐具現すべき筈のものである。そして、教内に於いて、上位にあるものにおいて、最も著しくこの具現を爲すべき筈である。「上の行ふところ下之れを倣う」と云ふ命題は他に於けると同じやうに、矢張り天理教内に於いても行なはれなければならぬ。それが當然であり、道理に計つた考へでなければならぬ。

だが次の様な一小話がある。

「大和毎日對天理教名譽毀損事件と云ふのがあつた。その原告は松村吉太郎であり、被告は田中豊州、西村嘉三郎である」

余はこの二行にも満たぬ小話と云ふのもおかしなほど、暗示的な言辭を掲げることである。事件の起りがいつ起きたものであるかも我々に取つては問題であるまい、事實が無根のものであるか、有根のものであるかを疑ふものは奈良地方裁判所で問合はせればよい。余がこゝに贅言するまでもなく、詳細はその人の眼前に展回されることであらう。我々はこの事實と、天理教々理に於いて或る人が云ふ天理教に於ける四道德の消極的道德の一つとさへ數へ上げてゐるこの「たんのう」てふ教儀とが、如何に關係するかを考へれば足るのである。

被告等が如何に爲にせんが爲に行はれた、中傷讒誣ざんごをしたものであつても、天理教に於ける大御所とも見做し得る松村が何故に宗教的色彩的たんのうの態度を保ち得ることが出来なかつたか。まことに、眞理を把持するものであつたならば、それ等の中傷讒誣は些々たる茶事にあらざるか。宗教家ならずと雖も、度量の濶大なものは、以上の抗撃に對して平然たる態度を取り得るものは多いのである。然るに、自己に屬する教師、信徒には、「たんのう」せねばならぬ。即ち、如何なる無理なことでも、横車を押すやうなことでも、天理教の教徒たるものは、神のお知らせとしてそこに不足なき心持をもつて行かねばならぬ、と教へながら、教へる自分は、この重大なる教理たる、「たんのう」の理を足蹴にして、不足心を起すのは、天理教で云ふ、「不足は不足する理、不足は切る理」を辯ぜぬ仕草である。

彼松村がこの天啓たる「不足は不足する理不足は切る理」を明確に認識してゐたならば、原告として法廷に立つ必要があつたであらうか。余は斷じて無かつたものであると明言するのである。そればかりか、彼松村に、形式的天理教の發展を念願するの心の切なるものしきりにありと云ふことを論斷するの根源を暴露したものであるとさへ思はれるのである。

何故にと云へば、それは、天理教の術語とも思はれる、天啓と稱する、上掲の語を説明することによりて明らかにたることと思はれる。

「不足は不足する理」とは何んであるかと云ふに、不足は不足する因縁があつて、不足になるのである。だから、それに甘んじて、従ふ。即ち、どんな抗撃も、それに甘んじて行ふ。それに甘んじてゐると云ふことである。

「不足は切る理」とは不足を齎す元因に對して、「はらだつ」「いかり」の念を出すことなくこれを過去の性格の所産であると見て夫を怨まず人を咎めずとのことである。これ等を怨み咎めることは何等かの因縁をもつて、教と結び着かんとすることを切斷することだと云ふにある。

これによつて、これを見るに、松村の行爲は教祖の天啓に反し、宗教家的態度に反するばかりでなく、普通人——即ち彼等お道の人てふ誇りを持つ天理教徒より見て世界並みの人人の——度

量のあるものよりも劣ると云はねばならぬのである。

さすれば、吾人は天理教々理を看板として、搾取的營業に汲々たる彼等天理教屋の、如實の姿を髣髴することが出来るやうな氣がするではないか、余は斯る點より、彼等の教理を眺て行くであらう。

次に其三の態度に對しては、余の刮目して之の態度に出でられん事を望むものである、彼等が眞に、教理の眞理を認識してゐるならば、抗撃ならざる天理教の所謂「おさとし」的の態度を持って、余の批判に答ふべき必然性をもつものと思ふ。余はたゞ、彼等が、眞向の武器とする教理なるものに、如何程の眞理性があるか、これをして眞理とする彼等の態度、彼等の説明講釋こそ見物であらうと思ふのである。

次に天理教屋の營業政策とも云ふべき教理について述べて行くこととする。讀者はこれによりて、余の前言せることが、一見奇矯の觀あれども、正鵠を失なわざるの論難たることを諒解されることと思ふ。猶ほ又、これ等教理の順序、構成の階段を知ることによつて、如何に、天理教が

その阿片性を隠蔽してたくみによそほい、「霞みの衣」的機構を有するものであるかも知ることが出来るであらう。而して最後に、斯の迷信は、社會の正義的立脚地よりして、斷々呼として排斥撲滅せねばならぬとの衝動に驅られざるものは、たゞの一人もあるまいと思はれるのである。かくて眞實の社會、合法的社會機構を修正して行かねばならぬとの念願は、社會人として等しく腦中に存するものであることは、いさゝかもの疑ふべからざるものであると、斷ずるの僭越を敢へてするものである。

## 一、體や財産は天理王命の貸したものだから返すのが當然だ、——借物貨物の理

天理教が、六百萬と號する信徒より物品を蒐集するのでなかつたならば、云ふまでもなく、短年限に於いて驚くべき發展はしなかつたであらうことは容易に豫想され得る。少くとも、教祖中山美伎女が、一文無しのスツカラカンになつたとの歴史事實を知るものに取つては、如何にして天理教が今日の大を爲し、今日の經濟的威容を整へたかと云ふ點に對して、徹底せる研究検討はさて置き、之れに對しての好奇の眼を見張らぬものはあるまい。

經濟的にはほとんど無に等しい状態より、膨大なる財力團となれる天理教の今日に對して、云ふまでもなく、天理教信徒はそのお教の有難きこと、他宗教に見られざる力の故を以つて、寄進した。最大原因によるであらうことは、あまりにも明瞭なる事柄に屬する。かくては吾人は、その財力をして提供せしむるに至る力に對しての考察を進めて行くのは、これ又當然の事柄でなければならぬ。猶又、力あるとして、その力の一般民衆に對してのはたらきかた——所謂マルクスが「ヘーゲル法律哲學批判」に於いて述べた如き「宗教は民衆に對する阿片である」との命題の阿片的宗教——は如何なるものであるかを明かにせねばならぬのである。

さて、以上の觀點より、余は、擄取的天理教師が、擄取——彼等天理教々師及信徒は取る。若しくば、取られるとは思つてゐないであげさせる。又は、返させる、とか、あげるとか、お返しするとかと云ふ言葉で、換言すれば、財物の收納、貢納は神聖なる神の御名によりて行はれてゐるのである。が、詐術を如何にするか、又一般民衆は擄取を如何にされるかを述べることによりて、上述の問題を明らかにすることが出来ると思ふのである。

だから、その方法——擄取する——及態度——擄取される——の初段階から順次に述べて行くこととする。

先づ方法の前提として、貸物借物の理と稱する教理を、徹底的に論ずる。そして教へる——勿論それは、宗教に對して無知なる民衆に對して、詭辯的論理を以つてするものではあるけれども教理として教へる——點に最も力をそぐのは、これが聞手に納得の行くやうな思想的状態を不幸にも聞手が取るに至るならば、その聞手は最早や、隨喜の涙を注いで、教師が出せと云はれるまゝに財物を取られると云ふ危険を含むものである。そして、聞手——信者たらんとするものに有つては、いみじき不幸であるが、聽かす手——天理教々師にとつては極めて大切な營業信條である。だから教師は、營業の結果としての収益を多く收めようとすればするほど、益々、熱烈に神秘的口調でまわらぬ舌に唾液を潤ほせ、ともすれば、嘔れがちな發聲器を努しつゝ、夢中に貸物借物の理を説き聞かせるにかゝるものである。この教師の態度は、恰も、實業家が、一錢でも多くの収益を收める爲めに、東奔西走する態度や、小商人が、腕をまくり手を振つて店の前を通る通行人に呼びかけて、店頭の商品を賣りつけにかゝるあの一見奇抜な風貌に類してゐる。更らに人に好感情を與へる口舌を以つて業とする所謂種々な、藝人や、下劣なる教師、嘗つて、ソクラテス時代に於いて、アテナイの地に當時の市民を詭辯をもつて、惑はし、これ等善良なる市

民より財物を捲きあげた、ソフィスト等に最も似てゐると見てもよいであらう。

而して、實業家の奔走や、小商人の態度や、教師、藝人の仕事に對して吾人はその正當を認め得るであらうけれども、正ならざるを正とし、不正を不正とせず、眞理を非眞理に、非眞理を眞理に、不明を明らかとし、明らかなるものを不明とする。所謂「弱き論を變じて強き論とする」が如きソフィスト的態度に今日の我々がくみし得るであらうかどうか？ 余は斷じてくみし得ずと斷ずるものである。

然らば、「貸物借物の理」なるものが、正しきものであり、眞理であり、明かな一貫せる理路を辿るものであり、強き論であるかを吟味せねばならぬ。だから余は之れに對しての天理教的解釋をきくであらう、そして又、之れに對する、批判をせねばならぬのである。

彼等天理教徒は次の如く云ふ。

「この神言は悉くお道の御教理の眞髓であつて千古不磨の一大經典なのであります。而してその御教理の大綱は教祖は生前中天啓のまに／＼自らお筆を執られた『御神樂歌』と『御筆先』とに示され、——中略——天啓の教理の示す處に従ひますと、人間は最初五分に生れ長き年月の



間に八千八度の生れ變りをして遂に五尺の身體にまで、成人したのであります。

御筆先きに

體内へやどし込むのも月日なり

うまれ出すのも月日せわどり

といつてその御守護の程を知ることが出来ます。而して絶大の御守護により、創造せられたる我々の身上は誰れしも自己のものゝ如くに思惟してゐるのであります。これが抑々の大なる間違であつて、決して自分のものではありません。若しも自分の所有であるならば、肉體は我が思ふまゝになることが出来る譯ですが、如何なる場合でも我が心通りには出来ないものであります。すこの一事既に肉體が我物ではないことを證據だてゝゐるのであります。然らば何人の所有であるかといふに、そは、いふまでもなく、神様の所有に屬してゐるのでこれを我々は貸して頂いてゐるのである。恰も他人のものを借り受けて、之を使用することを得ても自由に處分するを得ないのと同じ譯合であります。これ『借物の理』であつて本教の教理中尤も重要なその一である』（地場思潮社發行「天理教とは如何なる宗教か」頁一五——一八）

以上で、天理教の所謂「借物の理」「貨物の理」と云ふ意味が漠然ながらも知られたことと思ふ。

心と肉體との關係は後述することゝして、こゝでは、我れと云ふ考への主體に、この肉體——身體を神様が所謂天理王命が貸し與へたものだとするの考へである。だから、我れは我れの身體を神様から借りたと云ふことになるのである。前者を天理教的に云へば「貨物の理」と云ひ、後者をその的に云つて「借物の理」と稱してゐるのである。

さて、上掲の文を見て誰れでも感ずることは驚くべき詭辯と、怪しきほどの獨斷が含まれてゐると云ふことにある。必ずしも論理をもつて物を考へる、理知的な人でなくとも、少し注意深く物を考へる人にとりては、をかしく思はれる。斯の如き、詭辯や獨斷は、彼等一流の逃れ場所たる「天啓」に隠れてゐる。「天啓」と大きくわめく聲で、おどして、聴き手をドギマギさせてその暇に目つぶしをかける仕かけがしてあるのである。だから、「天啓」は詭辯や獨斷の隠し場所であり、見手に對しては、目かくしであり、聴手に取りては、耳を掩ふものであると云つてもよろしいだらう。

だから我々は「天啓」つて一體なんだとの問題を提出して來なければなるまい。余はごく、おろまかにこれについて述べることにする。然る後、隠れ場所より白日の下に捉へ來り、視神經を鈍くするものを取り除き、聽神經を麻痺させるものを別抉して、明かなる視覺をもつて、確かな

る聴覚をもつて、蔽ひ幕にかくれたる、「貨物借物の理」なるもの、正態を見窮める必要がある。何故ならば之れが知らず／＼に吾人を迷路に導びく第一の正門であるから。

三

天啓とは何んであるか？

余はこれについて語るであらう。余は天理教に於ける、所謂天理教學者若しくは天理教々師或は信徒等が、天理教をもつて、「天啓」の教へ、「天啓」による宗教と自稱する。併もそれを誇りとさへ思つてゐるもの、如く思はれる。確か廣池博士（天理教信者）であつたと思ふが、天理教は天啓の宗教なるが故に價值あるものであるとか述べられてゐたものを目にしたことがある。それほど、天啓は價值があり、絶対に信用していいものであらうかとの質問は、前述の、「天啓とは何んであるか？」なる問いを明らかにすることによつて、自ら明白にさるべき質問であると思ふ。彼等天理教徒は云ふ、「天理教は天啓の宗教だから大へんなものだ」と、余は天啓が何故大へんだかを述べるであらう。そして、天啓の意味さへも知らぬ、盲信的に一般大衆の盲を開き得れば幸甚と思ふばかりでなく、社會に取り、吾等民族に取り、更に不正の利を擲取せんとする徒を少しでも減少せしめ得るてふ意味に於いて、又々、文化向上の爲めに有益なることとなるであらうか

ら、余はこれが簡明に従事するであらう。

「天啓」とは「啓示」とも云はれるものであつて、その意味はと云ふに、神の性質及聖意は特に靈感を受けた人を通じて行なはれ、表徴されると云ふことである。つまり、「天啓」若しくは「啓示」とは、神が人（靈感を受けた）に神の意を傳へ又は神の意志によりて人を行爲せしむることである。神よりこれを見れば、人間に對して自己を啓示すると云ひ、人間より之れを見れば神より天啓或は啓示を受けたと稱するのである。

天啓と云ふ意義はただこれだけの事に過ぎない、そして、天理教は天啓の宗教だと云ふことは天理教は神の聖意又は性質が特に靈感を受けた人、即ち中山美伎を通じて表らはれた宗教だと云ふことである。

そこで、この天啓の語の意味する概念について注意せねばならぬことは、左の點に存する。

- (1)、神が存在してゐねばならぬこと。
  - (2)、單なる人であつてはならぬ、必ず靈感を受けた人でなければならぬ、
  - (3)、従つて靈感と云ふ意識状態はどうであるか。
- さて、(1)に於いて、神が存在せねばならぬことは、天啓成立上必ず必要とすべきものであること

とには異論はあるまい。が然し、現在の天理教徒の誰れ一人としても、中山美伎が天理王命を云ふまへまでは、神即ち天理王命があると知るものはなかつたことは確かである。何故知るものがなかつたか、云ふまでもなく、靈感を受けた人、即ち中山美伎がゐなかつたからである。して見れば、この事柄をこゝも考へるによいであらう。即ち、

中山美伎がゐて、それが靈感を感じてそれにノリウツツタのが、天理王命と云ふ神だと云ふことが出来る。して見れば中山美伎あつての天理王命であつて、いくら天理王命が存在してゐたにしろ、中山美伎が生れ出なかつたら、天理王命は今日ありつこないであらう。こう云ふと、天理教徒は、イキリ立つて辯解する。教祖がお生れになつたのは「しゆんこくげんの理」によるものだと云ふのが、お定りでの文句である。「しゆんこくげんの理」と云ふのは、神の豫言した時の當來と云ふことを意味するのである。

つまり、神が教祖を生れ出でさせるべく、ちやんと豫言してその時が當來したから、教祖が生れたのだと云ふ天理教徒の言葉をそのまま信するものに取りては問題はない。神様が云つた通りだからと信するものに取つては問題はない。が然し、同じ天啓でも、教祖の（中山ミキ）が云つた天地の出來方を知らせるものと、キリスト教又は、丸山教の天地の出來方を比較して見るに、

その説き方、出來方が異なるのはどうしたことであらう。然もいづれも天啓と云ふ點には變りはない。そしていづれもの信者はそれを信じて疑はぬ。何故かと云ふに、天啓の宗教だから、間違はない。神様が直接云つたのだから間違はないと云ふのを通例とする。

極端な例ではあるが、こゝに或る行者がゐて、神様の靈感を受け天地の出來る話しをしたとする、（著者の知れる行者で實際創造譚を天啓として受けたと云ふものがある）これを今の天理教徒はすぐ信するによいか、余は敢へて借問するのである。

宇宙は一つよりない、その宇宙が二つも三つもまた／＼もつと多くの出來方があると云はれてゐるのはどうして考へるによいか？ 此の點に附いて卑近な例を引いて、もう少し説明を明らかにして見よう。

一冊の著書が出来るには、原稿及用紙が必要であり、活字を組むものが必要である。更にそれを印刷で刷り、製本することによりてこゝに一冊の著書が出來上がる。だから、イなる現在こゝにある本が出来るには、必ず、イなる原稿、用紙、活字を組むこと、製本することを要すれども、これは同時に、ロなる原稿、用紙、印刷、活字を組むこと、製本することを必要としない。否必要、不必要ではなく、そんなことは出來ない筈である、即ち一冊の本を現在の本として出來

かすまでにはこれに要する材料と、これを造へる一定の過程とがあればよいので、その材料や、過程は決まつてゐるものである。ところが、宗教に於いては、以上の例で云へば誠に妙なことになる。それは、こゝにある一冊の本を作るに或るものは赤い紙で、或るものは青い紙で、又或るものは白い紙で、印刷すると云ふ。然もその印刷の仕方は或るものは、新式の機械をもつて、或るものは舊式の機械を以つて、又或るものは手摺りですとす。そして又製本屋へ廻す段になると、或るものは甲の製本屋へ、或るものは乙の製本屋へ、又或るものは丙の製本屋へ廻すとす。それから原稿も、或るものは甲の寄稿家の文藝の原稿を、或るものは乙の寄稿家の哲學の原稿を、又或るものは丙の寄稿家の科學の原稿を組んで、出来上つたものが、たゞ、一冊の宗教の本だと云つたら、讀者諸賢は、馬鹿なそんなことがあるか、それは、甲乙丙、又は白青赤、又は印刷、製本の巧劣が出来る筈だと難ぜられるかも知れぬ。が、實際天理教に於ける教理には必然こんな奇術を行ふ理窟が含まれてゐるのである。そして、それが、宇宙が三つも四つもあると云ふならいざ知らず。全體として宇宙（太陽系とか又は他の星系とか云ふ小さい意味での宇宙でなしに）は一つより無い筈である。更に、これは因縁の理と云つて天理教がこゝで述べてゐる「借物貨物の理」の次に天理屋として商賣をするときに、盛んにお客に——あはれクソ眞面目正直一途

な信者に——ふり撒くところの「いんねんの理」のところ申述べるだらうが、實際、こうして宇宙を作つた神様が、客觀的に存在するものとせば、「いんねんの理」より必然神様は存在せなくなるかと云ふ決論に至るのであります。

そればかりではない。人間及萬物を作つた神様——換言すれば一つの宇宙を作つた神様——がキリスト教のエホバでもあつたり、天理教の天理王命でもあつたら、一體どつちが本當の神様でどつちがにせものなのか、それとも、同一の神に名づけた異名が、エホバ神、天理王命等、なのか、それとも、天理王命とエホバ神と二體の神がゐたのか、明らかにせねばならぬところではないか。キリスト教の教理——所謂、信仰派の——よりせば、天地創造の神はエホバ神一體より無いはずであり、天理教より云へば、天理王命が一體よりないとその教理に説く。して見ればどつちかど、本物で、他が偽物なんだらう。いや、一つより有つてはならぬものであるべき筈である。

然るに不思議なことには、この本物か偽物かと云ふ大事件に關して何等の不思議とも思はず、不審も抱かざる彼等二教に於ける教師の態度は實に、盲者啞者聾者に等しき態度ではないか。更に、眞實に神を求めんとするの念の薄すき實に極まれりではないか。しかも驚ろくことには、兩

教（實際はこれ以上だが）とも、各自の神が儼然として存在してゐると號するに至つては、全くこれ等の態度を何んと評してよいか不明に陥るのである。評し得なくて不明に陥るのではない。ア、キ、レ、テ、不明に陥るのである。

然し残念ながら、これを在りと信じ、教師の言を直ちに受け入れ、これに盲信するの徒の多きことは驚ろくべきことであり、又それほど、口舌の詭辯、弱處、虚處をつく、彼等の態度の恐るべきことを知らねばならぬのである。

更に第③の問題であるが、今こゝに、天啓を得たと天理教徒内に自稱して出づるものがあつたら（實際はあつたのである。又而してその具體化するものは大西愛次郎である）。天理教に於ける信徒、教師又は天理教當事者は之れに對して、如何なる處置を取つたか、天啓は第三者のどうしても知り得ないものである。當人と神との交通であれば、第三者の知り得ないことは當然過ぎるほど當然である。然るに天理教内にこの種のもの出づるに及んだとき、天理教當局者は邪説曲説を稱へるものとしてこれを排斥したではないか。これ何によりて排斥の理由としたか、云ふまでもなく、常識の尺度を標準としたに外ならぬではなかつたか。されば余等が、之れに對して宗教學的、心理學的の考察をすることを以つて、天啓の宗教は、人間の理窟を超越したところにあり等と稱して、盲目的信者の理性が目覺めることを恐れて、目かくし、耳かくし、をすることを以つてこれ事とするは如何にも封建的舊習の「恃らしむべし知らしむべからず」式の醜手段を弄するものと云はねばならぬではないか。

實に慨かはしきことは、これ等の見易すぎ道理を辯ぜずして、いたづらに、信者の多きをもつて、天理教の膨大なるを以つて、所謂、知識的識者——その實は宗教的常識に於ては三歳の童子よりも無學なる徒——がその教に加入する故をもつて、換言すれば、皆行くから行く、皆なが悪ると云ふから悪い。皆がよいと云ふから良いと云ふ。——但し病氣が癒つたから信すると云ふことは、詳細を後述に譲る——やうな、何故に悪ると皆が云ふのか、何故に良いと皆が云ふのか、と考へることなく、人の云ふがまゝに信するのは如何にも輕薄な、輕つ調子な、盲動と云はねばならない。こう云ふと、すぐ、「御教祖が三歳心となつてこい」と云つてゐるから、三歳心になつて行くと云ふだらうが、それは教祖の意に反すること甚大である。余が教祖をして、キリス卜的、又は古來よりの大聖人と稱せられてゐるものゝ列に入れて、教祖の三歳心を解するならば、教祖の三歳心とは決して謂れなき盲信でもなければ、輕動でも、すぐ信ぜよと云ふのではな

5。一口で云へば、執着を離れて物事を見よと云ふことである。天理教に執することは、既に我意を入れてゐることであつて、決して三歳心とは云はれぬのである。もし然らずして、三歳心を何んでもかでも、云ひなりになれと云ふにあるならば、それは人間をしてよりよく生かすことなく動かせば動き、ころばせばころぶ、物體と化せしむる以外の何事でもないのである。人間にして眞に價値あり、生産に眞に全力を注ぎ、人類の文化向上に資せしめる爲に、人間に力を與へるのが眞に價値ある宗教と云ひ得ることが出来るにせよ、ウン／＼と何んでも斯でも、神様の天啓だから、教祖のおさとしおさしすだからと云つて、それに盲従するが如き態度は、活力を得るところか、それは、それこそ、「生ける骸」である以外の何物でもないのである。

さて、靈感と云ふ意識状態を明かにする段取となつたが、これは宗教心理學と、變態心理學、とに渡るのであるから、詳しくは後述に譲ることとする。

さて、此項を終るに際して、「天啓」について天理教は如何に見てゐるか、その「天啓」なるものにどんなに勝手な理窟をコネてゐるかを明瞭にする爲に、三四文引用して之れに批評を加へ、讀者諸賢の嚴正な批判に資せんと思ふのである。

所謂、教祖直傳と云つてゐる御神歌なるものより初める。これは云ふまでもなく、「家敷を拂ふて田賣り給へ」と云はれる歌の同類であつて、天啓による歌であるとする。それは、次の様なものである。

「よろづよのせかいいちれつみはらせどむねのわかりたものはない」

これに對して、前管長中山新治郎氏は次のやうに解釋を加へてゐる。

「此ノ章ノ大意ハ未ダ天啓ノ教ヲ聽カザル世界人類ガ闇黒界裏ニ彷徨スル狀ヲ示サレタルナリ  
よろづよのせかいいちれつハ全世界ノ人類一同ノ意ナリみはらせどハ神ノ遍ク人類一同ヲ看給  
フヲ云フむねのわかりたものはないトハ未ダ天啓ノ教ヲ聽カザルモノハ罪惡及ビ禍害ヲ擺脫ス  
ル道ト無上目的ニ向ヒテ進行スル道トヲ知ラズトノ義ナリ。

熟々世界ノ現狀ヲ察スルニ罪惡及ビ禍害充満シテ光明ナルベキ靈性ハ光明ナラズ健全ナルベキ  
身體ハ健全ナラズ平和ナルベキ世界ハ平和ナラズ我等人間ノ生存及ビ發達殆ド將ニ危機ニ逼ラ  
ントス是ニ於テ救済ノ要求大ニ全世界人類ノ心ニ起レリ而シテ此ノ救済ノ要求ニ應スル天啓ノ  
光未ダ斯ノ世ヲ照サザレバ全世界人類ハ方ニ疑雲迷霧中ニ彷徨シツ、アルヲ免レズ是慈悲無限

ノ救濟者天啓ノ教ヘヲ垂レ給ヘル所行ナリ」(御神樂歌述義、中山新治郎著)

所謂、天啓の教へを説く、御神歌に爲すべき解釋として如何に加言、附會の多きかは一言して明瞭であらう。この歌をうろと讀んで行けば、大概は解るが、むねのわかりたものと云ふのは一體何を指すのであるか。このむねのわかりたものに於いて、この一つの命題は、こうなる。即ち誰れのむねを誰れがわかるのかと云ふ點に歸する。さて、むねを痛めるのが神であるならば、天啓の文としてふさはしい。が、教祖のむねであれば、教祖は偏執病の具體的表徴をあらはしたものとしか見ることが出来ない。何故ならば、教祖は世界を——世界中の人類の心もちを——見透し盡したと豪語することになるから。

このむねを神の胸とすれば、何んとまあ、勝手氣儘な神様ではないか、後述するであらうやうに、因縁の行末を知つてをるべき筈の神様が、御苦勞にも人間を作つて、罪惡禍害の充満したと嘆すべきは、とつくに知つておねばならぬのではないか。神はすべからず、自分のいんねんのあらはれとして人間界を救濟すべきである。神に何んにも悪いんねんが無かつたならば、何んで、子供たる、人間に、悪いんねんの行爲をさせるのであるか。こんな未來の事も見透しの出來ぬ神、所謂、天理管長が云ふ、罪惡及禍害充満して光明なるべき靈性は光明ならず健全なるべき身體は

健全ならず平和なるべき世界は平和ならず我等人間の生存及び發達殆ど將に危機に逼らんとするきはめて、危險な現狀を未前に防止得ざる、力弱き、力無き神が何んで、「慈悲無限ノ救濟者」となり得るか!? これこそ、お隣がお茶を湧す的な噴飯事ではなくて何んであるか。

我等は、管長のこの解釋を見ることによつて、どれほどの、美辭佳句麗文を見るもそれに眼をくらませてはならぬ。彼等が人の目を眩惑せしめ、人の心を暗くせしめるものは、常に斯の如き筆法に於ける、内容空虚なるものを、形式、外容をもつてオドシつけることである。

吾人はくれぐれも、形式、外容、見かけ、によつて、その物や質や、内實を決めてはならぬ。現代は殊に、美服を纏へ美辭を連ねた言葉を弄し、會話に外國語等を矢鱈に入れ又は漢語等を無やみに混ぜる人間には油斷してはならぬ。正に、中山新次郎氏の解釋は斯如き詭辯曲論である。——不明のものを明瞭なものとする。これほど、獨斷一人よがりであらうか、又世を毒するの最も甚だしいものであると云はねばならぬ。

御神歌はこの外に天啓に關するものとして次のやうなものがある。が、それほどのものでないから、解釋はつけぬ。

「そのはずやといてきかしたことはないしらぬがむりではないわいな」

四六

「このたびはかみがおもてへあらはれてなにかあさいをとときかす」

何んとまあ、勝手な神ではないか、人間——神から見れば、可愛い子供——に説いて聞かせもせず、どれほど、いんねんだと云つて、病氣にもすれば、早世もさせたか、神が作ったものであるならば、然も、大慈悲無限な神であるならば、こうすれば、いけないぞ、あゝすれば、いけないぞと、説き聞かすのが本當である。それを知らせもせず説きもせずして、人間の行爲をすつと見るだけで、中山新次郎氏の、所謂、此の世に、罪惡禍害か充滿しなければ、といてきかせに來ぬやうな神は何んとまあ、教育に不熱心な神でないか、又子に對して、無關涉な、親としての資格なき神ではないか、かゝる點に於いて、吾人は神様——天理王命——なんぞはむしろ有難くもなんでもないと言はねばなるまい。

猶ほ一例上掲の歌に對しての解釋したものをお目にかける。これによつてもどんなに、解釋が勝手氣儘なものであるかを諒解することが出来る。

「天啓の教へは理性に超越するものであつても、理性に反對するものではない。理性に反對するものなれば、如何に天啓であつても、理性を有する人間としてはこれを信することは出来ない。ただ、理性のみで知ることの出来ない眞理や事實を神の全智によつて人間に知らせ給ふのが天啓である。此の意味に於いて天啓の教へは人間の理性に超越するといふのである」(中西牛郎氏著、「神の實現としての天理教」頁一五三)

中西氏の論斷は誠に不可思議、妙天奇烈の頂上である。氏は相當の教養ありときく。然し、氏には、失禮ながら、哲學宗教に關する教養あるやを疑はざるを得ないのである。誠らしく、天啓は理性に反對するものでなく超越するものであると云ふ。ところで、反對と超越とはどんな風に異なるかを氏は知つてゐるのであらうかを疑はれる。勿論、余と雖も、二つの概念が同じだとは云はないが、氏の述べてゐるが如く全然別個のものではない。もと／＼天啓は感情に關したものであることは、今日多少心理學を學んだものに取りては異存の無いところである。然して、天啓を感情に關するもの(天啓を受ける人の)とせば、氏の説論中に大なる誤謬がある。そればかりか

四七



彼等——天理教學者——が如何ばかり、中山ミキの夢中で口走つたことに對して、これをよく價値づけやうとしてあせつてゐるかも知ることが出来るのである。

即ち、天啓は神の御言葉である以上眞理ならずと云ふことはあるまい。(信仰篤きものに取りては)然るに、氏は何故に、「理性に反對するものなれば、如何に天啓であつても理性を有する人間としてはこれを信することは出来まい」

と云つてゐるのか、これ實に、氏が、超越と反對との概念が異ると云ふことを説かんとして、引き出したものであらうけれども、不幸にして氏の目的は達せられないのである。それは前述した通り、天啓なるものは、理性をもつて、正とも非とも判断し得ざるものである。即ち、天啓で述べられたるものが、理性では眞理だとは云はれないのである。ところがこれを、眞理だと云ふのは一體どうしたことであらうか、これ明らかに、理性に反對してゐることを認めると云ふ點に於いて、理性に反對してゐるものであると云はねばなるまいではないか。

かくの如く、詭辯はいたるところに伏在してゐるのである、讀者は注意を重ねて天理教の書物なり、教師の説教なりを聴かねばならぬ。

くれぐれも云ふ、天啓の言は必ずしも眞理ではない。それが理性に叶ふものゝみ眞理であると。

又、理性をもつて決し得ないものは、これを眞理と決するのは大なる誤りであると云ふことを、又曰く、

「天啓と申しますは神が直接に人を介して我等人類に神意を述べられたのであつて、智識や苦行や思索によりて發明せられたり考へられたりした教へとは大に異なるのであります。而して、宇宙根本の神様が吾が天理教祖を通じて、天啓を垂れられた所行のものは人類を闇黒の世界より光明の世界に導びき一切のあしき埃りを拂ふて此の世ながらの安樂世界、極樂世界となし地上に甘露臺を築き上げんとの切なる神の思召によるのである」(地場思潮社發行「天理教とは如何なる宗教か」頁三)

右の文にも見る如く、天啓は、智識や、苦行や思索と相容れぬものである。だから個人の思ひつきや、獨りよがりや、勝手なことがらが多いのである。それを天啓と信しない人には三文の價値もないのである。前述した通りであるが、こゝに天啓だと云つて、神の告を口走るものがあるとしたら(實際あつたものだが)天理教徒は直ちにこれに信用を置くかと云ふにそうではあるま

い。誰れかが、天啓だから俺の言ひなりになれと云つたところで、よも言ふ通りにはなるまい。なるほどのものでなくては、どうして天啓だから、價値があり、理性より超越したものである等とよく言へるか、實に、無自覺な、無學な薄つべらな、無知さに驚くと云ふより、アキレざるを得ないではないか。天理教が天理屋を開業してゐるうちはこれに迷ひ込む、お客の來るうちは、どうでもよい天啓を、後生大事とあがめたまつて置くんだが、こんなものは何んにもならぬのだと云ふのが、天理屋の物のわかつた人間の腹の中だらう。

それにしても、あまりにやり方が残酷ではないか、何故ならば、捲き上げる第一歩としての天啓だから。

さて天啓のことは以上で終ることとして、この天啓が、述べてゐることであるところの貸物、借物の理なるものを説明する。この貸物、借物の理を信者に飲み込ませれば、もう取るも、剝ぐも自由自在だと、ある教師が著者に語つたことがあるが、實にこの、貸物借物の理こそは、見方に取りて人生に活氣を與へるものであり、取りやうによつては、身を滅し、家を倒し、一家離散の憂目にあはねばならぬ第一段階であるのである。

抑々この「貸物借物の理」なる思想はどこから來たか、余はこれについてお話するであらう。

### 三、肉體は神のもの、財産も神の貸物

天理教々徒は、信仰が厚くなればなるほど金品を惜しげもなく教會へ教會へと運び込む。そしてこれを爲すことによつて隨喜の涙をこぼし、有難い／＼と云ふのを常とする。斯くも天理教が天理屋として營業するに至り繁盛を極め、自分の所有物——彼等は所有物にあらずとするところのもの——を、教會に持ち運ばせるには何かを先づ吹きこんでをるべき筈だ。それは何んであるかとは余の度び度び質問されるものであるが、その吹き込む第一の段階は實にこの、貸物借物の理なる怪物である。先づ我々は主觀的感情的斷論を避けて、客觀事實である彼の主張に聽こう。

「借物の理——この神言は悉くお道の御教理の眞髓であつて、千古不磨の一大經典なのであります。而してその御教理の大綱は教祖御生前中天啓のまに／＼親らお筆を取つた「御神樂歌」と「御筆先」とに示されてゐる。天啓の教理の示す處に従ひますと、人間は最初五分に生れ長き年月の間に八千八度の生れかわりをして遂に五尺の身體にまで成人したのであります。

御筆先きに

體內へやどし込むのも月日なり

うまれ出すのも月日せわどり

といつてその御守護の程を知ることが出来ます。而して絶大の御守護により、創造せられたる我々の身上は、誰しも自己の物の如くに思惟してゐるのであります。これが抑々大なる間違であつて、決して自分のものではありません。若しも自分の所有であるならば、肉體は我が思ふまゝになることが出来る譯ですが、如何なる場合でも我が心通りには出来ないものであります。この一事既に肉體は我が物ではないことを證據だてゝゐるのであります。然らば何人の所有であるかといふに、それは、いふまでもなく神様の所有に屬してゐるので、これを我々が貸して頂いてゐるのである。恰も他人のものを借り受けて之を使用することを得ても自由に處分するを得ないのと同じ譯合であります。これ「借物の理」であつて、本教の教理中尤も重要なもの、一つである。「天理教とは如何なる宗教か」一五頁——一八頁

さて讀者諸君、此の文を讀まれて、なる程とうなずける節に注意されることが出来ませう。この注意を喚起することより、成る程そうかなあ！と云つたやうな考へを起すものがありますれば、その人ははや、天理教の營業政綱に目がクラミ、搾取されるべく運命づけられた人也と云つてもよい程度の人であります。

このことを、よく考へねばなりません。この文中には、巧みに伏せて織りなせる、詭辯があり、欺瞞があることを洞察せねばなりません。余は之れ等を洞察する注意と努力とを用ひない人のあまりに多きを歎げかはしく思はれてならないのである。普通の人ならいざ知らず、相當教養のあるものが、かゝる詭辯を伏せしめ、瞞着を隠してゐる。上述の如き文字の上だけを見て、成程と感心する人々の多きは、余をして云はせしむるならば、その文字をそのまま、端的に受取る人の常識の罪ではなく、その人々に宗教的知識の欠けてゐると云ふことに歸すべきである。勿論天理教徒となるものは後述するであらうやうに、種々なる動機や、入信の過程はあるであらうけれども、確かに斯る宗教的教養不足の爲に、斯くの如き詭辯を含蓄する一見なるほど、思はしむる文字を、反省なく受け入れた罪に歸せねばならぬのである。

故に、余はその詭辯の個處を引き出して、讀者諸君と俱にその詭辯、其爲にせんが爲めの文辭の連なりを見て行こうと思ふのである。

そして彼等が何故にこれを

「この神言は悉くお道の御教理の眞髓であつて、千古不磨の一大經典なのであります」

とか

「本教の教理中尤も重要なものゝ一つである」

とかと、云ふかについても述べることにするであらう。先づ我々は、

「天啓のまに／＼親らお筆を執られた『御筆先』『御神樂歌』』とに示されてゐる」

との文より、その御筆先、又は御神樂歌なるものを見る必要がある。これより先きに前節に於ても述べた如く、天啓そのものは全く個人の意識より生れたもので、神あり神のお告げあり、お告げを受ける人あり、人の言語形式を借りて、神様のお告げだと、人が口外に述べられたものでなく、人あり人の口より漏れた言葉を述べた人が、これは神の言葉であり御意志であると云ふに至り、こゝに天啓と云ふ考へが起きて來たのだと云ふことを充分理解せねばならぬのである。即ち、神あつての人間にあらずして、人間あつての神であると云ふことを銘記せねばならぬのである。だから、神あつての人間に意志を傳へたものであると云ふことは全く、發生的根源的に反對なのだと云ふことに深く意を留めねばならぬのである。若し、これを逆にしたならば、神秘論者になり、幻の世界を畫き一人悦に入り、功利主義、獨善主義に陥り、佛教に於けるが如き天人とて一人よがり、のものになるに過ぎざるに至るのであります。一人よがり、結局馬鹿であり低脳

であり進歩發展の志の無いものに過ぎませんことは、余が今こゝで、こと新らしく喋々を要する必要はありますまいが、割合に多く、この獨善主義者や、天人が多いので、こゝに注意を必要とするに至つたのであります。これでも解からない人には、余は、認識論と一般宗教學とを研究されんことをその人の一生の重大な事柄として、且は又、その人の最も大切な處世法として、又はその人の利益の爲に、切に切に希望して止まぬ次第である。

それから、前節にも既に述べたところではありますが、天啓の文書は、天理教の教典だけでは無い。他にも澤山ある。そしてそれが、悉く異つてゐるのである。——こう云ふことを知らぬのが一般の人々であります。實際は天啓の文と云ひまして、舊約聖書をはじめ、丸山教の教典又はマホメットの教典、余の知れる行者の（現在猶ほ生存す）天啓の文字など搜せ出せばザラにある——この異つてゐる天啓を一體どう説明すればよいのか。若し天理教の神様が本當にあつて、本當に教祖中山ミキが神様の言ふことを間違ひなしに之れを神様の云ふなりに書き寫したものとして、この出來上つた天啓の文が他のものと同一事項——例へば天地創造の話——の上に異つてゐるところがあるのを、他の宗教ではその異つてゐるまゝを主張するであらうし、天理教は天理教で、その自分のものを主張して、相互が反對になるものを何んの不思議もなく受け入れてゐる

る。——現實の信者の實狀では——あまりにも無自覺な、反省のない思慮の足らぬことではないか、最つとも、天理教屋は、これをきかせるに、目つぶし、鼻つぶし耳つぶしをかけてゐるのはどこまでも巧妙なやり方ではあるが、この、目つぶしにより盲者とせられ、鼻つぶしで、嗅覺麻痺症にさせられたり、耳つぶしで、聾者にさせられてゐるとは、あんまり蟲がよすぎはしないか、あんまりお人よしではないか、生きてゐるのか死んでゐるのか譯の分らない生活態度ではありませんか。それで財産は取られそれでも醒めずに有難い／＼と手をあはせ、食はれないと知つて、唯一の食ふ道即ち、教師たらんとして熱心になり、悪ると知りつゝ他の善良なる、人々を信者に誘ひ入れる過程は一括して後述することゝするが、これ等に目醒なかつたならば、これこそ社會と云ふ大きなことを持ち出すまでもなく、その人の一生に取つて由々しき大問題を惹起するものであると云ふことを、敢へてクドイやうだが注意を喚起して置くことゝする。ついでだから述べて置くが盲者にし、聾者にし、嗅覺麻痺症とする怖るべき藥物——精神的の——は實に彼等が尊んで云ふところの「御神樂歌」にある次の文句である。即ち

「三三さんさいころをさだめ」(御神樂歌一下り目第三句、御神樂歌述義十九頁)

なるものである。この意味を云ふと一言にして述べれば、理性の心をなくして三歳の小兒の如

き心となれといふことに解してゐる。これだけによつても、どんなに、彼等の言ふがまゝに、ならなければならぬかと云ふことを強く、深く、吹き込むかゝわかるではないか、これを強く深く吹き込む底意は結局、自由にすることによつて、財物を捲き上げると云ふことに存するのである。實に怖るべく又誠に憂ふべき手段方法ではないか、ついでだから前管長のこれに對する解釋を述べて置く。

「此ノ章ノ大意ハ信仰ノ心ハ純一無偽ニシテ神ニ依頼スベキコトヲ示サレタルナリ。さんさいころをさだめトハ三歳小兒ノ心ヲ守リテ失ハザルベシトノ義ナリ。

教祖嘗ツテ曰ハク三歳小兒ノ心ニアラザレバ吾ガ教ヲ信ズルコト能ハズト蓋シ纖毫ノ邪念ナク世ノ惡習ニ感染セラレズ和粹ノ氣内ニ充滿シテ父母ヲ慕フコトヲ知ルモノハ小兒ノ心ナリ然ラバ則チ神ヲ信ズルモノハ此ノ心ナリ道ヲ守リテ他ニ移ラザルモノハ此ノ心ナリ孟子曰ハク大人ハ赤子ノ心ヲ失ハザルモノナリト蓋シ其ノ純一無偽ナルヲ謂フナリ。基督曰ハク此ノ小兒ノ如ク謙遜ナルモノハ天國ニ於イテ至大ナルモノナリト。蓋シ小兒ノ疑ハズ傲ラズ貪ラザルヲ謂フナリ老子曰ハク氣ヲ專ニシ柔ヲ致スコト能ク嬰兒ノ如クナランカト蓋シ純一無シテ含和ナルヲ謂フナリ要スルニ三賢ノ言フ所ハ其ノ旨各々異ナレドモ道ノ極致唯小兒ノ心ヲ以テ之ニ

到達スベシト云フニ至リテハ則チ一ノミ而シテ今我が教祖ノ教へ給ラ所モマタ同ジ抑モ亦妙ナ  
リト謂ヒツ可シ

こゝにも又、我々は彼等が隠険なる手段、勝手なる熱があることを見ることが出来る。勿論、人は純一無雜、清淨潔白であることは他の宗教ばかりでなく道徳倫理の等しく主唱するところであつて、決して殊新しく、こと新らだて、偉らそうに述べるにあたらぬところである。然も、この解釋の言の中にも三歳小兒の心となれとある。赤子の心を失なはざれとある。小兒の如く謙遜なれと云ふ。疑ふ勿れ、傲るべからず。食ぼるべからずと云ふ。而して、自らはどうか、三歳心でないから、理窟もコネル、謙遜どころか傲然と構へる。食ぼる勿れと云つて置いて、食ぼるに食ほり遂ひに一文無しより今日の大を爲したではないか、食ほらなかつたなら、今でも矢張り一文無しであるはずだ。今でも、食ぼる意志がなかつたならば、それ等の財物はいくらでも使ひ道はあるんだと云ふことは、毎日報せられる、新聞の三面記事を見てゐるものでさへあれば、誰れでも氣のつくところではないか、これ等については後述することとする。

さて、大部話しが、それたやうだが、本道に歸へつて、お話しを進めて行くことゝしませう。

もう一度天理教の主張を見ますと、

「人間は最初五分に生れ長き年月の間に八千八度の生れかわりをして遂いに五尺の身體にまで成人したのであります」

とあるのを讀むことが出来る。これが又非常に面白いのでありまして、一體どうして、五分の人間が五尺になつたかと云ふと、これは、

「人間創造世界創造の原始的事實に基づくものである」即ち、

國床立尊 人間——眼、水氣、濕ひ 世界——水一切

重足立尊 人間——温味 世界——火一切

月讀尊 人間——骨突張り、男一つの道具 世界——竹木一切突張り

國狹土命 人間——皮、女一つの道具 世界——金錢縁談萬づ繼ぎ

大戸邊命 人間——爪、毛、誕生、成長 世界——動物植物礦物一切引き延す

雲讀命 人間——飲食出入

世界——水氣上下

惶根命 人間

息吹き分け  
物聞き分け  
物言ひ分け

世界——風切一

大食天命 人間

生れる時親子の  
縁切り  
死ぬとき此世の  
縁切り

世界——切れ物、刃物を初め切斷一切

伊邪那岐命人間——子種

世界——種物一切

伊邪那美命人間

女の雛形  
人間種蒔代

世界——苗代一切

人間の生活力、及び生活機能並びに生活に必要な物質は、以上十種の神の貨物である（大平良平著「人生の意義及價值」五十五頁——五十六頁）

と明なるごとく説明してゐる。以上十種の神が作り爲せるものであつて、人間は最初五分であつたと説くのである。この點——即ち、五分の人間が八千八度の生れ變りで五尺になつたと云ふ點で、何んでも科學説にあてはめればよいことと思つて、これ本教が進化論と同一なる所以なりと、大いに鼻を高くしてゐる天理敎學者があるが、然らば借問す。

1、神によりて創造の當初五分に作られたるものなるに、何故に八千八度の生れ變りを爲せる今日等しく五尺の人間でないか？ 身長の高低、肉體の肥瘦、等を現はすに至つたか。

2、進化論一般に於いては「自然淘汰」「適者生存」等の必然の發展として、ハックレー氏の「自然に於ける人類の位置」に於いて述べてゐる「人猿同祖説」と如何に關係あるや？

3、更に人間が五分であつた。それは、天理敎の創造物語りである泥海古記によれば岐魚と巳とが人間の祖先になつてゐる。さて、生物學、人類學、又考古學より古代人は巨大なる體格を有してゐたとの實證があるが、これは、進化論では説明がつくが、天理敎では説明が出來まい！これを如何にするか。

4、國床立命——男神、重足立尊——女神とが相談して、  
「此うして廣い世界に吾々兩神居る丈けでは何の樂みもない。一つ人間といふものを拵へ

てその陽氣遊山を見て樂まうぢやないか(大平良平著「人生の意義及價值」三十三頁)

これによれば、天理教の神は創造の當初に於いて、何の樂しみもない。故に樂む爲に、人間を作つたことゝなる。然らば、天理教の神は神自身が樂しもうとしてゝあつて、功利主義的な、得手勝手な神ではないか。

上述の如き四點に於いて、天理教々理は、よくこれが解答を爲し得るや如何に？第一問に對しては、「いんねん」——後述する——を取つて來るだらう。そして第二問に對しては、進むに従つて成長すると云ふ點で進化論的だと云ふかも知れぬ。又第三問に對しては、進化論だと主張する説明を放擲せねばなるまいであらう。第四問に對しては、神の功利主義によりて生れ出だされた人間に何故苦しみを與へ、迷ふごとき心を作り與へたかに對して窮するであらう。又、借物は肉體財物なりと説くが、神の創造せられた點によりて、心も又神の借物ではないか、それを何故に心は自分のもの、肉體は神の借り物だなどと説くか？肉體も又神の作らせたものであると云ふ點で、神よりの借り物なのだらう。してみれば心も又神の借りものだとするに何の不思議がある？それを、神の借り物は肉體だけだとするは神もあんまり無茶ではないか。斯くして、造つた人間

の心が惡るいから、苦しい思ひをするのは當然だとはこれを如何に解しても、智惠無邊、大悲大慈の神だと云はれるか。斯くの如く経緯を経てゐる天理教々理を、信徒諸君は知るのであらうか、又知らうとも思はぬのであらうか、知つて信するものとせば、余は何事も之れに對して言ふ言葉を持たぬ。哀れにもその人々は、最早や天理教の外觀に眩惑して百尺竿頭一步を進めんとするの氣宇無き人として何事も問はない。が然し、知らずして信するとせば、余は、その人の不熱心により如何ばかりの損失を招來してゐるかを憾まずにはゐられないのである。又それでは、天理教徒として教それ自體に對して不熱心な信者となりはしないか。自ら奉ずる教の教理を研究しないほど、これほど教祖に對しても不熱心なことはあるまいではないか。それ等の人々よ、諸賢はたゞ天理教々師の言に欺かれず、虚心怛懷に靜かに自分の教典を研究して見たまへ。そして自分のものになつたならば、それこそ最も價値あるものであるのだ。請賣的のものは不純である。余は國民の連帶責任てふ立場より、又はその人個人に對する人間愛よりして、右の言辭を提供したいのである。然らざれば、諸賢は遂いに、天理教屋の營業政策により、漸次擽取されて、とゞのつまりは、天理教々師とならせられ、無一文となるにあらざれば、嘘と知りつゝ、人を欺むくの行爲を敢行するに至るであります。その人の不幸ばかりでなく、又社會に無生産的な遊民を



一人作ると云ふ點に於いて、誠に憂ふべき結果を招來すると云はねばなりません。この理が解りになるならば、余は勸む、偏へに勸む、徹底的な研究をせられよと、研究が徹すれば、自身一人が悟得するものであることを、附記して研究者の爲めに光明を點じて置こう。

いづれ、お話しすることではありませうが、天理教の神即ち天理王命は實在するかしないかについて、一言思ひ出したまふを述べて置くこととする。

#### 四、天理教の神が存在するとは眞赤な大嘘言だ

余は右の一命題を掲げやう。何故大嘘言であるか、このこと理由は詳しくは後述すると思ふが、まあ、こゝにも述べて置くこととする。天理教では、天理王命を、親様とか、實の神とか、もとの神とかと云ふ。これは實の神とは實ならぬ神、即ち嘘の神に對してゐるであらうし、もとの神とは末葉の神に對立しての云ひ方であらう。まづ、教徒の權威廣池博士の所説をきこう。

「始めは南無天理王命といへり。南無は神の本體にして、即ち宇宙の形を指す。天理は宇宙の生成活動變化の有形無形の理を意味す而して神も人間も泥海の内又は暗黒の中より組織せられて今日の光明世界となり文明社會を現出せるものと云ふにありて其の説は今日の所謂進化説に一致

せり、其の十種の神とは、此根本神靈の任務の分類なりといふ。云々」(三省堂、日本百科大辭典第七卷七四頁中段天理教の項参照)

先づ注意すべきは始め南無天理王命なる文字でなければならぬ。宗教學も、佛教もやらぬ人間なら、なるほど南無と云ふ意味は、神の本體で、即ち宇宙の形を指すことだと思はれるかも知れぬが、この南無てふ意味を知つてゐる佛教學者や、宗教學者や、たとへ、概論であつても、佛敎書若しくは宗敎書の四五冊も讀んだ人の眼をくまますことは出来まい。廣池博士は知つてか知らなくてか、斯る解釋を南無に附したのは何等かの根據があるに相違あるまい。その根據は天啓の文たるが故である。天啓教と自ら誇る天理教のコジツケである以外の何ものでもないと云ふことを知るは、學の見地より見てあまりに俗學的なことではないか。それとても、博士が、これを博士の名に於いて天理敎信者を信用せしむるに足ると思召してをられるとすれば、むしろ、その非を鳴すよりも、其の態度を嘲笑せざるを得ないあはれさを感じるのである。中學生でさへ、博士の如き意味に南無を解せないと云ふことを讀者諸君とともに見て行くことゝしよう。

「南無(佛)譯して歸命といひ、二重にして『南無歸命』といひ更に『南無歸命頂禮』といふ。要するに佛に救ひを求め、生命を捧げて佛に歸投する意」(塚本哲三氏著「現代文解釋法」要語篇

「南無(感) (梵語 *Namah* 又は *Namo*) 歸命、頂禮又は眞實と譯す。(佛) 佛を祈るとき冒頭に用ふる語」(文學博士金澤庄三郎氏著、「辭林」八八七頁)

「南無(梵) *Namah* 又 *Namo* の音譯、後生を助け給へと願ふ意、救我、歸命覺、恭敬、信徒等と譯する。南摩、那謨、納慕、」(服部宇之吉氏小柳司氣太氏共著「詳解漢和字典」二四三頁上段參照)

「南無(佛) 後生を助けたまへと佛に祈る語救我、歸命頂禮、眞實など、譯す。釋氏要覽唯識鈔云、梵語——、此翻爲名、卽是歸越之義也。」(簡野道明氏著「字源」二七四頁四段參照)

「南無は歸命 (梵 *Namah*) 梵語南無(南謨) の支那譯、南謨彌多婆耶 *Namo* *mitabhaya* を歸命無量光と譯するが如し。一般に南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經などの如く佛か法かに對して歸

依、敬禮、信順を表するの語、南無の義譯に歸命の外、敬禮、歸禮救我、度我(敬禮歸依して救済を要請するより救我度我と云ふ)、屈膝(敬禮の形狀) 等あるも、普通に歸命の譯語を用ふ。歸命 *Namas*, *Namah*, *Namo*, と歸依 *Saranam* *gacchati*, とは原語を異にすれども略同意の語である云々」(岩波、哲學辭典二〇一頁矢吹慶輝氏解)

「*Nami*, 身を屈す, *namas* (子) 歸敬、敬禮」(文學博士荻原雲來氏實習梵語學附錄二九頁) — 此處で一寸説明を加へて置くが *namah* は *namas* と同じく、此等の語根が *Nam* であつて、動詞であると云ふことに注意して置きたい。

「*namu* (南無) *Save us!*; *namo!* 「南無阿彌陀佛」. *I adore thee*, *O eternal Buddha!*」(Takenobu's new Japanese-English dictionary 五一〇頁)

さて、以上、南無の解釋について、諸家の意見を眺めて來た、こゝで、我々は、南無とは、梵語の語根である。Nam の意味がどれにでも含まれてゐることを知る、而して、南無の語根は動詞

である以上、南無そのものゝ意味も、又動詞であることは云ふまでもあるまい。上掲に注意を引いたやうに、武田氏の南無の英譯は矢張り動詞たる、Savo として譯してあるではないか。然らば、如何なる意味かと云ふに、言ふまでもなく、歸依すると云ふことである。動詞の性質として動きかけるものと、動きかけられるもの、とを含むことは御承知のことであらう。即ち、南無阿彌陀佛とは、阿彌陀佛に歸依する、阿彌陀佛に救はれんと歸投することである。南無妙法蓮華經と云ふ場合の南無も又然りである。さて、吾々は南無てふ言葉が救ふ、濟度する、歸命すると云ふことを表はすことであると云ふことに結果した。然るに、天理教切つての學者である、廣池博士は何の意ありて、かくも、明瞭なる動詞を「南無は神の本體にして即ち宇宙の形を指す」と云つたか？本體とは動かざるものゝ名稱を意味し、従つて南無は存在といふ名詞を指すのである。名詞と動詞とは前述せる如く大差ひである。廣池博士ともあらうものが、日本に於ける百科辭書の權威たる三省堂のその本に於いて何んの爲にかくも明々白々の事柄を、晦澁なる、前行説なき説を述べられたか？そこには何等かの底意がなければならぬと思はれるのである。其れには、どんな心の動きを示してゐるのであらうか？それは、博士の次に述べられてゐる。天理の意味を動詞としたことによりて我々には容易に博士の胸中を洞察出来るではあるまいか。博士は天理王命

を一體の神と見ずに、天理を動詞に解し、南無を名詞に解するによりて、博士の天理教に對する神學的獨斷説を構成してゐることが、看取される。常識を以つてしても、南無天理王命とは天理王命に歸命すると解するのが普通である、のに博士は、天理と王命とを切り離して、天理をして「宇宙の生成活動變化の有形無形の理を意味す」と述べられることによりて、天理王命の存在を否定し、實在を排するの結果を招來したのは博士のあまりにも、天理教を幽玄化せんと企てたる爲に支那思想の天の觀念と理の觀念をそのまゝ、天理教に於ける神即ち天理王命の天理に附會し之れを神道の神たらんとせしデリケートな果實である。斯くして博士は、天理教をよく見せ、よく思はせ、幽玄なる眞理ありと説かんとして、遂に天理教の最も尊敬すべき——實際は無いんだが——天理王命を撲殺するに至つたのである。次に博士の次の言葉について考證を検するのであるが、そのまへに、天理王命の名前について述べることにする。

博士の南無天理王命で氣づくことであらうが、南無とは佛教語であり日本古有の言葉ではないと云ふことも知られたであらう。何故に、天理王命なる神道の神と云ふてゐるものに（同じ天理教學者でも、日本の神ではないと云ふものがある。又余も後述するであらうやうに、日本古典の神であるとするには、天理教の神と日本古典の神との相違が、あまりに、甚だしいのは事實であ

る) 佛教語たる、南無なる語を冠したか、これについて余は、次の二點を提示し得ると思ふ。

1、教祖が若かくして淨土教の信者であつて南無阿彌陀佛と稱へ、おそらく、南無の意義を廣池博士的ならざる意味に於いて理解してゐたのであらう。

2、教祖の生前は兩部神道の影響甚だ大なるものがあつた爲に、佛語を、神名の上に冠したりとて當時にありては、新しい神様の名だとしか思はれないで、それに對し何等の不思議も感じなかつたことであらう。

と云ふ點に存する。ところが、天理王命も天理ではなくて、天輪王の尊とか、天龍王の命とかと云はれたときがあつたのである。これによりても、廣池博士等の説は、大なるコジツケである。と云ふ以外の何んらの判定もないではないか。天理であればこそ、博士の「コジツケ」も成程と人をしてウナズケさせようが、天輪王となれば、博士はこれにどんな解釋を施すのか、天が輪であるとしても云ふのか、呵々、天理教も又、天龍教だの、天倫教だのと云つたときがあるではないか、又は天の將軍と云つたときもあるのではないか。

「市兵衛は茲ぞと、尙ほも丹精を凝して祈禱した。

教祖の御容子は、益々莊重を加へ給ふ。兩眼は、日月の如く輝き、手にせし御幣は左右に上下

に凄しく打ち振ふ。

『お降りの神様はどなた様で御座います』

市兵衛は、直ちにお尋ねする。

『我は天の將軍』

凛々しい御聲には、一座の者、思はずハツと慥れ伏した。スルと市兵衛は直ちに、

『天の將軍とは、どなた様で御座います』

と押し返してお尋ねする。教祖は

『元の神、實の神である』

と答へ給ひ」(天理教同志會編輯部發行「天理教祖」四十二頁——四十三頁)

これによつて見ても、天理教の神は、種々なる名を變へたものであると云ふことが、理解されただであらう。

さて、前にも一寸述べたが、廣池博士の論によつて明らかなる如く、天理教の神は實在するものではない。と云ふことゝ、神の創造について、もう少し述べることにする。

さて、これを説くに際して、天理教徒の主張を聞こう。

「教祖は、筑前の質問に對して、流るゝが如く答へ給ふ。話しは進んで遂に、神の本體論に及んだ。」

「十柱の神の御守護、八ツの埃聞けば成程、一々道理ぢや、然らば其神々の御姿とは如何やうなものか人間のやうなものか」かう云ふ面倒な質問には、恐らく速かな、返答は出来まい。と高を括つて發した質問若し似せ者ならば、此邊で旗を巻くであらう。と勝敗を一擧に決せんとする最後の質問、筑前の聲には一入力が入つてゐた。其調子は急であつた。

「理が神、誠一つが天の理」

何の淀み給ふ處もなく直ちにスラ／＼と答へ給ふた（天理教同志會編輯部發行「天理教祖」一一頁）

又、

「天保九年十月二十六日即ち、しゆんこくげんの到來になり元なる地場にはあらはれ給ふた神様はこれを天理王命と申しあげるのであります。天理王命とは國常立命、面足命、國狹植命、月夜見命、雲讀命（又の名豊斟諄命）、惶根命、大食天命（又の名大日靈命）、大戸邊命（又の名大苦邊命）、伊邪那岐命、伊邪那美命の十柱の神様を總稱して申上げるのであります。總稱とは十

柱の神様の御守護を抽象して稱へたので、これは丁度物には體と用とに分れてあるやうに、その用は多方面であつても體は一つであると同じやうなものであります。今一つ例へて申せば、吾々の精神作用は知識、感情、意志と三つに分れてありますが、意識といふのがこの三つの機能を一統すると同じ理由であります。このやうに、天理王命の御守護は十方面に分れてありますが、この十の御守護を一つにしたものが、即ち、天理王命であります」（地場思潮社發行「天理教とは如何なる宗教か」六頁）

それから、もう一例は、前掲のものであるが叙述の必要上再録することゝする。

「始め南無天理王といへり、南無は神の本體にして、即ち、宇宙の形を指す。天理は宇宙の生成活動變化の有形無形の理を意味す。而して、神も人間も泥海の内暗黒の中より、組織せられて今日の光明世界となり文明社會を現出せるものと云ふにありて其の説は今回の所謂進化説に一致せり。其の十柱の神とは、此根本神靈の任務の分類なりといふ云々」（三省堂日本百科大辭典第七卷七四一頁中段天理教の項参照）

さて、以上三例の外に教祖は何んと云つてゐるか云ふに、十柱の神の名前を御神樂歌にも、御筆先きにも述べてゐぬ様である。そして、教祖が、神を指して用いた言葉は次のやうなもので

ある。

- 1、つきひ、
- 2、かみ、
- 3、てんりゆわうのみこと、
- 4、おやさま、
- 5、理、又は誠、

等である。これによつて、如何なる歸結が導びき出されるか、余は第一例より順々と検討して行くこととする。第一の例によりて明らかに知られる如く、

人間のやうなものでない、理が神誠一つが天の理なることを知ることが出来るのである。さて理とか、誠とか云ふものは、實在として存在するものではなくして、云はゞ名前である。例へて云へば、砂糖袋の袋のやうなもので、なにもないものである。道徳と云ふに於いて規範としてあるので、道徳が實在として存在するものでない。難しい言葉で云へば、存在判断の對象とはいかにしてもなり得ないものであつて、それは價值判断の對象としかならぬものである。だから、第二例の文中にもあるごとき、抽象されたものであり、空っぽうな、何も無いものである。だから

これを、有ると思つていくら有難がつたところで、砂糖袋の空のやつから、砂糖が出て來つことはないではないか、たまには、砂糖が出て來たか、如くに、甘く感ずるかも知れぬがそれは甘く感じたままで、胃液が出るから、食物が必ず胃袋の中へ入つたとは限らない。食物を考へただけでも、我々の胃に於いての生理的作用の必然より、胃液は出るものである。だから、胃液が出たから食物が入つたのだなんぞ考へるのは一大錯覺であるか、認識不足の人のみに眞理として受け取られる眞理である。もう一例を示すが、我々は、梅酢を口中に入れ、ば非常に唾液が出ることは誰れでも知つてゐる。ところが又、梅酢を思ひ出してもスツパイと思ふと唾液が出ると云ふことも誰れでも知つてゐる。そこで、問題はこゝにある。梅酢を思つて唾液が出たからと云つて、俺は梅酢を食つたと云ふものがあるならば、讀者諸君は、必ず笑ふだらう。が、精神的の狀態では食はぬ梅酢に唾液を分泌せしめて、本當に梅酢を食つたと思ひ込んでゐるものが随分あることを知らねばならぬ。

實際に實在せざる神に祈願祈禱をさゝげて何んの價值があるか、もし御利益があるとしたら、それは食はぬ梅酢に唾液を出して、食はせてもらつたと有難がるのと一般である。

教祖は規範を教へたのだ、教祖の教へた神は第一例によれば、規則を教へたのである、だから

神を祈ることはその規則を實行することである。その規則は道德で云ふ誠であるに過ぎない。眞實、正直、であるに過ぎない。これは宗教ばかりでなく、道德倫理の教へるところである。何等の奇もなく、ヘンテチもない。道德倫理は人間の履むべき常道なり。何んのこと新らしく偉くせしめる必要あるやである。

くれぐれも云ふ、神は理なり誠なりである。神は道德である。(天理教の云ふ神が) 讀者諸君よ、道德に祈禱祈願を諸君はするか? 道德に對して宗教的行爲をすると、しないとは、讀者諸君の勝手だが、余をして云はすむれば祈禱祈願を道德にするよりも、先づ道德的行爲、倫理的實踐を行ふことが、最も必要且つ先決問題ではないか——かゝる意味の要求を天理教の神は要求してゐることは漸次明瞭に展開されるであらう。

理は無なり——實在せざると云ふこと——と云ふことを銘記されたい。

次に第二例であるが、この第二例は、全く理——神と日本古典の神名とを結びつけるにいたく苦心してゐるのがありくと看取される。然も、遂いには、天理教の神と日本古典(古事記、日本書紀、古語拾遺等)の神との結合に於いて附會成らず、失敗に終つてゐるのは誠に氣の毒であると云はねばなるまい。そして又天理教の神と、日本古典の神との附會をせるものなりとのことに

對する余等の研究の對象には恰好の標本であるのだ。では之れを解剖臺上に引つとらへ來つて、剖見して見ることにせん。

第二例によれば、

「天理王命とは十柱の神様を總稱して申上げるのであります。總稱とは十柱の神様の御守護を抽象して稱へたので云々」

とある。さて、この文中の抽象と云ふことについては、もう説明した。だから、今度は總稱と云ふことについて、少し述べることにする。總稱とは例へば、人參、卷菜、水菜、蓮、等を一括して、青物又は野菜と稱すること、同一であつて、野菜なるものは、實は人參や卷菜や水菜や蓮を離れてはない。だから、人參や卷菜や水菜や蓬は存在するが、野菜はそれ自身では存在しないのである。有るのではないのである。無いのである。空っぽうなのである。こゝでも、天理王命はただ名前だけで、存在しないのである。と天理教學者等が明白に書物に書いてゐるのである。如何に彼等の公正なる處置の仕方よ、三讚に價するだらう。

だが、こゝに、見逃すべからざる、不敬神の事實がある。それは、上述の如き無い神様、名前ばかりで存在しない神様を以つて、日本の神様即ち十柱の神様を總稱すると云ふ一事である。少

なくとも神様の御名を一柱々に稱し奉るは當然であつて、これを一つにひつくるめて云つて仕舞をうとするのは、如何にも神に對する冒瀆も甚だしいではないか。日本古典の神は、清濁合せ飲むの浩博なる氣宇を有するを以つて神罰を下すことを差しひかへられてゐるのであらうが、これが他の神様であつて見給へ、神罰直ちどころに下るであらう。とにかく、突然あらはれた、無籍の天理王命を、日本古典に神籍を有する十柱の神の總稱だなんぞと云ふのは僭越の沙汰である。然も論者が天理教徒の一信徒で、偏執病にかゝつてゐるものならばまだ赦すべき點もあらうが（余の見るところをもつてせば、天理教に關する信徒側の著書中この偏執病にトラワレてゐるものが可成り多くあることはいつでも指適できるのである）。こといやくも、大和の本場であり、然も、一人の著書によらない協同的、云はゞ輯集である著書上に斯る事柄をオメ／＼述べてゐるのは、實に厚顔無恥不學の徒であると云はれても返答の辭もあるまい。

更に面白いことはその次の文句である。娘がいつの間にやらシワクチャ婆になつたと云ふことは何も不思議でないが。シワクチャ婆さんが娘になると云ふことは前代未聞、奇蹟以上でなければなるまい。さらに、主人の地位を取つて納さまる召使いありとすれば、それこそ許し難い事柄に屬すると云はねばならぬ。然るに實際は、次の文句の如く空な、無い筈の天理王命が、豪然と有

ると云ひ存在すると云つてゐる。然も、今まで實在として存在してゐた十柱の神様は、いつのまにか、はたらくと同じやうにさせられて仕舞つてゐる。云はゞ實在しないものとされてゐる。これこそ、メンクラワザルを得ないではないか。即ちそれは、

「これは丁度物には體と用とに分れてあるやうにその用は多方面であつても體は一つであるのと同じやうなものであります」

と云ふことに出でゐる。こゝでは完全に、天理王命が體となり十柱の神が用となつて、主客顛倒した叙述を、平氣で、涼しそうに、シヤ／＼した態度で、アツ／＼取り扱つてゐるのではないか。體と用との關係意味は素人方にはよく分りかねるかも知れませぬが、一例を引いて説明すると、人間が體で、その人間の動らきを用と云ふのであります。これでお分りになつたやうに、人間を離れて用はありません。これと同じやうに、天理王命を離れて十柱の神はないことになる、それは實在するから、そして十柱の神は作用なのであるから、さてこゝで、先きには、無かつた神即ち總稱てふ空つぼうな神が、こゝでは、何の手品の種も仕込まずに、空つぼうでなくなつたと云ふことは如何にも下手な手品ではないか。又その態度は人を馬鹿にして出た、不遜な態度ではないか。人間を人間とも思はず盲者扱へにしようとする態度は憎んでもあき足らぬではない



か。

更に、意識が、知、情、意を統括するなんぞは、今日の進歩せる心理學から見れば、まことに愚にもつかない前代の遺物である。今日の心理學の立場は、ゼームスの所謂意識の流れ (stream of consciousness) を根本立場として、知、情、意、と別れたものを統一も非統一もなく、この意識の流れを知情的とし、情的とし、意的として眺めると云ふに至つてゐるのである。猶ほ、統一云々と云ふが、今日最も進歩せる觀念論哲學にありては、意識が統一するのではなくてむしろ意志的のものが統一純化するものであると云ふのが最も優れたものである。又この例によりても、意識の流れを知情的傾向あるものと見、意識をもつて天理王命とし、知、情、意を以つて十柱の神とするならばこれ又、空つぼうな天理王命をもつて十柱の神より優位と爲すものである。廣池博士 (第三例) の、十柱の神とは、此の根本神靈の任務の分類なりと云つてゐるのも又同様、天理王命と十柱の神とを結合せしめんとして、遂に、天理王命と十柱の神との關係を漠然とさせる結果をしか齎らさなかつたのである。

猶ほ、廣池博士によりて述べられてゐる、神も人間も泥海の内又は暗黒の中より組織せられて今日の光明世界となり文明社會を現出せるものと云ふにある。さてこゝで余は問ふであらう。

(1) 神及び人間が組織せられた、泥海を一體誰れが創造したのであるか？

(2) 第一元因は何んであるか？

余はこの二問題を提出して天理教當局の回答を促すのである。たんのうくと云つて逃げられぬやう注意して置くところである。

さて、神についての考證は大要ではあるが上掲に止めて置く。

天理教の神は空虚な神である。教祖中山ミキの意識にのみ存在するものである。それは實在ではなく、實在視せられるものである。教祖中山ミキによりて考へられたる神である。考へられたるが故に存在するとは如何にしても斷ずることは出來ざる神である。その有様は頂度カントの要請されたる神の性質に等しい。存在すると思はれる神である。思はれる神なるが故に存在せざる神である。無き神であり、空虚な神である。この神に何んで力があらうや、うべなる哉、それだからこそ、神の名に於いて教祖中山ミキは、病人を癒したことが殊に多かつたと傳へられてゐる。だに現在の教師は之れをよくし得ざると嘆じてゐる。それ等の病人を癒すこと、即ち靈救と稱することの今日僅微になつたのは、全く教祖中山ミキの力によるものにして、教祖によりて口にせられた神の力によるものではない。教祖とて又、自分の意識によりて考へ出した神を實在する

ものとし、その神の力によるものと考へてゐたかも知れぬ。だがそれは、教祖が神ありと自覺したのであつて、神が教祖をして神ありと自覺せしめたのではない。教祖即ち人間が、神即ち安き國の主宰者を現實に沙婆世界の苦惱より逃避する爲に、作り出したまでである。

人間あつての神であり、神あつての人間ではない。人間は神に先き立つものである。天啓とは人間の神を作るとの行動に名づけた謂である。故に天啓の教へとは人間によりて作られたる教と云ふのと等しく、その他の何事をも意味せぬものである。

然るに、彼等は、借物の理をもつて、此の神言は悉くお道の御教理の眞髓であつて、千古不磨の一大經典とあがめ、本教の教理中尤も重要なものゝ一つであると稱してゐる。無よりの言はあり得ない、これをして、最も大切なるものゝ價值あるものとするは、そこに何等かの底意があらねばならぬ。而も、この（借物の理）の意味を知るときには、天理教々外のものには警戒すべきことではあらうが、教内殊に、本部當局者並に教會長、教師に取りては、醫學界に於てコカインと俱に重寶がられる阿片劑の如き地位を占むるものである。阿片劑なるが故に薬ともなり、毒とも爲し得べきものである。元來、阿片劑の價值は薬とさるべきに存して毒とさるべき時には有せぬものである。本來は薬とされることによりて眞の價值を發揮し得る阿片劑も悪醫にかゝつては

隠謀者にかゝつては、我利々々亡者の人非人にかゝつては、最も顯著なる毒性を發揮するものである。阿片の如き働きを爲す借物の理を天理教ははたして善用してゐるであらうか、惡徳者は無きか、隠謀者はなきか、我利々々亡者はなきか、余は不幸にしてこれ等を認めざるを得ないのである。故に、所謂、世にも尊き、世間を指導誘掖する、世の師表たる宗教家のうちの天理教を、天理屋と呼ぶ營業所とせざるを得なくなるのである。少くとも教祖の取れるが如き形態に於いて世にはたらきかけつゝあるならば、余をして之の罵倒的語を出ださしめざるものを。

## 五、なるもならぬも前世の約束

前節に於いて、身體は借りものである。而してその貸主は神であることを見て來た。天理教々理は、この借物の理を信者に吹き込むに、あらゆる方策を講じ、巧みなる辯口を以つてする。然るに、この借りたる身體に種々の差異あり、差別あることの元因を、天理教は、いんねんによると云ふ。借物貨物の理に、いんねんの理が結合することによりて、天理教的の人生の行路を決定する規範とすると説く。前節に於いても述べた如く、多分に阿片性を含む、借物の理は、結果的に見るか、發生的に見るかによりて、藥劑として、有効に吾人人間生活に作用するか、劇烈な

る毒性として暴威を振ふかに分れるのである。若しも、それを結果的に考へるならば、これは確かに、道德倫理系列に於いて上位を占むることたるは失はぬであらうけれども、これが、發生的に解せられるときは、當然の結果として、いんねんの理なるものと結合し、こゝに恐るべき毒性を到來する元因となることは、深く考察すべき事柄である。然らば、借物の理に結びつく、いんねんの理とはそも何を意味し、その、いんねんを天理教々理に於いて如何に解するかを彼等の主張に尋ねることゝするであらう。天理教學者は云ふ。

「物本末あれば、事始終ありて、およそ世の中一切萬物はこの悉く原因結果の理法に依らぬものはないのであります。物を熱すれば膨張する物理学上の法則も、春種子を蒔けば秋に穰る自然の法則も或は積善の家に餘慶あり、不積善の家に餘殃ありといふ論語の章句も汝に出でしものは汝に歸るといふ老子の言葉も乃至は倫理上の教訓も皆この因果の法則に外ならぬのであります。これ即ち、宇宙の眞理であり、天則でありますから、人生亦この理法より免るゝといふことは出來ないのであります。

私共が現在生きてゐる世の中ほど複雑極まるものはありません、身分に高下あれば職業に貴賤の別あり、又上下貴賤のうちにも自ら階級があります。或は貧家に生れて、苦勞に育つもの、

富貴に生れて榮華に活すもの、大將大臣となりて世にときめき、かしづかれるもの、或は零落するもの、轆轤不遇に人知れず涙を流すもの、車を引き物を荷ふ人、その他病床に呻吟して不時の災難に苦しむもの、數へ来れば千差萬態、吉凶禍福常ならぬのが、社會の現状であります。この種々様々の境遇應接に暇なき吉凶禍福は如何にして生ずるものでありませうか、求めざるに到り欲せざるに來るのは一體どう云ふ譯合でありませうか、神様がお與へ下されたものでありませうか、否々神様は世界一列は可愛い我子と仰せられて、一列平等の御守護を下さるのであります。して見ると如上の千差萬態の境遇なり吉凶禍福はどうして我々の生活上にあるのでせうか。これ即ち、お道が申します因縁一條であります。吾が教祖様は、

『なるまいと思ふてもなつてくるのが因縁。ならうと思つてもならぬのが、因縁』

とお説きなされた通りこの因果法則は如何に人間が工夫しても力を盡しても避けることの出來ないものであります。而して教祖様には又、

『道なき道は通さん』

と、お教へ下されてありますから、總べての境遇吉凶禍福は皆これ自らが過去に求めた道に外ならぬのであります。言葉を換へて申せば『心一つ』の理が因となり、しゆんこくげんの到

來と共にその果が必然的にあらはれ出づるのであります。

よく世間では、あの人は運がいい、人だとか、悪い人だかと申しますが、この運不運と云ふことも、所謂、各自が心の田地に蒔いた種子——即ち心使の理が芽生えて運となり不運となつてあらわれて來たので、人が與へたものでもなければ、神が作つたものでもないものであります。例へば汽車に乗つて何所かへ旅立つ事と致します。その時には何人も自分の乗つてゐる汽車が途中で異變に出會ふと思ふ人はいないのであります。若し、それが豫め知ることが出來るとすれば、誰れしも好んでその汽車に投ずるものはないのでありませう。所が途中まで進行すると、どうした機會か汽車が顛覆しました。そして乗客の多數の中で怪我をしたものや、助かつたものや不幸にしてそれが爲めに死ぬ人があります。この場合百人の乗客中三十人は怪我をして、就中五人は重傷、而も死者が二名あるとすれば即ち百人の乗客中に就いて明らかに運、不運。幸、不幸といふ事が明らかに分ります。こんな時にさへ乗らなければ、こんな悲しみを見ることもあるまいと歎き悔む遺族の人もあります。これ所謂いんねんのあらはれで、怪我をした人は怪我すべき理由、死んだ人は、死なねばならぬ理由、助かつた人は助かるべき理由があるに相違ありません。これをよく考察せずして、單に災難であり、不可抗力であると云つて、被害者

も、その遺族も、何等かの因縁で、せう位にあきらめをつけるのが、普通でありますがかう云ふ風では、永遠に希望ある人生をつゞけることは到底出來ないのであります。たとへ災難にしても、決して偶然起るべきではなく、これには必ず起るべき何等かの理由があるので、たとへこれが吾々人間の淺薄なる知識や經驗では豫測が出來なかつたまでに過ぎないのであります。

かくの如く世の所謂不幸、災難、病氣といふやうな事實が絶えず行はれていつ我が身にふりかゝるか、少しも知ることは出來ませんので、これが爲に吾々は苦しまねばならぬとしたならば、人生は佛者の所謂苦の娑婆となり、これを穢土と觀じて厭離を欲しなければならぬのであります。

然しながら天理王命が、この世界この人間をお作り下されたその目的から考へますと、決して希望なき暗黒の世とは全然違ふのであります。即ちこの世界は光明に輝く眞實の樂土としておつくり下された、神の御國であります。而して我々はこの樂土に陽氣生活を爲すべく、日夜神様の絶對なる、御守護と無限の慈悲とを垂れられてゐる、神の愛子なのであります。この可愛い神の子供が、この眞實の樂土に生れながら、不幸に沈淪して病氣に苦しみ、災難に遭遇するといふのは、甚だ矛盾のやうに思はれるのであります。が、決してさうではありません。悉

く、自らに求めて、自らか、苦し、み、自ら患むのでありまして、お言葉の

『病の元は心から』

『なんぎするの心から』

なのであります。つまり、不幸とか、病氣とか災難とかいふものは、家にあらはれると云ふものは、いふまでもなく各自が心の田地に蒔いた理の種子が芽生えたもので、所謂、因縁理法の然らしめたものなのであります。

『道なき道は通さん、通れん』

と仰せ下されたのは、この義なのであります。されば現在の境遇より救はれぬ間は永劫同じ事を繰返して同じ苦しき同じ痛みを受けねばならぬのであります。茲に不治の難病に患むのであるものと假定いたします。この人は到底助からぬことを自覚したあまり悲觀の揚句川や海に投身して自殺したとすれば、成るほどその人は自殺をしたことによつて、病苦を免れ得たに相違ありません。然し乍らこの病苦は自身が永き過去の間に自ら求めた心の理に基いてその道の通り返しをしてゐるのでありますから、『心一つの理』は何時になつても腐ることはありません。

即ち理は不滅でありますから、いつかは、『生き通しの理』にもとづき、再び身上を借り受けた時にこの苦を嘗めねばなりませんのであります。〔天理教とは如何なる宗教か〕二十九頁——四十四頁〕

少し長いものではあつたが、最も纏つて説いてゐる例を引いて見た。これによつて見るに、萬物總べて、因果の法則によりて成立するものたるを説明してゐる。そして因縁の理を、科學、自然現象、倫理問題等より説き、人生問題に觸れ、説き來り、説き去りて、遂には、因縁（元來は佛教若しくは印度哲學思想に發したものの）の本義を忘却して人生の云爲行動、起座進退の一切を心の如何に歸したのは、まことに、見あげた手品ではないか。或人生の現在には或る人生を持つ心の如何にあるとは、明らかに、因縁の意義の極度の壓縮であり、因縁本來の意義に對する明らかなる獨斷的解釋である。科學の例を引き、自然現象の如何を論じ、倫理問題を説くについて説明は、因縁の概念本來の意味よりして解釋されてゐる。けれども、人生問題を説くに對しての天理教學者の態度こそは、明らかに、世の一般大衆より權威ありとされてゐる因縁の理法を自ら教理で取る心的のみ原因をもつ「いんねん」と同意味に通はせたのは、正に獨斷であり、所謂、獅子の威を借る狐的論鋒にしか過ぎぬ。天理教的獨斷的いんねん解釋をもつて、一般いん

ねんのご概念と同じものと云ふに至つては、正に、いんねんの理法に對する大なる反逆であり、無學無知無教養の徒を欺むかんとする徹底せる詭辯である。我々は此等の狐的辯口に瞞着されざらむやうに注意に注意を怠つてはならぬ。されば、これ等のいんねん説に心酔して、家も、家族も財産も考へず省みざる、國民のいかに多きかを、その信者の數によりて知るときに、誠に慨然たるものがあるではないか。これ余をして一擲の愛國心を奮ひ起さしめて此の著をもさしめた主なる元因である。

余はこゝに、因縁の本義を明らかにする必要を感じる。故に一般的に云はれてゐる、因縁の意味を述べるこゝにする。

因縁は梵語でヘトユウー、プラトヤヤー (Hetu-pratyaya)、印度地方の俗語たる巴黎語で、ヘトユウー、パツチャヤー (Hetupaccaya) と云ふ。この語の思想は既に印度上代に有つたものであつて。因とは、果を生ずる直接の親因を云ひ、縁とは、關接(疎)助成を云ふ。而して主客を別に立てなかつたならば、因は即ち縁である。因即縁に於いては、縁相互が互に助け合つて果を招くのである。これ等の分類として、六因、十因、十二因縁等があるが、これは、あまり、専門に渡るを以つてこゝには略すこゝにする。但し、増上縁と云ふて、他法に、力を與へて生ぜし

むるか、(與力増上縁)、他法の生ずるを妨げざるか(不障増上縁)の二意をもつ因縁あり、又、心の(主觀の)の對境(客觀)を所縁と云ひ、これは、心に對して縁となりて心作用を起さしむるによりて、所縁縁と云ふものと云ふことである。

大體の因縁の意味は上述のものだと理解して欲しい。そして、大聖釋尊の取られた、因縁は實に十二因縁である。釋尊は、釋尊在世當時に於いて、既に、今日天理教々理が教へる如き、

『果は悉く自ら、心に求めて自らが苦しみ自らが患むのである』

との考へ方を一因生として之れを外道邪説として却破したのである。天理教が、心をもつて、悉くの果の因とするのは上述せる如く因縁の本義を解せざる無學の徒の獨斷偏見である。心の心が因縁ではない。故に、惡結果を果として得たとするも、必ずそれが、惡結果を得た人の心からだ。天理教はする。その結果はどうなるか。このことについては後述するであらうが、これを本來の意義より見る因縁説をもつてせば、惡結果は必ずしも惡るき心使ひより起るものにあらずと結論を導びき出すことが出来るのである。こゝに、大なる結果上の別が出来るのである。これ實に、いんねんの意味の取りやう一に起因することを考へれば、天理教學者の教説の廣義(本義)の因縁解釋を掲げて狹義(所謂天理教的因縁)と同じくこれを解釋づけるところに、天理教學

者の詐術が含まれてをり、所謂、羊頭を掲げて狗肉を賣るの態度であると云はねばなるまい。

因縁本來の意義より果を眺めるならば、天理教學者が、さも、尤ともらしく、説教してゐる、大將大臣となるも、零落するも、轆轤不遇に會ふも、車を引くも、物を荷ふも、病床に呻吟するも、不時の災難に苦しむも、運がよいのも、悪るいのも、汽車がひつくり返るのも、怪我するのも無事なものも、死ぬのも、重傷も軽傷も、歎くも、悔むも、悲觀するのも、自殺するのも、心一つの理が因となり、しゅんこくげん（時機到來と云ふ意也）の到來と共にその果が必然的にあらはれ出づるものであるとか、各自が心の田地に蒔いた種子——即ち心使ひの理が芽生えして運となり不運となつてあらはれるのだとは云へぬ、心使ひのみに、現在の果となる因を元因として位置づけることは出来ぬのである。自己の作るところの因縁が良くとも（道德倫理的に）所縁（客觀的狀態）が悪く、増上縁の都合が悪るかつたりしたとせば、結果は悪るいものたる筈である。天理教がこの所縁、増上縁をさへ、因縁起行者のいんねんであると云ふならば、それこそ、徹底的なる運命論者であり、宿命論者である。故に嘗つて、日本大學教授、松原寛氏が、（氏は天理教に關心をもつ學者の一人である）次の如く述べられたことがある。

「因縁説を固執すれば、意志の自由といふことは如何様な關係になるか、これに對する反省は試みられてゐない。それから、天地創造説と倫理説との間にも何等の脈絡もない。之を要するにその教理教説を仔細に検討し來るならば、雑多な思想が、雜然混然と盛られて常識的世界觀から一步も出でることができない。かくては思想家學者から顧みられず低級卑賤と云はれるものも誠に無理からぬ次第と云はねばならぬ。」（昭和四年八月號宇宙所載）

とは誠に、その欠點を指適せる最もよき忠言である。にも、拘はらず、天理教信徒は猶ほも自が幼稚なる思想を死守せんとする頑迷を敢行せんとしてゐるのが實狀である。いづれ、御筆先き御さとし、御さしす、御神樂歌等に對する所見は機會を得て語るであらうが、もとく、松原教授の云はれる如く、雑多混然なる思想を包含するは當然にして、余の所見をもつて之れを言へば教祖中山ミキは、決して一貫した意圖のもとに、如上の教説を爲したものでなく、その御筆先きなるものを一讀して下さい、パラノイアの氣分が多分に認められる節が多いのである。パラノイアと云はないまでも、教祖の教説は對個人的のものであつて、誰れにでもあてはまる、一貫的の教説ではないと云ふことが、云はれると思ふ。斯る言葉の持つ意味を許されるならば、如上の如き教説を統一するものとして、説き示す天理教學者の處論は非なるものであると云はねばならぬ。

いかにも松原教授のほめかすごとく、意志の自由に關しては明らかに、必然的運命の手枷足枷をもつて拘束してゐる。如何に、自己の罪を悔ゆることによつて、自殺しようとも、天理教に於いては、

「理は不滅であるから、いつかは『生き通しの理』にもとづき、再び身上を借り受けた時にこの苦を嘗めねはなりませんのであります」(「天理教とは如何なる宗教か」四十四頁)

と答へるのである。つまりは、自分が積んだ、罪を滅ろぼさぬうちは、最も價值あるとされてゐる(人の決意について)死をもつてしても、天理教は猶ほこれを許さずして、之れに罪を負はせるのである。天理教々内に於いては、實に

「その罪をにくんで、その人をにくまず」

との人間味ある格言までも、排除せられ、冷酷なる答に打ち据えられるのである。更に彼等が教説を聴こう。

「又自己に罪惡を悔いて、煩悶の結果、自殺する人もありますが、これも同じやうに自殺によつて一切の罪惡が相殺せられるつもりかは知りませんが、決して、理はさういう譯けにはまゐりません。恰も人々借金をして返済せぬ限りはいくら逃出して、死んでも債務がそれで、返済

せず、何時までも追及せられるやうなものであります。これに等しく、自分が求め來た一切の因縁が自分が死んだからとて、そのまゝ消え失せるものではありません。さて因縁の教理は『はくいんねん』『あくいんねん』『なすいんねん』と三種が説かれてあります。『はくいんねん』と申しますは、生れながらのよき因縁を申すので前世に於いては誠に眞實の心で、人を助け、埃の心はいさゝかもなく、神様の御思召に叶ふた心づかひや行をせられた人をいふのであります。次に『あくいんねん』は右と反對に前世で惡い種子蒔をして、それがすつきり切り替へも出來ず、今世へ持ちこした因縁であります。『なすいんねん』といふのは、吾々が、十五歳からこちらへ通つて來たその年月の間に善事につけ惡しき事につけ、いつとはなしに、我身我家に因縁となつてあらはれて來ると云ふ教理であります。トントン拍子で出世するのも、人から賞められるのも、敬はれるのも、不自由なく、此の世をいさんで通うして頂くのも、又は身上なやみ(病氣のこと)で苦しむのも、不時の災難に出合ひますのも、これ皆この世で爲した因縁かさなくばこの世に持ち越した因縁に外ならぬので御座います。昔しから善因に善果あり、惡因に惡果ありと申しまして、一切の心事行爲、それ相應の報ひのあることは、日常の社會現象に徴して明々白々疑ひないのであります。ただ、その應報が即時に來ることなく、稍々月日を隔



て、或は多くの年月を経て現はれるものもありますから思慮の足らぬ人は眼前の利慾に迷ひ一時の嗜慾に驅られて不義不徳を敢へてして、そのことが自ら陷穽を設けるに等しいことを思はぬものがあります。その愚を憫まざるを得ません。私共は先づ、第一に自己の因縁について深く自覺する、要があります。而して、常に自己の不幸、病氣、災難ばかりでなく親となり、子となり兄弟と生れ、夫婦となるも或は又婢僕となるのも、乃至は貧富順逆悉く因縁理法の然らしむる所であります。

『因縁よせて守護するこれ末代しかと治まる』

と仰せ下されてあります如く『はくいんねん』のものと『あくいんねん』のものが一所に寄り合ふ道理はないのであります。皆同じ因縁を有してゐる者を一所に集めて夫々の御守護を下されるので、これ神の慈悲に隔てのない明らかな證據であります。〔天理教とは如何なる宗教か〕四十四頁—四十六頁〕

如上の教説は何を示してゐるか、自己の罪惡を悔いて、自殺しても、罪を消えたとは云はぬのである。この論鋒を押し進めて行つたら、死せる屍に鞭をさへ當然として下すであらう。『あくいんねん』『はくいんねん』『なすいんねん』の三つは天理教の區分法であるが、こゝに注目すべきは、

『なすいんねん』である。前二因縁は、佛家の所謂、『善因樂果、惡因苦果』とか、大無量壽經の、『善惡報應す、禍福相承す』等の思想に既に出現せしものであるが、『なす因縁』のみは、論者の説く如く、十五歳未滿のものゝ積んだ因縁の謂である。こゝで、誰れしも、疑問に思ふことは、次の文句である。

「一切の心事行爲、それ相應の報ひのあることは、日常の社會現象に徴して明々白々疑ひないのであります。ただその應報が即時に來ること無く、稍々月日を隔てゝ或は多くの年月を経て現はれるものもあります云々、思慮の足らぬ人は……自らの陷穽を設けてゐる。……我々は先づ第一に自己の因縁について深く自覺する要がある」

てふ文中に有するものである。論者の云ふごとく、いんねんを所謂余の天理教的獨斷的狹義のみ解すれば、日常の社會現象に明らかに表示されるかも知れぬ。だがそれ等が、それ等の因果應報が何故に、即時にあらはれぬのであるか？何故に多くの月日や、年月を経てでなければあらはれぬものであるか？例を引けば『なすいんねん』によりて、病氣になつたものがあるとする。ところが、この病人が、病氣となる前、即ち『なすいんねん』を蒔かぬ前は『いんねん』『あくいんねん』が俱に相伯仲してゐるか、『はくいんねん』が多かつたが『なすいんねん』の爲に取られ

差し引いて、「あくいんねん」を積むに至り、その結果病氣になつたものであるとすれば、神は、何故に、「なすいんねん」を積むやうな行爲をしたときに、何故に直ちに、その行ひをする人間に罪を加へぬのか！一度にそんなに、大それた「いんねん」を積むことは少ないものである。これを、蓄めて置いて、一度にひどい罰を加へるとは、神もあんまり神悪るいではないか（人悪るの如く）神が、甘露臺の世界（天理教の神が理想的の世界としてゐる世界）を理想的に實現することを目的としたら、何故に、悪るい行爲にはすぐ、解決を與へ、良い行爲にはすぐ之れを賞めてやらぬのか、これをすぐ仕事としてやらぬ神様は誠に、ズボラな、仕事ギライナ、仕事を蓄めて置いて一度にやつて仕まうとするナマケモノ、神様であると云はねばなるまい。實際するものとしたら、實に厄介なナマケモノ、神様だと云はねばならぬ。悪るいことをしたら、直ぐ、その場で、お前のすることは、神の甘露臺の世界を作るにはふむきだ。直しなさい。そんなことをしてはいけません」と諭し、善いことをしたら「お前のしたことは、善いことだ。そんな行ひが、甘露臺を作るに最も理想的な行爲だ、人にもすゝめてやるやうにしない」と賞めるのが當然ではないか、そして片つぱしから、人々を善い方へ善い方へと導びいて行くべきではないか、何も病氣にさせたり、苦しませたり、呻吟させたりして、然も何も云はずにゐて、理想の世界を建てる

とかそれを知らぬのは思慮の足らぬ人でその愚を憫まれる人だと云はせて見たりするのは如何にも、無神経な、そのやり方に於ける「愚を憫まざるを得ない」神様ではないか。又

「私共は先づ、第一に自己の因縁について深く自覺する要があります」

と云つたところで、自分の因縁の分る人は將してあるか？自分の因縁とは自分の過去にやつた行爲である、天理教の教師はよくこんなことを云ふ。

「肺病は潔癖で高慢で強情で貪慾で表面の體裁と内部の精神と一致しない我儘の性分にある」

（大平良平著「人生の意義及價值」六六頁）

これによれば、肺病以下の字句が、所謂、「いんねん」となつて、肺病が發病するんだと云ふことになる。ところが、「いんねんを」自覺せねばならぬといふことは、肺病の場合で云ひますと、潔癖だと云ふこと、高慢だと云ふこと、貪慾で表面の體裁を飾り内部は異つた考へをもつてゐる我儘の性分であるといふことを知らねばならぬと云ふことである。ところが、所謂、「なすいんねん」による果として我々が苦しみを感ずるやうな場合は、「あゝあれをやつたから、この病氣になつたんだ」と「自覺」することが出来る。が、前世からの持越しの「いんねん」について、吾々は自覺することが出来るか？誰れでもよい、天理教信者よ、君は前世に何んであつたか、魚であつた

か、獸であつたか、鳥であつたか、貝であつたか、又人間にしても、どんな人間であつたか、それを明瞭に解して納得の行くやうに人に話してきかせることが出来るか？それが出来ないでゐて前世の「いんねん」だなどと輕薄に説明して満足してゐるものはあまりにも宗教的關心なく、右むけと云へば右をむき、左むけと云へば左をむき、その人が偉いと立てゝゐる人が、そんな「いんねん」等はないんだよと云はれゝばそうですかと云ふやうなものである。天理教徒の云ふ「自己の因縁について深く自覺せねばならぬ」とは、或あらはれた、病氣、災難、苦痛、不遇等に對して、元因でもない。過去の反倫理的、反道德的の事柄をさながら元因でもあるかの如く牽強附會せよと云ふやうなものである。それは、病氣なり、災難なり、苦痛なりを、少しは快よくするかも知れぬ。若し快よくするとせば、現在の病氣、災難、苦痛に對する元因を思ひ出すことによりて、(元因でもないんだが)それに對して悔ゆる意識がはたらき、心のうち、又は口外にそれを告白することによりて、心ろよさを感じるに過ぎないのである。それは、丁度「腹膨るゝわざなる故、穴をほりてその穴に向つて物を云ひ、埋めておき、心持を安める」のと一般であつて何等變るところはないのである。精神的變調は後述するであらうやうに、肉體にも多大の影響を與へることは、生理學的にも又、精神病學的にも心理學的にも、證明を學的に立派に出来る今日で

あつて、何等不思議はないのである。が、これを天理教は不思議と説き、過去のあることがらを現在の不幸に結びつけることによりて、その或る事柄をさながら、過去世の行爲にしたり、させて考へさせるのは、誠に危険なる教理であると云はねばならぬのではないか。斯くして自己満足を興へることによりて、牽強附會して「あゝわかりました、私は先生の云ふ如く、やはり何々であつたからこんな病氣になつたのですね」等とでも云ふものがあるとせば、すぐたきつけて、

「あなたは、あなたの因縁を自覺しましたね」

とか何んとか云ふて、そろ／＼捲き上げてよいなあとのバロメーターにするのであらう。桑原／＼、御注意／＼こんな自覺はせん方が本當の自覺者である。

更に天理教學者は雄辯に語る。少し長いがこれは大切なことであるから引用する。

『見るも因縁』聞くも因縁』因縁の理法は從横微細に亘つて、不變のものであるから、人の身の上としてこれを等閑に附することなく、何等自分に因縁が報いて來るかも知らないのであります故、日夜因縁の糸より免れるやう眞實を捧げて信心するのが肝要です。さるを各人はこの世に於いて知らず識らず使ふた心使ひや行爲が、積重して遂いには因縁となり身上に現はれ、事情に現はれても自己の心づかひに想致せずして、そのまゝ身上を返還すれば、やがては來世

へ持越して行かなければならぬ事になります。されば、この世で積んだ、因縁ならばこの世で切りかへるやう、各自が現在の境遇を自覺して神一條の正しき道を通る事に努力しなければなりません。さなくして、徒らに災難である、これも何かの因縁であらう、止むを得ぬ次第であるとかきらめられぬのを無理にあきらめやうとして、少しも自己の心事行爲に心附かず、世を呪ひ不運をかこつは全く愚の至りと申さねばなりません。これ等の人は靈魂の不滅を信ぜず、現場々々の心で日々を通らうとする。いはゞ、物質的の考へにのみ偏した結果であります。

さて、私共は第一に現在の自己を深く省みるといふことが何よりも先決問題であります。過去の己れがあればこそ、現在の自己があり、現在の自己があればこそ、従つて未來の自己が顯現せられる譯合であります。一切の事象無より有を生ずることは斷じてあり得べからざる事であり、同時に既にありしものが、全然無に歸すといふことも又あり得べき事ではないのであります。

譬へば茲に一つの茶碗があります。この茶碗といふ現在の形はとりもなほさず本果でありまして、その本因は何のであるかと申しまするに、いふまでもなく一塊の土塊であります。それならば、本因と本果との間に外に何物も加はらぬかといふに決してそうではなく、其處に機縁

の必要を感ずるのであります。如何に土塊が山の如く積れあつても、そのままに放置しておけば何百年経過しても土塊は土塊たるに過ぎないのであります。やはり、本因を本果に導びく機因として、神の力を待たねばなりません。この方則は宇宙に亘り、三世に通じて易らざる不變不磨の眞理で何人も動かすことの出来ない確定義であります。この方則を無形の精神界に適用して、道徳行爲を規定したるものが即ち宗教上因縁説の發點であります。従つて既成宗教として因縁説を教へぬものはないのであります。〔天理教とは如何なる宗教か〕四十七頁——四十  
九頁〕

さて、上述の文中に於いて、身上（身體の上にあらはれること）事情（自己關係中にあらはれること）にあらはれた事柄が心づかひの表はれであると心づかずに、そのまま、死ねば（身上を返還す）やがては來世へ持越して、行かなければならぬことになります。

一面もつともものやうである。然し、身上、事上にあらはれた事柄の元因は、自己の心がらばかりでないことは、前述した通りであるが、再言するまでもなく、自我を中心とする他者との關係が、種々な結果を齎すものである。こゝを以つて、來世まで持つ越すものはどこまでも心であるとの結論となるに至るであらう。こゝに於いて、釋迦が、釋迦在世に於ける、當時の輪廻論を折

伏する、常見外道の端的なる一つの古代よりの遺物たりと云つてもよい存在を我々は見る事が出来る。而して、心についての又心と身體に於いての關係を、如上の如く、行爲なるものとその果を受けるものは同一人なりとする常見に墮しながら、又、親の因果なるが故に子供にその罪のあらはれを生ずるを説く場合あるはこれ正に、行爲なるものとその果を受けるものとは別人なりとの斷見に陥落するものである。釋迦はこの二偏見を外道なりとて抗撃した。然るに、釋迦の外道と見られた要素を含む、現代佛教の多くは、これ等常見にも斷見にも何等の抗争も引き起さぬのは當然ではあるが。あまりにも齒痒ゆき次第ではないか！斯るはこれ全く、彼の有名を一世に馳せたる、興教大師覺鑠の八百年の昔し既に喝破せる、

「名を比丘に假りて伽藍を穢し、形を沙門に比して信施を受く、受くるところの戒品を忘れて持せず」

なる思ひを深くせざるものあらざらんや、又曰はく、

「佛を觀念するときは攀縁を起し」

とは現代佛家に對する最適評ではあるまいか。佛家はそれ自身は、搾取階級に屬するは如何なる抗辯をもつてするも否定は出來まい。然し、余の見るところを以つてせば、釋迦の態度はそう

ではなかつたやうに思はれる。余は根本佛教にあらはれたる佛陀の思想を、現代佛教者自からが具現せられむこと希んで止まぬのである。徒らに、

「詔言し、饒諛し、占相し、禁厭し、利得の上にも利得を貪る」

邪命を行ふことなきことを、余はあらためて、佛家に望む。而して、根本佛教の教説に於いての根本要素と見られてゐる、諸行無常、一切皆空、諸法無我、十二因縁、四諦の再考察を願はしく思うものである。

とにもあれ、天理教の斯る教説は、愚者、幼稚なる思想を抱けるものに取りては、無反省なるものに取りては、受納されるであらうが、この常見と、斷見とを如何に解釋づけるか、これ正に天理教々理に於ける一大問題たるにも拘はらず、これをなほざりにするのはどうしたものであらう。斷言的な考へ方によれば、これは二重應報説と見なければならぬものである。

これによりて我々は考へねばならぬのは、過去世に於いて、我々は如何なることをしたか、如何なる考へ方をもつてゐたか、それは現在に不明のことに屬する。にも拘はらず、一因生を取りて、現在の果を總く心に歸せしむる獨斷を敢へてする。天理教々理が、正當なる學的研究をもつてして、如何にしても知ることの出來ざる、現在の因による果が、死後また來世に持越して行く

のであるとの説を爲すは不思議ではないか。これ等の教説に傾聴して、うちを抜かす信者の如何に多きかを實際に於いて見るとき、誠に心細く感ぜざるを得なくなるではないか、いや榮えに榮え行かねばならぬ大和民族の前途に大なる陰影を投ずるものである。寔にマルクスが云つた如く、下部構造たる経済的生産過程を變更するにあらざれば、是等の弊害を正道に直すことが出来ざるに至つた現代の如實相を注視するときには、自ら長歎息の出づるものがあらう。

あはれ、資本主義的経済社會に生息する民衆の多くは、多かれ少かれ、身體を害してゐる。その病たるや膏肓に入れるものである。だから、生體をも辯ぜざるほどに阿片を必要とする。こゝに阿片販賣業は破竹の勢もて發展するのであることは寔に無理からぬことである。支那でさへ、阿片の害を知悉して、阿片輸入を禁止してゐる。然るに、吾が日本が物質的阿片よりも層一倍怖るべき精神的阿片の禁止が出来ざるか、噫これも又現在の社會組織のあらはれか。

更に曰く、

「あきらめられぬことを、無理にあきらめやうとして、少しも自己の心事行爲に心附かず。世を呪ひ、不運をかこつは全く愚の至と申さねばなりません」

と説く、これ、屢々、叙述せざることく、一因生の常見をもつて、即ち、赤眼鏡をかければ物事

が赤く見えるやうに——偏見をもつて人生を眺めるから、如上の言葉を漏すに至つたのである。

若し、縁が、悪しくば、その人は例へよくとも悪結果を招くのである。だから、世を呪へもしよ。不運をも啣つこともあらう。これ全く人情の然らしむることである。これを以つて、愚の至りとするは、實に人情を解せず、ひたすら偏見に墮せるもの、考へである。これをプロ的考へと云ふ。これを——因縁の理——を發生的に見るから、種々な偏見を來すのである。然し因縁は發生的規定的に見るべきことではなくして、結果的に見るべきものである。因縁をこう觀するも、所謂、執着を斷じて生きたる人生を實踐するにある爲である。あきらめられぬことを、あきらめられぬと、毎日思つてゐたら、それこそ、大なる悲觀に陥るのである。

因縁を因縁として觀すること、自己の倫理的考察を行ふこと、は全く別問題である。前者より必然に後者はいかにしても導びき出すことは出来ぬ。それは存在判斷をもつて價值判斷を類推するものであるから。ゼームスも又その名著 *The varieties of religious experience* (宗教經驗の諸相) に於いて、物の本質、その起源、構造、歴史を論ずる、存在判斷或は存在命題をもつて、その重要さ、意味、特色を論ずる價值判斷或は精神的判斷を推論することは出来ない」と述べてゐる。然し、天理教學者は明らかにこの論理的矛盾を犯して、苦もなく、いとも容易しく此の矛盾を推

論してゐる。殊に無自覺なることは、科學的方法論を無形の精神界に適用して、道德行爲を規定したるものが即ち宗教上因縁説の發點でありますと云ふの點に存するのである。これ、即ち天啓の教へと説きて、理論を抜きにし、理論的解釋を排してゐながら、最も根本的立場とすべき、いんねん論を科學的立證に求めんとするは明らかに矛盾であるのではないか。この點よりしても我々は次の一事を見逃すことは出来ない。それは、如何程、彼等天理教當局が、現代的解明を教理に牽強附會しようとあせつてゐるか、と云ふ一事である。

然も彼等は未だ自己の立場に眼を閉ぢ、人の立場を抗撃するの鐵面皮を勇敢にも行つてゐる。

「因果應報なる佛敎の教理も、或は金光敎で『めぐり』と稱するものも要は同意義であります。お道の因縁説又これに類似するものであります。が、その異るところは、従來說かれた因縁説の如くに、一切を『あきらめ』ようとする消極的の教説ではないのであります。前述の如く現在の境遇より自己の因縁を自覺し、境遇を感謝し満足し、喜んで自己の求めた本因を又自己によつて救済の因を作るべく、自己の努力に基き更新の生活に入り、神にもたれて一切の惡因縁を斷絶して頂くといふ信仰であります。即ち教語に

『心の立て替へ』

と申すのはこれであります。従つて從來の心事行爲を懺悔して凡て更生の生涯に入つて眞實の人となるのを教へるので、この結果は大慈大悲の天理王命はその誠一つの理を受取り給ふて茲に靈救の恩寵を垂れ給ふのであります。言葉を換へていへば、これが爲に、病氣は助かり、不幸は轉じて幸福となり、漸次に向上の道程を歩むことになるのであります。今日世の中では生の問題で持ち切つてゐると申して差支はありません。これほどに生きると云ふことが重大な問題でありながら、この解決を求め得ずして萬人が萬人等しく煩悶懊惱するのでありますが、何んと云ふ愚かな事せう。天理教はこの生の重大問題を解すべく『しゅんこくげん』の到來により。天保九年十月二十六日を以つてこの世にあらはれたのであります。御神樂歌の冒頭に、

『よろづ世の世界一列つ見はらせど胸の分りたものはない』

『そのはづや説いて聞かした事はない知らぬが無理ではないわいな』

『この度は神が表へあらはれてなにかいさいを説き聞かす』

理元の因縁を明にせられたのであります。そこで萬人が萬人心からお助けを頂くには神様をたよりにし、神様にもたれ申すといふのは云ふまでも無い事ではありますが、いんねんがあつて身上がなやみ、事情が起り不時の災難に出合ふのでありますから、先づこの因縁を切らして頂く事を第一とせなければなりません。今度教祖様を通じて、お教へ下された神様のお言葉はあしき心を懺悔し誠眞實の心になつて自分の悪因を切るやうに心掛けたならばお慈悲深くも眞實天の親神様は子供の罪埃りをゆるして、樂しみの道を通してやるとの有り難い御思召なのでございます。それならば自分の因縁を切るには、如何にすればよいかと云ふに、前述せし如くに、自分の因縁を自覺するのが第一であります。私共がこの世に生れて人心が出来てからこの方の道すがらを胸に手を置き深く思案をすれば誰れしも心得違のない人はありますまい。況して日々に使ふ些細な目にも見えないやうな埃りが、どれほどに積つてゐるか殆んど量り知ることが出来ないものでありませう。それが一度身の上に現じ事情となつて如何にしても癒えぬ、どうしても治らぬ、どうしても治らぬ、思案の結果漸く悪かつたと氣がつき前非を悔い凡てを懺悔しこれからは一筋心になつて御恩報じの道を通らして頂かうと所謂『心の立替』も出来る次第であります。前生で積んだ埃りは中々に思ひ浮べることは出来ないであります。

且つ身びいき身勝手な考へから埃りでも道理をつけてよい方に解釋するのが人情でありますから、前生通つて來た道すがらは容易に之を知ることが出来るににくいのであります。さりとして現在の境遇より救はれて新しき生涯に入る神の溫き御光に接しようとするには現世の懺悔ばかりでなく、事情により病氣によつては前世の懺悔もせねばなりません。所で今申したやうに容易に知ることが出来ないのみか、前生といふも一代前も前生なら二代三代も亦前生である。丁度未來が永劫無窮であるやうに、過去も久遠である。さうして見ると一々懺悔すると云ふことは云ひ易くして實際出来ることでない、出来ないとするれば神の救済を受け得られぬといふことになりますと神の慈悲に聊か疑ひを抱かねばならぬ次第になります。そこで神様は切なる親心より助けてやりたい一條に

『たんのうは前生懺悔となる』

『たんのうは眞の誠』

と仰せ下されて、たんのうの、一事によりて遙かなる前生の悪因縁を切らして頂くこととなり、かくて未來ある生命を神にもたれて進み行くことが出来るのであります」(天理教とは如何なる宗教か「四十八頁—五十一頁」)



先づ、天理教の教理の多くが、佛教の影響の多大なるものを受けたと云ふことは誰れでも、佛教と天理教との教理比較、又、天理教祖中山ミキの浄土教の影響を受けたとの歴史的事實をさへ知るものであるならば首肯出来ることである。だのに、熱烈と云はんか、熱心と云はんか、篤信的だと云はむか、冷靜に之を見れば、鐵面皮だとしか云はれない態度を平氣で天理教學者は取つてゐる。そこには教祖の浄土教的影響も従つて教理の佛教的影響も考へてゐない様な傾向がある。天理教の因縁説は實に佛教の亞流である。それなのに、天理教の因縁説には一切を『あきらめ』ようとする消極的の教説ではないのでありますと稱してゐる。だが、上掲引用文の末行になつて見れば、『たんのうは前生懺悔となる』とか、『たんのうは眞の誠』とか云つて、『たんのう』をすゝめてゐる。このたんのうとあきらめと幾ばくの意義上の區別があるか、仕方がないと云ふのとまあ、我慢すると云ふのと同じではないか。更にそれが、行爲として態度に表はれるときは、全然同じ態度を取ることとはだれにでも分ることであらう。敢へて余は、佛教の提灯を持つわけでもなく金光教の最眞をするわけでもない。が佛教に於いて亞流的教説はさて置いて少くとも根本教説に於いては、いんねんの認識は實に無我の觀念によりて眞生の實踐を起すことによりて生きて來るのである。いんねんは斯る契機としては單なる「あきらめ」では斷じてないのである。金光教に

於いても又然りであつて、「めぐり」なり「いんねん」的教説は、行は火や水の行でなくて家業の業だと云ふ點に於いて「めぐり」は「あきらめ」であると云ふことを否定されるのである。だから天理教が、佛教や金光教のいんねん説と異りて之れより優位になるものだとするのは明らかに我田引水の論斷であり佛教々理に對しての盲目を示し、若しくは之れに對する歪曲を意味するのみである。此處にも我々は、彼等天理教學者のナイーブな姿態を見ることが出来る。更に、生きること煩悶懊惱するは愚ろかなことであると云つてゐる。何んたる不見識の言葉ぞと云はねばならぬではないか、「心の立て替」をしたとても今日の實狀はあまりに外的状態が我々の云爲行動を左右してゐることを知るや知らずや。これ、眞の因縁の必然的見方であることは、前述した通りであるが、斯る見地よりすることなくして、單に心のいんねんによりて物事を見んとするところに非常なる、間違ひがあるのである。人間のものは心ばかりだと云ふが、心ばかりであつたら何んで、食ふ心配があり、不幸もなく、病氣もあるまい。天理教の神が、人間の心が貸してくれとも云はぬ身體を、無理に神自身の樂しまん爲に貸しつけて置きながら、清淨な心に對して、宗教家が等しく云ふ醜い肉體を附加して置き、肉慾を起し病氣になつたり、不幸になつたりするのは、造つた神様をうらむこそあれ、決して、有り難いとも、感謝しよう等とは思ふ筈はあり得

ないではないか。神が、肉體を附加しなかつたならば、罪の根源たる肉慾一切は發生し來らぬであらう。だから、田中豊洲氏が、次の如く云つてゐるが誠に理あることではないか。

「借りた覺えはない返すに及ばぬ」

人間の心其物は未だ嘗つて、天理大神に此肉體を貸して下さいと願つたことはない。この不完全な肉體を有するが爲めに非常に苦しむのである。此の肉體が無いならば、數多の人の心其物が非常に苦痛が軽減し得られるのである。心其の者から創造の神、主宰の神乃ち天理大神を評するならば、天理大神は無智無能の御拙介である。心一つで空間を自由に飛びまはり得る人間に無理に肉體を貸し付けて、地水火風の四大と離れ得ざる動物としたのである。悲しみではないか。恩義は少しもないと云つてもよい。天理大神は故障を申立てる事は出来ない筈である。」

と述べられてゐるが、これ天理教は、身上(肉體)は神の貨物、心一つが自分のものと云ふから田中氏の如き疑問を抱くに至るのは當然である。これによつても、神が存在するとすれば、右様の不都合を來し、元來は存在せざるものなるに、右の如き不都合をも省みず、猶ほこれを存在するとして、大慈悲の神となし、救済も神が爲すは何の爲めであるか、精神的の王座を自らの教内に占め來り、宗教てふ、とても美しく、崇高な、センチメンタルな「神秘的な霞の衣」を着て、

人をして恍惚たらしむるは、これ、眞實の宗教圏外に出で、余の所謂、天理教屋と云ふ商賣以上の商賣屋となつたと云ふもさして奇矯な提言ではあるまい。

猶ほ注意を引くべきは、生の問題に對して解決難の爲めに煩悶してゐることが愚かなことであると云ふことである。生の問題に對して、然らば、天理教は如何なる解決を與へてゐるのか、之れに對しての解決は、しゆん刻限の理によりて生れ來れる救済にあるとする。この救済即ちお助けは、惱みの根源である因縁を切ることに存する。而して、このお助けに對する個人の態度は、如何なるものであるかと云ふに、悪しき心を「立て替へ」て、懺悔して、自己の因縁を神に切らしてもらうにある。然らばその因縁は何のであるか、これこの次の項にて述べるであらうやうに一般の罪の卵となるものを積むことを云ふ。この罪の小なるもの(埃)を積むことによつて、自分のいんねんとなつたものを、神に切つてもらうには、誠眞實の心にならねばならぬと云ふにある。だから、誠眞實の心にならねば、神は救済を下さぬ。所謂天理教が云ふ、靈救はないのであるとしたら、天理教の神はどうして、「お慈愛深い親神様」だと云へるか。人間が、自分の因縁を自分の力で切つて、よい心になり得る力を有するならば、神は不要である。天理教の如き神は、絶對的の慈悲神ではない。その救済は條件づきの救ひである。他力を最とせず、自力を最とする。こ

の點に於いて、神は、余が前述した通りの實在にあらざる神即ち法則としての神となり終るではないか。法則としての神は實在するものではなく、カラツボなものである。こゝにも、神は不實在非實在性を明示するに過ぎないのである。だが天理教は、前生のいんねんを説く、これ又余の前述せる如く、實際は不明なのが本當であるのに、前生を説く、前の世に、前々の世に、二代三代四代前に、悪縁を積んだから、今生は、不幸に苦しみ、悩むのであると云ふ。だからその因縁を切り換へなければならぬ。切り換へるには心の立替へ、誠一つの心とならねばならぬと云ふ。こゝにも天理教の神の救ひは條件的なりと云ふことがあらはれてゐる。奇怪なことは、神の温い御光りに接しようとするには、現世の懺悔ばかりでなく、前世の懺悔もせねばならぬと云ふ。ところが、今云ふ前世だ。上掲引用文にも明らかにある如く、前世は何をしてゐたかは容易に知ることは出来ぬと云つてゐるのは何を意味するか、前世のことなどは永久に知ることは不可能なのではないか、猶ほ、面白いことがある。それは、天理教の神が人間を作つてから、人間は今日まで、八千八度生れ變つてゐると云ひながら、

「丁度未來が永劫無窮であるやうに、過去も久遠である」

と云ふてゐる一事である。久遠とは終局なしと云ふ意味である。八千八度を無數と云ふやうな

神道的用語法によりて解釋すれば、まあ、よいとしても、これを、文字通りに解したら、明らかに、自らの教理の大なる暴露ではないか。我々はこのことによりても如何に天理教學者が、牽強附會に汲々として前後の見さかひもなくそれを行つてゐるかを知ることが出来るだらう。

これ等の積疊して來た因縁を切るには、たんのうにありとするとところに、天理教は、自分は、「あきらめ」の教理にあらずと云つて虚勢を張りながら、完全に、「あきらめろ」主義に墮してゐると云はれても、猶ほ且つ前の虚勢を張ることは出来ないであらう。

かくて、「あきらめろ」主義の「たんのう」は強烈な阿片的麻酔的作用を逞しうすることを余は次に見て行くこととする。この「たんのう」こそ、切解して内臓物を取り去るに好都合の阿片劑となることを説いて見よう。その内臓物こそ生きる爲めにならぬ財力であるのだ。かくて、六百萬の民衆は大切な内臓を失つた。もしくは、失はむとしてゐる元氣なき民衆となつてゐるのだ。斯くて、

「人の運命は過現未を通じて神の定めるところである。これ眞道の因縁に於ける神の攝理の義である（大意）」（「神の實理としての天理教」、中西牛郎著）

と云ふに至りて、完全に、運命的、宿命的「なるもならぬも前世の約束」となり、終るのであ

る。

最後に、いんねん、と縁のある、輪廻の考へが、要請の結果來世の實在を信するに至らしめたものであることを、印度哲學研究の權威宇井博士に聽こう。

「輪廻の考へは原始未開の人々が人の靈魂は死後身體より離れて山川草木等に宿るとなす轉住説より發達したもので、必ず、身體と靈魂とを別の實體と見ることゝ靈魂に遊離性常住性を認むることゝを豫想してゐる。これ倫理道德的并に宗教的の要求が結合し來つて、死後靈魂の宿るもの又は状態に優劣善惡が區別視せられ、顧みて生前現在の行爲心情の善惡良否に基くとせらるゝに至るのであり、この行爲心情の如何によつて死後が規定せらるゝことになるとなすのである。蓋し現實の状態を見れば、善は必ずしも常に善の報を受けず惡も亦惡の報を受けないが、道德的要求よりいへば許すべからざることであるから、何時かは必ず善に善の報があり惡に惡の報がなければならぬと要求する點から、此の生存が延長せられて來世が要請せられて來る。又宗教的の修行觀修に於て畢生の努力をなしても目的が實現せられないことが多いが、これも其まゝでは眞摯な要求が満足せられないから、何時かは實現せねばならぬとなす點から來世が要請せられて居る。これには無論我の常住性が豫想せられて居るのであるが、然し人々は

來世を唯單に要請としてのみでは満足し得ずして、之を實在と考へて來る。それで輪廻説となつて來るのであるが、かゝる輪廻説は一般の印度の思想信仰である。」(岩波講座、世界思潮第五冊五二八頁)

博士の説を以つて見ても、實在と爲す我は要請即ち幻であることを知り得ることが出来るではないか。考へられるものは必ずしも實在するものでないことは確かである。

## 六、たんのうは人を無氣力にする阿片なり

神は印度に於けるウパニシャッド時代の未開の時にしろ、既に、輪廻説にからんで倫理道德的并に宗教的要請として定出せられた。考へ出されたものは、實在ではない。カントも又實踐理性批判に於いて不可認識的なもの即ち神を實踐理性の基本要請として定立せしめた。だが要求や要請に因る神の定立としては、吾々の倫理宗教の要求を満足するには、あまりにも深き思ひをそれにつなぐ。唯單なる、要請であつては満足することが出来なくて之れを實在と考へて來る。これ人情として寔に然りと云はねばなるまい。

だが、それはどこまでも、要求せられたものであり、考へられたものであり、要請としての存

在であり、實在である。それ故に、要求し、要請する人の頭脳には有するも、然らざる人の頭脳には存在することは出来ない。所詮神は見たものゝみが知り、見たものゝみに見られたものであるに過ぎない。客觀的存在だとは斷言することは出来ない。如何なる人であつても。人間が神を作るのであり、神ありて人間に現前するものではない。

人ありて、斯る神を實在とし客觀的存在だと主張する人あらむか、その人こそ無常識に、自分が自分の要求を満足させようとして遂には實在にまで作り上げた神を他人に押賣りするものである。それは自己の要求に欺されたまゝに、人をも欺す結果を招來するものである。——それが無意識的にせよ意識的にせよ——自分の認識不足の爲めに、自分の要求の爲めに自分も欺された。欺された結果は要求が満足されたかに、思はれ見られる——本當はそうではない——がそれは阿片を吸ふことによりて陶醉氣分となるやうな一時的恍惚的氣分となる以外の何物でもあり得ない。それは酒を飲んで氣持がよくなるのと同じだ。ただ時間が少し長いと云ふばかりだ。自分が飲んで氣持がよいからと云つて、これを誰れかれの差別なく無理強いに奨めたとすれば、それこそ、我儘の限りであり非常識の至りである。宗教に於いて若し斯ることがあつたとし、然も、おためたかすにすゝめたとすれば、これ以上の邪義邪道はあるまい。人をして眞實の人生を把握せしむ

るならばまだしも、それが反對に無氣力とし、あきらめ主義に押し込めるものであるならば既に言語以上の邪義であり邪道であり邪教であると云はねばならぬ。有ると云はれざるものを一人の主觀をもつて有ると獨斷的に決定してこれをあると掲げてこれによりて自分等の口を糊するものがあるならば、これこそ大詐欺であり、大山師であり大法螺吹きであり腹黒の至極であり搾取家の標本であると云はねばなるまい。世間に於いて物質的取引きに如上の行爲をするものありとせむか、詐欺として法網をのがるゝことは出来ない。だのに、倫理道德を包み況んや法律より幾層倍も優位にありと世間でも思ひ自分でも誇る精神的代表者が斯る行爲をしても別に拘束も受けず平氣に白日をも恐れずセヨーベンハウエルの云つた如き「敬虔なる欺術」を弄してゐる宗教家が、そんじよ、そこらに華洒な姿態をして横行するは如何にも異な現象であり、如何にも不思議なことではないか。我々は斯の如き奇異な不思議な姿態を天理教の教師に見て行こうとするであらう。前節より、身上は借物であり心だけが我々のものであり、この身上が境遇上に地位上に、區別あり、幸不幸に相違あるは前生今生前々生で積んだいんねんによるんだ。そしてそのいんねんは自分が積んだ因縁であるから、この悪いんねんを切るにはたんのう、(忍耐)すればよいのだと云ふにあつた。斯くて余は漸次天理教々理一般を述べて天理教が今日の財力を形造るに至れる経過

を暴露し、そこに、宗教なる美名にかくれてブルヂュア一の庇護のもとに、商賣以上に商賣化して所謂余の天理教屋の開業に至れる點を指摘して行くこととする。これに附帯して「敬虔なる欺術」の使い手の手品師が「神秘的な霞の衣」を着て如何に舞臺の上で彼の役割を演ずるかが知られるだらう。前節引用文に續いて、

「然らば『たんのう』とはどういふ事か、これに就いてまた少しく説明せねばなりません」(「天理教とは如何なる宗教か」五十一頁)と鹿爪らしく説き出してゐる。

「たんのう」とは現在の境遇を感謝し不足も不満もなく喜び勇んで各自の職務に人一倍の働きを爲し何を云はれても、どんなことがあつてもこれを通らねばならぬ道である」(同上)

と説教してゐる。寔に美しき辭であり佳き文句ではないか、若しこの辭句を言葉通りに實行するものがあつたとしたらどれほどの暴戾に對しても唯々諸々と喜び勇んで事を運ぶ人であらう。暴令を投下するもののみ一人ほくそいで悦に入つてゐるやうにならう。何故ならば、こんな人間は機械同様な機體的神経組織を有せぬ物體となるに過ぎないから。これを國家的立場から見ても國民的存在の一人として誠に頼り無い國民ではないか、眞に氷のてんぶらに等しい存在である。主義自信なき點に至つては三歳の童兒にも劣るものである。

だが、實際を見るに必ずしもこれを實行してをらぬ。こう云ふ話しがある。問答體に記することとする。これは著者の實際聞いた話である。

天理屋「御主人の御病氣はどうですぬ」

客「先生、どうも悪くなりました」

天理屋「それあ、なんだ、十五日の祭りに來なかつたからですよ」

客「先生、實際あのときは少しよかつたものですから、働らいたんです。働らかねば一家が

食つて行かれませんか」

天理屋「それがいけないんです。神様をお参りに來ないから、病氣が重くなつたんですよ。埃りが積つたんです。なんだつて來ないんです。いけないではありませんか」

客「然し、働かなければ食へないほど、貧乏なんですから、先生も御存知の通りに」

天理屋「兎に角く、お祭りにお参りしなかつたもんですから、だめです」

と病人の神経に障るやうなことを云ひつばなしで、天理屋はトットと怒つて歸へつて行つたと云ふ。この話しは事實の事であるが、天理教學者若しくは、天理教當局が聽いたならば、余の捏造か又は彼の行爲を非天理教的だとすることによりて、自分等の責任を逃れやうとするかも知れぬ。

だがドツコイ少し待つて下い。余の捏造だとするならば、生き證人を出して見せやう、そこには天理教の本部つまりお地場の寫眞が額がにして掛けてある。が前記の病人は今死んでしまつてゐる。それでコリて天理教は止めてしまつた人なのだ、それから、彼の行爲が非天理教的のものだとするものとせば、余はこう云ふつもりだ。如何に非天理教的行爲であつても、矢張り天理教島から出たものではないか、世間並の人々の云ふことならいざ知らず、少くとも自己の教理の手前、彼の行爲は非天理教的のもので我々の關知せざるところである等とはよも云はれまい。いづれにしても、その責任は負はなければならぬ。然るに、彼の大西愛次郎の天理研究會事件に於いて天理教は我關せずの態度に出でたのは衆人周知のことである。かほどまで、彼等は厚顔であり鐵面皮であるのには驚ろかぬものはあるまい。また、この「たんのう」は非常に人を馬鹿にする態度を結果するものである。然して惡悟りをし、獨善主義に陥り、頑迷の上にも頑迷となり、人の言ふことをキ、カ、猿、式態度をもつてこれ「たんのう」を實行するものとするに至つては、如何にして濟度せんかに啞然たらざるを得なくなる。

故つて置けば、半可知名教理を振り廻す。少し注意すれば馬耳東風キ、カザル、式態度で知らぬが佛をキ、メ、ツ、ケル。誠に仕末に困る人間を天理教は製造するものである。懶巧を馬鹿とし、智者を

愚者とする以外に天理教は何等の生産もせぬ。そして、馬鹿としたものから愚者としたものから、後述する如き「ひのきしん」せ、「つくせ」「たんのう」せと吹き込んで捲きあげる。一寸の蟲にも五分の魂、仲には馬鹿でも、愚者でも少し位は不平を云ふもの愚痴をコボスものがある。すると、埃りを積むぞ、因縁が悪くなるぞ、災難が来るぞ、身上か事情に障りがあるぞ「たんのう」「たんのう」不足なく、不満なく喜び勇んで「つくせ」「はこべ」と云ふ言葉でだましてしまふ。威おかししたり、ダマシたり、スカシたり、オダテたりして捲きあげる。まことに手に入つたものではないか。

「大難を小難に小難を無に通らして、神様の御慈悲であると心機を一轉せしめて恨み心や腹立ち心を出さず、低きやさしき心のまゝに努力向上することでありませう。『たんのうはつなぐ理』と仰せられ、又反對に『不足はきるの理』とも仰せられてありますから少しでも現在の境遇に對して不足を付たり、不足を並べたりする様ではとてもたんのうにはならないのであります。主人と雇人とがあるとするれば、その主人と雇人と位置が異つてゐますのは自己の因縁の理があらはれてかく定まつてゐるので主人はその雇人を使はねばならぬ因縁、雇人はその主人に仕へねばならぬ因縁が既に結ばれてあります。故に雇人の方から申せば自分の境遇を感

謝したんのう、して心に理が治まれば、どのやうに使はれても結構と心の底から感謝し喜んで忠實に働くならば雇人として使はれる因縁は何時とはなしに切つて頂くことになるのであります。

又主人の方に就いて云へば、その雇人を使ふよりも外を捜したらもつと氣のきいた役に立つものがあるかも知れません。けれどもこの人を使はねばならぬ因縁があると自覺して少しの手落があつてもよく救ひよく育て、やれば、主人のこの因縁は切れて益々慈愛の徳を積むこととなるのであります。かくして、主人と雇人との間が互にたんのう、して相扶け合ふことになれば、雇人は主人の爲に我身を忘れ働くやうになり、主人も我子のやうに勞はり、そこに何等の隔てもなく眞の親子の如き關係になるのであります。今日勞働問題の紛議は双方にたんのうの眞精神がないから起つて來るのであります。嘗に主人對使用人の間ばかりではなく家庭にあつても社交にあつてもこの理は變りはないのであります。」(「天理教とは如何なる宗教か」五十一頁—五十二頁)

「たんのうとは吾人の現在の運命は善惡共に過去の性格所産であることを自覺して云ひ換へれば自己の因縁なることを自覺して天を怨まず、人を咎めず現在の運命に満足しつゝ更に一段の性格改造、運命改造、の事業に向つて丹精するの謂である。(九十四頁)

凡そ人間の誤解の中最も大なる誤解の一つは自分の幸福もしくは不幸の原因は自分にあるにあらずして他人もしくは境遇もしくは周囲にあると考へる誤解である。此の誤解よりして天を怨み、人を咎め其の結果不足の念を積んで遂いに前よりも一層大なる不幸の原因を作るのである。御筆先に曰く、

『何の様な事も怨みに思ふなよ皆めいゝの身怨みである』(九十七頁)

(「天理教より見たる人生の意義及價值」大平良平著)

「たんのうの眞意義」

神言に『ならん中たんのうするはまこと、まことはうけとる』とあるやうに、重要な本教々義の一を爲す『たんのう』は『眞の誠』そのものであらねばならぬのである。『たんのう』を單に方言の『たんのう』と同一意義に解して、満足すると云ふ事だけに取る人もあるやうだが、唯これだけの意義内容をもつものではない。或はこれを『あきらめる』と云ふ意味に解する人もあるやうであるが、そんな消極的意味のみに解せらる可きものでない。もつと色々の深い内容のあるものと解するのが妥當である。勿論『たんのう』には一面『満足』と云ふ意味がある



のであるから、その反面には假令かすかながらも『あきらめる』と云ふ意も、場合によつて人によつて含まれるかも知れないのであるが、それはほんの微弱なものであつて、眞に教義を理解し、信仰に精進すればそれは當然消失して了ふものである。『たんのう』を濃厚に『あきらめ』の意味に持つて来ようとする人は信仰に浅い人と云はなければならぬ。言葉を換へて言へば信仰の進むにつれてその人の心に映する『たんのう』の姿は簡單から複雑に進んで行くのである。勿論『あきらめ』も或る場合には『たんのう』の内の内容である事もあらう。併し信仰に徹した人は必ずその裏に自覺と云ふことがある筈である。自覺によつて裏づけられない『あきらめ』はやがて不足、煩悶、懊惱の姿となつて現はれて来るのである。然らば自覺とは何かと云ふに、神言にあるやうに『前世因縁のさんげ』である。親神の膝下にひれ伏して前生いんねんのさんげをするとき、そこには喜び、感謝の念が現はれて来るのである。消極から積極的勇躍に變るのである。即ちそこには『たんのう』の持つ意義内容は複雑になり明るい姿となる。『たんのう』は本教の生命である。陽氣な晴々した明るい姿でなければならぬ。即ち『たんのう』を眞に理解することによつて、言葉を換へて云へば、信仰に徹した立場より『たんのう』を解する事によつて、『たんのう』の持つ眞意義を發揚することが出来るのである。

此の意味に於いて『たんのう』を解する時は、その内容は陽氣であり、心の勇であり、よろこびであり、つとめである。而してその極致は『まこと』である。即ち『たんのう』によつて陽氣に喜び勇んで、日々勤める事が出来るのである。これを逆に考ふときは、心を陽氣にし、よろこび勇んで勤め、一條に勵んで初めて『たんのう』の眞意義を悟得することが出来るのである。(天理教道友社發行第三十九卷第廿二號「みちのとも」卷頭言)

以上三つの引用文によつて讀者諸賢は『たんのう』に如何なる意味を持たせて、天理教學者は之を主張してゐるか、理解出來たことと思ふ。第一例に於いて知り得るのは、恨まず腹立てず、低く優しき心をもつて努力向上すると云ふことが『たんのう』だと云つてゐるのを見る。現在の境遇に不足をしないのでなければ『たんのう』とは云はれぬのだとも云つてゐる。雇人はどのやうに使かはれてもそれが自己のいんねんの理のあらはれだと自覺して心の底から満足し、喜び、感謝して忠實に働けと教へてゐる。又主人も雇人に少し位の手落があつてもこれをよく育て、やれば慈愛の徳を積むこととなる。今日の労働問題は双方にたんのうの精神がないから起つて來ると説くのである。

これによつて余等は考へさせられる。努力向上とは何んであるか、我々が努力向上に際してそ

の障害物となるものが反對の行動を持つて我々にはたらかかけたとき、我々は『たんのう』、『たんのう』とてこれを我慢し、忍耐してゐてよいか。天理教々理は、『たんのう』せよと教へるけれども、余は然かく考へることは出来ぬのである。何故ならば、『たんのう』とは、如上の場合に於いては停頓であり、澁滞であるが故である。吾人は『たんのう』とかゝる場合に口づさみて平々晏如たるべきでない。むしろ、これ等の障碍を突破して行かねばならぬのである。『たんのう』を説く天理教々師であつてさへ、教勢を擴張せんとして行爲するときは全く『たんのう』の精神を忘れてむしろ普通人にも出来ざるほどの猛然たる態度に出るのではないか。彼等をして云はせしむるならば、世界救済だから仕方がない。否、仕方がないどころか、それが當然であると云ふかも知れぬ。だが、教祖は何んと云つたか、教祖は——彼等が神様としてゐる——どうでも、教勢擴張に奔走せよと云つたか。

「無理にすゝめるな」

と云つてゐるではないか、無理にすゝめるのは眞の道ではない。道は眞實であれば自ら廣げ得るものである。だのに天理教は無理強ひに強ひる事を以つて救済だと云ふ。教祖の意を繼ぐものだと云ふ。まことにわからぬ話ではないか。無理にすゝめるな。救済だから説教せよ、との二

つの命題は明らかに矛盾するものである。斯くしてこれは教理の不統一を物語るものである。現代は、主人と雇人との關係は、第一引用例の筆者の云ふがごとく然く簡單なものではない。又、天理教が谷底の救済を以つて誇りとしてゐるが、——谷底とはプロレタリア階級を云ふ——その救済は與へるのではなくて搾取である點に於いて、ブルヂユアジーの都合よくする以外の何物をもしてをらぬ。搾取されつゝある勞働階級より又々搾取するばかりか、搾取されても喜べ、満足せよ不足を云ふなと云ふやうな出来ざることを強ひるのは果して眞の救済か。被搾取階級をして立つこと能はざる阿片中毒者と爲す手段方法は後述するであらうが、プロを欺きブルのお髻を拂つてその中間に立つて漁夫の利を貪ほるは實に許し難き人道上の敵ではないか。若し天理教にして眞の宗教であるならば、余は教祖に還れと絶叫せざるを得ない。教祖は與へた。汝等も與へよと云はざるを得ない。本部を解體し、教會をして公衆に提供し、財産を被搾取階級の爲になる事業に投ぜよと云はざるを得ないのである。神の殿を勞働大衆に與へることは、神が眞に實在するものならば、衣冠をつけ形式的の歌樂を奏上するよりも如何ばかり喜ぶことであらうか、教祖は如何ばかり満足することであらうか、余はこれ以上の神に對する奉公も、教祖の旨を繼ぐこともないと思ふ。斯くしてこそ、天理教は眞の宗教となり、民心は教理に含まれ、こゝで初めて民

衆の味方となるのである。現在の状態であるならば、プロレタリアの敵でこそあれ、決して味方ではないことを斷言して置く。更に又、教祖の旨に反することの甚だしきものであることをも斷言するに躊躇せぬのである。

然るに、第二例で見る如く、現在の運命は過去の性格の所産の結果だとし因縁だと思ふことを自覺だと賞める。天を咎めず、人を怨まず運命に隨順することによりて満足せよと教へるのは正にブルの走狗だと云ふも返す言葉があるまい。こんな事で、運命を改造するの、性格を改造するのつて云ふことが出来るか、到底出来まい。亦曰く、人間の幸、不幸をもつて他に原因あるとするは、最大誤解なりと云つてゐるが、これ天理教々理は、心のみ諸般の原因を求めるによる偏見に存する必然の結果である。縁起の理は大聖釋迦の教へ給ふたところである。縁起と因縁とは同意味に取られてゐる。既にこれが同意味であるとすれば、心のみ原因を求めるは明らかに、邪義を弄するものであると云はねばなるまい。自他和合によつて一つの事が出来るものである、自己の力によりてのみ物事は出来るものではない。和合とは縁起である。誤解であると云ふほど多大なる誤解はあるまい。余は大平氏に借問す。氏はソクラテスの「汝自身を知れ」てふ金言を味識せることありや？氏は社會的存在としての氏を考慮に入れたることありや？「單獨なる個人

は例へば物理學者の原子の如く一つの抽象であるに過ぎない」とのプラトンの根本的信條を問題とせることありや？個人は社會的連鎖中の一環を爲すものであることを知るだけでも、個人の幸、不幸は社會的規定を受けるてふことは瞭々たる事實として觀取されるではないか。これを度外視して、事を論ぜんとするは木に縁りて魚を求めんとするの愚を敢行するものであると云はねばなるまい。教祖の御筆先きなるものも皆然りである。但し前進する爲めに執着を斷すると云ふ點に於いて、個人の主觀に考へることは結果から見て人生進歩の爲めになるも、これを天理教學者の如き發生的に見ようとするは、明らかに消極的宿命觀に墮するものと云はねばならぬのである。

第三例は天理教本部より直接出てゐる雜誌による。これに、「あきらめ」の意味、満足の意義があると云つてゐるのは正しい。而してあきらめ、満足だけでは不足であると云ふのは詭辯である。簡單から複雑に進むと云つたり消極から積極的勇躍に變ると云つたりするのは、既に「たんのう」の意味超過である。それは「たんのう」と云ふべきものではない。「前世の因縁のさんげ」を深くすればするほど、自己縮少はよし來たすかも知れぬが、喜びや、感謝の念が現じて來る筈がない。ただ、因縁深き我を救つてくれると云ふ觀念が出て來て初めて、喜びも出て來よう。感謝の念も現じて來るのである。自覺と天理教が稱する「前世因縁のさんげ」はどこまで行つても消極

的のものである。

我々は「たんのう」の理なるものに含まるゝ思想は、宿命観であり、獨善主義であることを見て来た。そしてこれが、擗取に際しての一要素を爲すことも知るべくあまりに容易ではあるまいか、余は段々、余の目的とする天理教の捲き上げ策としての要素を述べることを進めて来た。身上は神の借り物である。それは因縁によりて生じたのだ。因縁は自己の作つたものだ。「たんのう」してこの惡因縁を切らねばならぬ。然らば、この因縁を切るのは「たんのう」だけでよいか。ところがそうは行かぬ。第三例に示せる如く、たんのうは、よろこび勇んで勤め、一條に勵んで初めてその眞意義を悟得することが出来ることと云つてゐるが、その勤め一條とは何んであるかと云へばそれはつくせ——金を出すこと——とそれと同一地位に立つ労働のことであることを聞いたならば諸君はなるほどと思ふだらう。労働する。又は金を寄附する。されば、眞の意味での「たんのう」になる。たんのうになれば因縁を切ることが出来る。惡因縁を切る（無くすること）ことが出来れば幸福になる。だから逆にもどして、つくせ、はこべをやるやうになる。つくせ、はこべが勤めなのである。つくされ、はこべれるものは誰れなのだ。云ふまでもあるまい。それが、天理屋なのだ。天理屋が今日の財力と勢力を得たのはこうしたいきさつによるものだ。これを具體的に

述べることにするが、一寸こゝに暗示を出して置く。諸君は成程と思ふだらう。全くうまい金儲け法があるものではないか。こゝに至つて余等は、一介の労働者が口さへ（阿片吹き出し口）うまければ、天理教の教師になるに限る。と云つた言葉の眞理なることを知ることが出来るではないか、余は「たんのう」まで行かねばならない因縁觀をもたせる、埃について次に述べて見よう。

### 七、埃とは擗取の第一前提

たんのうせしめることによりて、つくし（金を出す）、はこび（無賃の働き）を、させるやうにする爲には、先づたんのうせしめることを考へねばならぬ。たんのうの前提とも云ふ因縁觀を持たせねばならぬ。ところが、それを否定するものがあると、そこに至つて、病氣だとすれば、それは因縁の現はれであると云ひ、事情に都合悪しきことがあるとすると、それは埃りのあらはれだと云ふ。

つまり、埃りとは因縁を作る吾人の行爲（心的にも、肉體的にも）を指すものであることがわかる。今例の如く、彼等の主張を聴くこととする。埃とは罪となるべきものを指す、業の如きものである。これを、天理教では八埃と云ふ。八つの埃りと云ふことである。即ち、

- 1、ほしい(貪婪)
- 2、をしい(慳吝)
- 3、かあゆい(邪愛)
- 4、にくい(憎悪)
- 5、うらみ(怨恨)
- 6、はらだち(忿怒)
- 7、たかぶり(高慢)
- 8、よく(慾)

である。この八つのものは、悪因縁を作るものだとするにある。これ等を悪しき心づかひと云ひ、悪因縁の素因となりて、すべて過害の元因となつて借物の身上を病み、不時の災難に苦しまねばならぬことになるのであると説(「天理教とは如何なる宗教か」二十六頁)

「約るところは、神様の思召に反した一切の心事行爲悉く埃となるのでありますがその中に就いて、日常生活の間に知らず知らずにつきやすい、心事を八つに分けてお戒め下さつたのであります」(同上二十七頁)

これに依つて見るに、神は人間の心事の如何によりて、病氣と爲し又不遇に陥し入れるのである。神は大慈大悲であり、絶對最高の力を有するものである。筆先に

「何もかも知らずに暮す此の子供神の眼にはいぢらしきこと」

と云つてゐる。それなのに、何事も知らぬ人間に病を與へ不幸を與へ不遇の地位に陥るのは何んの爲めであるか、これに答へて神の手引きだと稱するのを常とする。神の手引とは、心事の如何をして反省せしめると云ふにある。天理教の有り難い神様が御仰せ下さるまでもなく、吾々人類は神を認識することはどんなことをしても出来ないのである。思はれたものを存在すると誤信することなしには人類は神の存在を認めることは出来ぬ。だのに神は豪然と構へてゐるような、俺れを認識しろ、俺れの存在を注視せよ、俺れの認識が出来るものは、俺れの存在を視得るものは、助かつたのだ、救つてやるぞとおつしやる。

吾々人類の親たる神に我々はそれが眞の親であるならば、あまからざる注文がある。それは、全智全能の神様なのに何故吾々の誰れでもが神様の御姿を見得ることが出来るやうに人間に眼をつけ、視神経の作用を敏くし、大脳の働きを活潑にしてくれなかつたのか。

神様の存在を眼を以つて見、耳をもつてその聲を聴き、脳髓で考へ得る力を人間はもつてゐた

のだが、人間の悪いんねんの爲にそれ等が障碍せられて出来なくなつたのだと云ふならば、余は又重ねて注文がある。親が子に小さな腫物が出ても非常に心配する。そして小さいうちに癒してしまはむとする。だのに云はゞ盲とし、聾にし、低脳にして終ふまで神はほつたらかして置いたのはどうした譯であるか。大變な力の持主である神がそんな些細なことをのぞくことが出来なかつた譯ではあるまい。出来たものを、出来かさなかつたと云ふことは、神様の怠慢か神様には出来るだけの能力がなかつたと云はねばならぬ。

小さい罪のうちから除かなかつたと云ふことは大きい罪となるまで放つて置くと云ふことであり、神の怠慢は神の大慈大悲の性質なきものとするに至らねばなりません。神は小さい過失に何等の手を下すことなく、罪が大となれば、病氣にしたり、不幸な目に會はせたりするのは何んと云ふ得手勝手な神様なのだ。神様には過失を出来すことを防ぐ能力がないと云ふに至つては、天理正命を拜するの必要は無くなるのではないか。斯る神が存在するならばまだしも、存在の不確實な神様を存在するかのやうに確信して集るもの六百萬を數へてゐるのは、誠に俗俚の「惚れて通よへば千里が一里」的であり、醜女も世界一の美人に見えるものなのと一般である。だが思へ、千里は決して一里ではなく、醜女は醜女であり美人ではないと云ふことを、存在の不確實な神は

どこまでも不確實な存在である。存在するかも知れぬから拜むと云ふものに至つては、大磐壁だから腕押をするとして暖簾と腕押するやうなものだ。寔に愚の至りである。天理大神の教育も誠に大神様にも似つかはしからざる教育方法である。人間がわからぬから、身上に事情にさわりを與へて、神があるとの自覺を與へ、救いの手引びきをすと云ふ。これに對して、理論家が、何故に人間をしてわからぬやうにしたと云ふと、神様は、曰はく、人間は罪が深いからと答へる（いんねんが悪むいと）。余は神様におきゝしたいのは、何故人間が神様の云ふことを直接きくことが出来るやうに神様がして下さらぬのかと云ひたい。余が神様であるならば、そして全智全能であるならば（こんな馬鹿氣たことはあり得ないが）先づ人間が神の言ふことを聴くについての障礙物を人間の身心より取り除いて、然るのち、云つて聞かせ、それでも神の云ふことを聞かなかつたならば、その時は病氣にしてもよからう。事情に差し障りを生ぜしめてもよからう。が、これは最後の處刑なのだ。國家の法律でも説諭を一番先きにするではないか。説諭で聞かなかつたら、科料とか、拘留とかと進んで行くのではないか。ところが天理大神は説諭をしない。しないでゐて直ぐ體刑を下す。なんとまあ無慈悲な神様ではないか、後に示すごとく、死刑さへ突然下すことがあるに至つては沙汰の限りである。これをして神の力によるものであるとしても、吾人

はその専制的封建的態度を憎まねばならぬ。斯る神を崇敬するどころか、人類結束して之に對抗し神への鬭争を宣告せねばならぬ筈なのに、なんとまあ、腰抜けどもの多きことよ。神の斯る無理の云ひなりほうだいに従つて唯々諾々として神の僕の虚名を冠することによりて、安心を得てゐるやうに見せかけ、その實は戦々競々たる心胸を有するに至つては、そればかりか、虚勢を張つて豪然たるが如き態度を示すに至つては、吾人又涙を飲んで同族人間に對して神に對すると同様な鬭争開始を布告せねばならぬ義務と權利を有するのである。それは人類文化開進の爲めに、然も憶面もなくこう云つてゐる。(お筆先で)

「何にでも病と云ふて更になし心違ひの道があるから」

「此の道は欲しい惜しいと可愛いと慾と高慢これが埃りや」

「胸の悪しくこれを病と思ふなよ神の急き込みつかへたるゆゑ」

「思案せよ病と云ふて更になし神の道教せ異見なるぞや」

「世界中何處が悪しきや痛みしよ神の道教せ手引き知らず」

「此世に病と云ふてない程に身の内障り皆思案せよ」

「一寸したる眼の悪しき腫物や上せ痛みは神の手引きや」

「今までは病と云へば醫者藥皆心配をしたなれども」

「これからはいかな六ヶ敷病でも心次第で直らんでなし」

これによつて見るに、病(これについては又後述することとする)の元因は、心違ひの道の爲に、その道とは、欲しい、惜しい、可愛い、慾、高慢、等の埃りであると云ふにある。病となるのは、病み手の埃ある爲である。つまり、埃りを積むやうになるから、神がそれに對して思案させるやうにする爲に、障りを與へ、そして道に返すべく、手引きをし意見をす。助けんとて急

き込み、今までは醫者や藥にかかつてゐた病は、これからは心次第で直らぬと云ふことがない、と云ふてゐる。如何にも表面の文字の連続を見るだけでは有難い至極であるか、神の絶大力量ある御方であると云ふことから考へると、如何にも無理な神であり得手勝手な神であることが氣づかれるのではないか。先述せるごとく、何故一度の警告を與へなかつたのか。かの歐洲大戰に際して、世界の條義を蹂躪つて獨逸の潜航艇は各國の商船を撃沈せしめた。當時の世界の人々は、この「無警告」の襲撃をいたく恐れたものだ。昭和聖代の今日天理教の神は、卑怯なる獨逸潜航艇式戦法を用ゐた譯でもあるまいが「無警告」の突撃は寔に危険千萬であり、人類の敵たるの資格は充分過ぎるほど充分であると云はねばなるまい。「無警告」に襲撃する神それは一大無慈悲な神だと云はねばなるまい。

だが、天理屋はこの大無慈悲な神を擔つぎあげて、誠としやかに、埃りを説き教へる。埃りの教理を説くに際しては詭辯邪説を以つてし、これを宣傳するには曲學阿世を看板とする。斯くて彼等の腹は肥り、教會は富を増し、黒紋着に白足袋を履き、扇を手にして、

「あしきを拂ふて助け給へ天理王命」と、

連唱し金儲に専心してゐる。實に俚言には眞理あり、右の歌は

「屋敷を拂ふて田賣り給へ天理王命」

となり、又、その踊る點よりして、

「屋敷を拂ふて田賣り給へテンテコの命」

なる、俚謡として、一般に流布されたのである。これ古人が、女子供にでも天理教の恐るべきことを知らせしめたる尊き教訓であつて、俚言なるが故を以つて天理教に對する惡口、讒言なりと一蹴し去ることは出来ないものである。實に俚言は社會意識の端的なる表現として、最も價値あるものであることは、それが、古人の作になり、教訓の意を寓し、警戒の意味を有するからである。余は未だ俚言に對する研究は淺しと雖も如上の意味によりて、

「屋敷を拂ふて助け給へ天理王命」

「屋敷を拂ふて田賣り給へテンテコの命」

の二句は益々天理教の現状の有様を改めざる限りに於いて、彼等教師の宣傳に正比例して大いに民間に流布せねばならぬ金言であると思ふ。

これ我等の祖先の意志を繼承する意味ともなり、一般迷妄の民衆を眞正の道に導びく爲めともなるからである。



余は誇大妄想狂と云はれることを辭せぬ。この二つの俚言を小學校の教科書中にも入れて、現在小學校の教科書に存する迷信の項を、徹底的に理解せしめる一具體的雛型と爲すべきであると信するものである。

天理教に對する斯る抗撃をマルクスの級階闘争面に持つ來たさずとも、とつくの昔に、清算されねばならぬものである。神社問題が今日八釜敷やかましくなつて來たのも、神社そのもの、祭神に必ずしも國民道徳的意味を有する國民の崇敬の對象たる祖先ばかりでないことにある。そればかりではない。よし、それが國民道徳的崇敬の對象たる祖先を祀るものであつてもまだその願ひなり、宗教的行爲なりには多分の迷信的要素を含んでゐる。天理教はその實踐的行動に於いては病氣を主とするやうに思はれる。これに對して井上哲次郎博士の意見をきこう。

「福を祈つたり、病氣の治ることを祈つたり、それから戀の叶ふことを祈つたりするのは抑々迷信である。病氣は治るのに祈つて得らるべきものではない。福も別に祈つて得らるべきものではない。社會の改造を圖るには段々有害なる事を無くして社會を幸福に爲すより外仕方がない。それが一番適切な方法である。」(加藤玄智編輯「神社對宗教」三十一頁——三十二頁)

如上の文節に明らかなる如く、病氣平癒や戀の叶ふやうにとの願ひや、利福を祈るのは迷信に

して、社會向上に有害なるものである。博士の云ふ通り祈つて病ひが治し、願つて戀が叶ひ、拜まがんで福を得らるゝものではないが、祈り、願ひ、拜んでゐるときに、病が治り、戀が叶ひ、福を得ることがないとは云はれぬ。實際はあるから、そう云つたやうな實際上の經驗をもつてゐるのは、學者は何を云ふか、俺れの病氣は治つたんだ、癒つたことは何よりの據りどころだ、理論と實際とは違ふんだと高飛車に出る。妾の戀が叶つたから神様はほんとうにゐらつしやるんだわと黄な聲をあげる。我等が祈つたからお福が授づかつたんだと云ふ。さて、これ等は一を知つて二を知らざるものであり、一を見て二の方も御覽んなさいと云つても、見やうともせず、この方面に對して反對の態度を取るやうなものである。井上博士の言は確かに正しい。決して、祈禱が病を治し、戀を叶はせ、福を得せしめるものではない。若し、眞に祈願によりて如上の望みが得られるものであるならば、一人として貧乏もせず一人として病氣に苦しまず、唯一人の失戀者も出ない譯である筈だ。それなのに、祈つて病は治せず、願つて戀は叶はず、參拜すれども福を得られないことがあまりに屢々ではないか。この吾人の願望が神に受け入れられないと思つたとき吾々は神様を換へて、あの神様は御利益がないと云ふ。又その神様の方から云はせれば、あの人は熱心さが足りない。心持が不充分だと云ふ。この二つの立場を考へ合せるとき、如上の事柄は迷信

でないといふひ得る人がはたしてあるか。ただ、前述の祈願中に願望が叶つたことのあるのは、それこそ遇然の一致と云ふべきものである。事柄に於いて遇然の一致ばかりでなく、怖れてゐる神、尊敬してゐる神、崇敬してゐる神に願を掛ける場合、掛けた人の意識には大いなる力を感じ、神様に願をかけたんだから努力せねば濟まぬとの感、之れに伴ふ肉體上の緊張を來すは定に明瞭なことである。斯る現象の説明はいともたやすく、宗教學と生理學と心理學とによつて説明づけることが出来るのである。宗教學の意味も、生理學の一般も、心理學の何んたるも知らざるものにとりては如上の現象は不思議であるかも知れぬ。この不思議の感は宗教へ吾人を導びくものではあるが、不思議の感が實在するから確定せられ、これより演繹し歸納した事柄が正しいとはどんな辯口をもつても言ふことは出来ぬ。強いてこれを云ふものがあるとすればそれはソフィスト（詭辯家）に過ぎないのである。神を祈願して病が治り戀が叶ひ、福を得られた事實は確かでも、それは神を祈つたからでなく、神が存在することによるのでなく（こゝでは神の客觀的存在を意味す。主觀的存在は之れを云はず）神の主觀上の事實が上述の心理的に生理的に影響を與へ吾人をして眞の力を得せしめ、勇敢に行爲をなさしめ活潑に仕事をさせる爲に因由することを忘れてはならぬ。このことは後段に於いて病氣の項なる一章に更に詳述するであらうが、病氣とて肉體的

心理的緊張を生ぜしめることによりて、治病の直接主動者である、自然治癒力を強め、抵抗力を高めるは事實にして、この事實を辯ぜずして多くの迷信流信者は次の如く考ふることによつて迷ひが生ずるのである。即ち

「病氣の癒つたのは神様のお力である」

と、余は之れに對して質問するであらうが、いくら神様ばかり拜んでゐても、遊んでゐては何んにもならぬてふことより考へても、自己が立たねば、自分が働らかねば何にもならぬものであると云ふことを知らねばならぬ。治病の有難さは神の爲めでなくして、自分の力にあることを知らねばならぬ。この理をわきまへざるものは、遂ひには、他の要素（信仰に對するものであつて斯る信仰を規定するところのもの）の附加されざる限り、それは、

「棚からボタ餅」

式の怠けた心理としかならぬであらう。棚の上にある、ウマ、ソウナボタ餅でも落ちて來るのを待つてゐたらいつのことやら不明であるのである。これを以つて見ても自らはたらきかけねばならぬことが知ることが出来得やう。大部話しが側き道へ行つたやうだが、この理を知りてか、知らざるによりてか、前述の如き神の御利益を振り廻す天理教の教師は「無きものを有るかに見せ

かけ」る欺術師であるに過ぎない。それでも病氣を癒すに際しての患者の心を緊張させる効能は確かにあるとしても、その効能を與へたことに對しての報酬はあまりに多過ぎはせぬか、それこそ、暴利を貪ほるものであると云はねばなりません。何んとしても我々は之れに對して徹底的の検討を加へる責任がある。若しそこに、

「あやしげな伏線」

があるならば、吾人は斷乎として之れに天討を加へねばならぬのである。彼等の教理そのものが、極はめて巧妙に出來てゐるのは、前述の通りだが、更に、八埃の解釋に至つては奇怪至極を呈してゐる。次にその一つについて述べて見よう。

「(一)『ホシイ』と申しても適當の範圍内で望み欲することは吾々が生き存へる上に於いて是非ともなければならぬものであります。例へば幸福を求めるとか知識を求めるとか、名譽を求めるとかいふのはいかにも結構なことではありますが、自分自身の分限を省みず、分不相應な望みを起すやうなことは天理を破ると申すものでよくありません。衣食住の欲は人間の生活上必要であります、これも分不相應な贅澤を望んだり、餘分に食過ぎるやうなことがあれば胃や腸を害ふて病氣を引き起すことゝなります。

一體欲望は吾々人間の天性であつてこの天性は神様からお與へ下されたものであれば、決して悪い事ではありません。然しながらこの欲望の心が中庸を失ひ適當の制限を超えて不正に働けば、それが所謂『ムサボル』といふことになるのであります。この『ムサボル』心が神様の御戒め下された埃りであります。既に欲望が不正に働いて天性を破つてゐる以上は心は平和ではありません。その結果は自分を益して他人を害ひ、正當な方法によらずして他人の物をほしがつたり、その甚だしいものになりますと、人を偽つて自分の腹を肥やし、人目を盗んで物をかくし、横取等色々の悪い働きや行をして社會の秩序を破り不正不義を敢へてするやうになるのであります。

人はやゝもすれば現在の自己は過去に於いて、自ら蒔いて求めた過去の結果であることを思はず、徒らに他人の身の上を羨み人の境遇を羨み自分もしかくありたいと、所謂、『ホシイ』の心が起り易いものなのであります。然し一斗の袋には一斗より入れることは出來ないやうに『心一つの理』からめいゝがそれ相當の身の上を貸し與へられ、それ相當の境遇、身上を授けられてゐるのであるから、いはば、各人は神様からその量器を一定せられてゐる譯である。さればこの量器を悟らずしてそれ以上を欲すれば、ただに量器を破るばかりでなく、神様の思召

にも背くことになるのであります。以つて埃の埃たる所以を知ることが出来ます。」(天理教とは如何なる宗教か 二十七頁—二十八頁)

余等は上述の論述を見て相變らず落膽を感ぜずには置かないであらう。文面に現はれてゐることは、消極的宿命觀や、固陋な運命論以外の何物でもないことを先づ知る。それから、重大なる人生の性質に對してその器量に對して進歩もなく、又説明にもならぬ、例言の附會をもつて之れに答へてゐるのはあまりにも物足らなく感ずるではないか。人の分限は一定してゐるものなのか、貧乏に生れたからその人は一生貧乏で過さねばならぬのか？ 富貴權門に生を享けたから、その人は一生富貴權門の地位を保持することは出来るものなのか、自分自身の分限と云ふのは一體何んであるか、自分自身の分限をはつきり判つてゐる人はあるであらうか、自分自身の分限を自覺することは難しいことではあるまいか、自分自身の分限が一定されたものだと、論者の後述にある神の授けた量器てふ點に於いて明らかなるところであるが、余が述べる如き、自分自身の分限が一定してゐるものではない。自分自身の分限は明瞭に解るものではないと云ふことが許されるならば、望みはどんな望みでも起してよいこととなるのではないか、人間に欲望があると云ふことは論者も又、

「一體欲望は吾々人間の天性であつてこの天性は神様からお與へ下されたものであれば」と云つて、本能的のもの先天的のものと見做してゐるが、こゝに少し冷靜な考慮を用ゐるならば、容易にそこに矛盾があると云ふことが知られるであらう。神様がお與へ下された天性が、何故、その人分相當な望み以上の望みを持つやうになるのか？ 神様がその人の分相當に對して天性を與へたものであるにちがひがない。神様の與へた天性は何故、中庸を得ず、その人の量器以上の望みを起させるやうに與へたのであらうか？ 此處に吾人の考慮すべきところがなければならぬ、神の與へた天性は欲となりて『ホシイ』の念を起す。その『ホシイ』の念が進むとそれは埃りとなる。何故ならば、『ホシイ』の念の進むと云ふことは分限以上に渡るからである。ところが、『ホシイ』の念は神の與へたものである。神は何故に吾人の量器相應な欲望を與へずして、どこまでも進め得る『ホシイ』の念を與へたのであるか。この事柄から進めて二つの結論を導びき出すことが出来る。それは、

- 1、神の與へた天性たる『ホシイ』の念はどこまでも發展させてよいと云ふことが出来る。
  - 2、『ホシイ』の念のあることが埃りと爲ることは神の不明によるものである。
- このことである。何故に實在の神にして、萬能力を有する神が前項二つの矛盾した事柄に陥い

らねばならぬやうなことをしたか、少くとも人間に對してかゝる問題を起させると云ふことは確かに神の失態である。

次に吾々人間が、「神様からその量器を一定せられてゐて、その量器を悟らず、それ以上の欲望を持つことは量器を破り神様の旨に反することになりその念慮は埃となりて罪のもと不幸、病氣の元、となるものであるならば實に人間も惨めな存在物ではないか、然も神様が悪い結果を招來するやうな天性を與へたことに對しては何等の責任を負はぬのは全く勝手な神様ではないか。この事は又天理教自身のいんねん説と大なる齟齬を來すことによもや、お氣がつかれまい。惡因は惡果を來す神の與へた天性によりて惡果を現じたとすれば二神の與へた天性が惡因縁であつたと云はねばならぬ。神は人間に惡因縁即ち悪い種を植えつけたのだ。然るに神は何等の責任もなく、人間に對してその責任を問ふ。その處作に對して罪を糺す。これ全くわけのわからぬ神様だと云はねばならぬ。今一步を譲つて、神が天性を與へ量器を一定したものとするとその量器は各人の分限次第によるものとしたりとするも、吾々人間はその分限より、各自の量器なりを自覺することが將して出來るものであらうかどうかを考へて見れば、前言した如く、このことは非常に難しいことであると云はねばなりませんまい。一體自分はどれ程の量器を有してゐて、どれほどの

分限があるのかと云ふことを知ることは、いんねん説のところでも述べたやうに、前世は吾々は何をしてゐたらうか、前世は何んであつたらうか、どんな心持であつたのであらうか——このことは實は、同じ心なのだから知つてゐなければならぬのに、前世の事や前前世のことを實際はわかるものはない。自分は前世は牛であつたとか馬であつたとかいや兎であつたとか豚だつたとか、鯨であつた猿であつた蛇であつた等と所謂天理教で云ふ自覺するものは先づあるまい。これと同様で、吾々は吾々の分限とか、器量とか云ふものを知ることがほとんど出來ないのである。我々に望みが出來た、それが自分の分限以上のものであり、器量以下のものであると云ふことは、我々が實際その望みを達成しようとして行つて見なければ解る話ではあるまい。たとひ、自分が自分の考へてゐる望みが非望であり、到底出來得ないものであると思つても實際行つて見ねば解らぬものである。若しこのことをせずには俺れの分限はこれだけだ、俺れの器量はこれだけより無いんだと、やりもせずには思ひ込んで即ち天理教で云ふ自覺して、望みを達成しようと思ふものがなかつたならば、それこそ此の人間は人類の進化に對して、一障害となるものである。實に

「衝つて碎ける！」

てふ格言を無視した態度であると云はねばならぬ。吾々は頭でばかり考へ、頭でばかり思ひめ

ぐらゐてゐてはならぬ。頭で考へるより實行に移さねば、何等の效もないものである。天理教がこの意味に於いて分限を云ひ、器量を説きそれが神の定めた決定的のものであり、先天的にそれであるとするが如きは、遂に人間をして無氣力と爲し、國民をして進歩なき國民となすに至り、搾取者よりは、都合よき被搾取者なるものを造り、こゝに完全にブルヂユアの走狗の役をつとめ、無氣力な國民を造ることによつて、國家を危地に陥らしめ遂に亡國の悲運を見せしむるに至るであらう。これ實に山々しき大問題である。

更に、天理教の云ふ、分限を知り、器量を悟ることは、前述の如き、

「あたつて碎ける！」

の實踐を行つて然る後に、出来なかつたことについては、自分の器量はなく、それに於いて分限が定まつてゐるものだとするやうに見るのは

「なるまいと思つてもなるがいんねんらうと思つてもならぬがいんねん」

と云ふ筆先きの思想より理解することが出来るが、一回や二回の實踐實行でどうして吾々人間の器量、分限がわかるものであらうか、それは、余をして云はしむるならば、到底解るまいと思はれるのである。ところが、これを、やつて見ても出来ぬはいんねんで、その人はそれだけ

りの分限器量より無いのだと云ふことを云ふものがあるが、それこそ、あまりにも甚しいアキラメ主義的であり

「七轉び八起き！」

の力強い格言を無視するも甚しいものであると云はねばなるまい。又、

「意志あるところに、道あり！」

との西諺を蹂躪するものであると云はねばならぬ。人生の最大道徳であると見てもよい眞生の根源である。

「精神一統何事かならざらむ！」

の一大モットオを無視し、出来ないことは出来ないのだ、やつて見ても出来なければ、神様がこれだけにしか自分に器量を與へて下さらなかつたのだ、自分はこう云ふ境遇にあるのは神様の作つた分限なのだと云ふは眞生に對しての一大障碍である。アキラメ主義の思想をこゝでも吹き込んでゐるのはそも何を意味するか、人間をして無氣力とし、鬭争的眞生の意氣を無くし、風に従はせしめ、雨に屈伏せしめるやうに手馴けて、搾取し、命令し、自由にするに都合よき人を作らすべき底意の存すると見ることは、猜疑の見解であらうか、色眼鏡をかけて見たと云はれ得やう

か、余は然らずと答へ、之れに對しても又天理教當局並びに天理教學者の回答を促して置く次第である。

以上を以つて我々はこう云ふことを知る。天理教々理に於ける『ホシイ』は道徳的に見て、非道徳的の欲望を意味する如く説いてゐるがその實は、天理教々理に於ける因縁の教理と相齟齬<sup>そご</sup>を來さざらむ爲には、どうしても消極的の『ホシイ』の念に墮することとなると云ふことである。如何にしても天理教々理に於ける『ホシイ』は因縁の理の教義により、積極的向上進歩的の精進を齎すものなるには不足なることを知るのである。よつて、我々は斯る消極的教説に對しては絶対に反對せねばならぬのである。

斯る消極的教説、運命觀をもたせアキラメ主義を鼓吹するは彼等の常套手段ではあるが、これによつて、人間を無氣力にする、無氣力な人間が多くなればなるほど、擄取が自由になり、意のままにうごかすことが自在となる。殊に、天理教の實踐運動が下層階級に多きことによつて、下層階級には益々この種の人間が多くなり、このことによつて、擄取階級は益々利益を多くすることが出来る。さて、事情がこうだから、天理教屋は完全に現代の資本主義經濟組織に於ける彼の役目を盡してゐるものと見てよい。だから、その報酬をブルから、受けることが出来るし、

ブルは天理教屋へ幾分かの収益の割り前を興へる義務がある。實際は興へてゐる、次に一つの小話を紹介する。

ブル「どうも近頃は、マルキストの奴があばれて困る、どうだね、少しお前の説教で、何んとかならぬかね、大衆はまだん／＼眠つてゐるやうだが、たまには駄々子を捏ねるものもポチポチ出て來たね、お前の力で何んとかして押へてくれ、禮はするよ」

天理屋「有り難う御座います、お禮が出るんで、私等も極力、反對をしてゐるんですが、大切な神に對する觀念がだん／＼薄らいで來ましたものですから、近頃は説教も出來難くなりましたよ、だが不景氣なので、依頼心が出て來たのか、私の方だけはだん／＼隆盛に向つて來ましたよ、たんまりお禮をもらはなくつちやねえ旦那」

ブル「不景氣にするのも俺れ等の糸の引きやうさ、お禮か、お禮はさすが、出すまでもあるまい、俺れ等の糸の引きやうで、不景氣になる、そうすれば心細い人間が、お前等のところへ行くだらう、だからさ、お前等はそれ等の持つものを、その流暢な辯説で捲きあげてゐるんだらう、そしてお前も随分財産を作つたではないか、下手な俺れ等よりもよいではないか、まあ、それで我慢して、奴等があまりあばれないやうにするやうにたのむよハハ、」

天理屋「旦那も仲々抜目がありませんね、ぢやあ、私し等にもつと入るやうに、うまい工合に糸を引いてください、同商賣もありますが、私しの店が一番働きものでせうから幾分か色はつけてもよさそうなものですねハハ、」

ブル「ぢやあ、俺れ等の内でも二三はお前の方の信者になるさ、そして表面に名前だけは貸してやるから、それを看板に少し儲けて見るさ」

天理屋「ぢやあ旦那そう云ふことにして下さい、そうすれば、私等も少しは息がつけますよ、お禮もそれで差引きにしませうよ」

ブル「どう算盤を立てても、お前の方は利益が多いよ、いゝ商賣ぢやないかハハ、」

天理屋「これあ恐れ入りましたね、近頃はこれでなければ、私等の頭を突つ込むところはありませんや」

ブル「所謂漁夫の利か、ぢやあよろしく頼んだよ」

天理屋「まあ、腕に擦をかけてやつてみませう」

ブル「お互に好い酒が飲めるからなあー」

以上の小話は單なる諷刺ではない、深く味はつて見るべき性質のものである。ブルヂュアーと宗教家一般との關係、が暗示されてゐるのも面白いではないか、現代的經濟組織に因る如實の缺陷の中にあつて、漁夫の利を占めてゐるのは實に宗教家一般である、殊に天理教々師に甚しい、(教理自體が然らしむるからでもある)

「(一)『フシイ』これを漢字に當てますれば、慳吝で愛惜の變態であります。愛惜も亦正當な欲望と同じやうに、信用を惜しみ、名譽を惜しみ、儉ましかかにして、財産を惜むといふ様なことはやはり人間が平和幸福を求める上に必要なものであるから、この心掛は人間になくはなりません。けれども、出さなくてはならぬ場合に出し惜しみをしたり、自分が働くべき時に身を惜んで遊んだり、國の爲や世の爲に盡すべきに盡さないといふやうな、物惜しみ骨惜しみは埃りとなるのであります、義理をするところへも義理をせず。

人の苦しみを見ても之れを助けやうとせず、行けば損をするからと云つて引つ込み思案をしたり、博愛慈善の爲めには身分相當の義捐もせず知らぬ顔に過したり、國家的公共的事業には進んで負擔しなければならぬ場合でも種々な理窟をつけて、免れやうとするのは皆この慳吝の埃りとなるので、金錢や財産にばかり目がくらんで、出し惜しみをしたり、自分が當然



しなければならぬ仕事でも骨をしみをするやうな人は、決して神様の御恩澤に浴することが出来ぬのみか、自然々々に危き道に深入りをするばかりであります。身上(身體)と云ひ財産と云い、これ等は使ふが爲めに神様からお貸し下されてあるので、使はぬことなら、神様がお造り下さることもなく、貸し與へられることもないのであります。しかしこれを一度使ふにしても必ず定まつた用法即ち天理に従ふべきであります。これに反して勝手に使用するは、不正の使用と申さねばなりません、然かも再々申す通り身上を始め財産に至るまで皆各自の心一つの理に貸し與へられるのでありますから徳が多ければ従つて身上も壯健に有形の財産もより多く使用させて頂くことが出来るのであります。されば徒らに出し惜しみ、骨惜みをせず、世の爲人の爲め國の爲めに使はして頂くやう心掛けて、天の理をおとさぬやうにするのが肝要であります。」(「天理教とは如何なる宗教か」一十九頁——二十頁)

先づ、上述の引用文に注視してもらいたい、そして、特に側點の文に眼を注がれることをすゝめたい。そして、天理教屋(天理教團)の現在の態度を見られよ、その財産を見られよ、その使途に注意せよ、そこからどう云ふ結論が出て来るか。

「世の爲に盡すべきに盡さないといふやうな物惜しみ骨惜みは埃りとなる」

と、云つてゐる。

天理教の態度——↓現在の物質的財力——↓その使途、

を見るものに取りては、態度に於いて世の爲、人の爲に盡してゐるとは云はれまい。明らかに、世の爲人の爲めになる物惜しみ骨惜しみをしてゐるのではないか。それが埃だとすれば、天理教自身が自らの攻撃を自らに受けねばならぬ。天に向つて唾液をはいたものは、自らの面上に落下し來ることは、ニュートンの法則を借らずとも明瞭なことだ。

何故ならば、天理教の態度より、現在の物質的勢力を眺めることによりて容易に如上の斷論を爲すことが出来るだらう。天理屋には年收一億の金が入る。堂々たる大建築に住してゐる。その生活はさながら王者のそれのやうな様式を行つてゐる。一億の年收、住所の大建築、王者の生活、それ等が「國の爲め世の爲、人の爲につくしてゐる」ことになるのか？収入の使途それは、

「人の苦しみに見て之れに對して助けるべく出で、國家的公共的の事業に出し、世の爲人の爲國の爲に盡してゐる」

とは云へまい。その證據は、一方に大建築を擁して王者の生活を爲し、一億てふ莫大なる収入を得てゐる「世の爲人の爲」に盡して天理に背反せざる天理教がありながら、他方に於いて、生

活につかれ、就職困難、失業、生活苦、ひつぱくの極の一家心中、夫婦心中、さては窃盜、強盜、人殺し、飢餓戦上に彷徨する産業豫備軍、などの取合はせは實に奇なものではないか。上述中の他者の側に立つ人々に一者の側に立つ天理教から何故に物質的助心たすけごころが、流通して行かないのであらうか、他者の人々に経済的の援助を與へることは所謂引用文中にある如き、

「國の爲人の爲世の爲めになる」ことではなくて、

「定まつた用法即ち天理に従ふべきである」

こと以外のものなのであるからだらうか、ザツク、バラ、ンに言へば、現代の、プロレタリアを救ひ、彼等の求むる物質的援助を與へることが、國の爲世の爲人の爲にならぬことであり、彼等を救助する爲に用途する経済的の用途は天理に従はざるものであるからだらうか、これに對して天理屋流の人間は口角泡して食つて掛るだらう。天理教は谷底の生活者（プロレタリアート）を救はん爲に、ダ、メの教實の教、として出現したのだ、著者の云ふが如きは事實を歪めて論ずるものだ、然し、余はこう云ふものに對して次の如き言葉を以つて答としよう。

天理教祖は如何なる人に對しても（乞食に對しては別として後述に譲る）物質的窮乏を來してゐる人に對してはこれが援助を爲したと云はる、更に天理教徒は教祖の行爲を雛型として、信者

は之れを履むことを主張する。それなのにどうしたことか天理教本部は何故教祖の雛型を通らうともせず、信者には教祖の雛型（無一文になれと云ふこと）をしきりにすゝめる。そしてその信者の無一文になることは本部が儲かることゝなるのだが、信者には、かゝる行爲をしきりにすゝめるが、自體は一向教祖の雛型を通らうともしない。こゝに天理教の宗教（この場合、余の言ふ宗教とは社會の缺陷を救匡せんと努力することを指す）的假面の裏に一營利商業としての天理屋が眞赤な舌を以つて口甜づりしてゐる憎むべき面貌を見ることが出来るではないか。それこそ、宗教家として、當然天理の指示するまゝに、現代の如き状態に、所謂、國の爲人の爲世の爲に、自ら蓄ふところの財力を提供し、その教會を公共のものとして之れを大衆に公開するのが當然の行き方ではないか、然るにも拘はらず、教會には高屏をめぐらし、嚴重なる門扉を以つて固く鎖し、王者の豪を盡して先生の名號を恣いまくにすることは、それが埃を積むことにはならぬのであるか、たまに、お助け（信者募集）と稱して弱者病者を見廻ふるのもその實腹を分つて見れば、信者にして之より取らうとするの底意より來る行動であることはつくせ、は、こ、べ、然らざれば、強くならぬぞ病ひは癒らぬぞと云ふが如きは、弱きものゝ弱きところに附け込み、病めるものゝ心弱さに乗じて利を博せんとの醜手段を弄するものであると云ふことに想到すれば、そ、ど、ろ、に、

その擗取的手段の巧みさ、その態度のいかにも誠らしく見せかける態度恰好には一驚も二驚も喫すのであらう。

寔にこれこそ、他に強いて自分は之れを行はず。他をしてのみ之れを行はせしめて不當の利を博せんとするの大罪を犯すものであり、愚夫愚婦を惑はすものであり、無教育者を茶化するものであると云はねばならぬものである。余は敢へて六百萬の信者に告ぐ、諸賢は天理教に要求せよ、一文も出さずして信仰の確立を求めよ。諸君は眞に教祖を崇いものとするならば、諸君と同じ人間である教師を中間に置くことなくして、お筆先きおさとし御神樂歌の眞意義を味はむことを。それに合はせるに宗教學を研究し、心理學を参考せられよ、それ等についての質疑あらば余に質問せられよ、余は病者に對しては濟世司命の醫の大道を履むことによりて、思想的煩悶にありては同胞愛の立脚地よりして余の出來得る限りの廻答をするであらう。問者の問にして余の思想上のことあらば、余は余の恩師(余の恩師は現代宗教界に於ける代表的の人々であり、醫學に於いては漢法醫の大家である)の説を叩き納得の行くやうに説明するであらう。安心立命にせよ、疾病治癒にせよ、思想的經濟的疾病的の苦悶懊惱を解決せんには物質的に於いて最も安價なる方法を以つてせらるゝことが最も賢明なる方法であるからである。余は敢へてこの言を寄する次第である。

ある。決して余の自家廣告でもなく名利を博せんためでもないことを、評者の誣告をおそれ、一言先づ余の立場を明らかにして置く。

教祖は淨土宗の影響を受け、狂的なほど慈悲の行動をしたのは、先づ彼等の製作になる教祖傳、教祖實傳等によりて知ることが出来る。余は叙述の都合上それ等傳記にどれだけの附加物があり、どれだけの偽作があるかを今は問はないこととする。そして卒直にそれを肯定することとする。さて、以上の傳記の教ふるところによれば、教祖は實に慈悲善行そのものであつた。自分の下女お園なるものが湯呑み茶碗を壊した。教祖は之れを「平生、私の躰方が悪いからで御座います。」とて身代りになつて主人に詫びた。又は教祖の村のもので徳藏と云ふものが、教祖の倉に盜賊に入つたことがあつた。教祖は下男の憤激を押しなだめて、盗んだ總べてを與へた。そしては、や、下男には「あれも貧から起つた事、可愛想だと愍んでおやり」と云つたと云はれてゐる。又は乞食に對する溫き情、足達源右衛門の子供に對する熱情、下女カノと夫善兵衛とのいきさつに對する教祖の態度、これこそ眞の宗教的行爲であると見てよい。教祖は家も家敷も放り出して世の爲に盡した。そして無一文になり下つた。この無一文になつたことを教祖の雛型と云ふ。信者は世の爲、人の爲、國の爲めに、この教祖の雛型を通らねばならぬ。天理教屋はこれを信者に、信者

たるの義務だとする。教祖の雛型を通らねばならぬと云ふ。信仰が深くなればなるほど、信者は熱狂して教祖の雛型のやうになる。その時には天理教屋はホクソ笑んで腹を肥すことになる。そして自分は少しのものも出そうともしないのだ。

次に可愛いとはどんなものであるかと云ふことを述べて行くことゝ致しませう。先づ天理教學者の説明を聴くことゝ致します。

『カワイ』と申しますは、偏愛、邪愛である。これは普通に云ふ愛の變態であります。——中略——博愛の心が過ぎて自分の親を忘れ、妻を忘れ、子を忘れ、國を忘れて道ならぬ事をするのは無差別の愛で即ち邪愛であります。このカワイは偏愛、邪愛、無差別愛を云ふのであります。』(「天理教とは如何なる宗教か」三十一頁)

以上の教説を拜聴することによつて我々は先づ、一體可愛いと云ふのはどんなことか？と云ふことを考へねばなりません。そして、偏愛、邪愛、無差別愛と、これ等に對立するものと思はれてゐる、本當の愛、いはば、正愛と云つたやうなものゝ性質を究め、これと前者とを比較する

必要があるのである。

以上の引用文で明らかに指示してあるが如く、變態ならざる愛とは何んであるかと云ふことを充分に定めなければならぬのである。これを難しい哲學上の意義とか宗教上の意味では、今問題を提供しないことゝするが、可愛と云ふことは、敢へて意義なり定義なりを述べるまでもなく、いつくしむとか、あはれむとか、好むとか、よろこぶ、めでる、親しむ、をしむ、(論語學而篇、「汎愛衆。孟子梁惠王、皆以王爲愛也」)又は佛教々理中に於いて、最も重要であると云はれてゐる十二因縁の一たる愛は、愛情財物を欲求する等との意味に解されてゐるのが普通である。愛すると云ふからにはどうしても、我々の心の欲求つまり意志を根底としてゐねばならぬことは理解するにさして難づかしくはあるまい。だから、愛が進む方向によつて、むさぼり、をしむとなり、吝嗇となる反面には向上進歩となることは明らかなことである。これを、吾々の理想と云ふことにあてはめて見ると、吝嗇や、をしむや、色情財物の限りなき欲求は、正しく理想系列の下部に位するものであり、進歩向上の側にありては上部を占むるものであると云ふことが出来る。以上の愛の意味は個人と理想とを標準としたものから決めたものであるが、此れが、對人關係に於いて決められるときは、親子愛とか夫婦愛とか社會愛とか博愛とかと云つたやうなものが出来

上るのである。

さて、以上の最後の博愛について、天理教學者は、博愛の心が過ぎて、親や、妻や、子や、國やを忘れて道ならぬことをするのは無差別の愛であり、斯る無差別の愛は、身上（身體）事上に障りの來るいんねんをなす埃りだと云ふ。吾々はこの點をも少しはつきりして置く必要がある。でなければ、何が邪愛であり偏愛であり無差別愛であるか。何が變態ならざる愛であり、正愛であるかと云ふことがわからなくなるからである。

今天理教學者の云ふやうに、國や親や妻子を忘れて社會に愛の行爲を盡したとする。これを天理教學者は、邪愛、偏愛、無差別愛正愛だと云ふときと、云はぬときがあらねばならぬ。何故ならば、博愛を施した人が天理教學者の眼から見ても、これは邪愛だと思つたなら、邪愛だと云ふやうなものだからである。又博愛の度を過してと云ふことは實際曖昧なことであつて、過ぎぬ程度の博愛が分つてゐなければ、その博愛が度を過してゐるものか過さずにあるものかと云ふことは判然とする筈がない。

ところで、天理教學者の引用文を見るに、國や親や妻子を忘れて道ならぬ事をすれば、それは無差別愛だと云ふ。さてそれでは、國や親や妻子を忘れて博愛的の行爲をしても道になつてゐるものであつたなら、國や親や妻子を忘れてしまつて、博愛に奔走してもよいと云ふやうな意味が含まれてゐる。國や、親や、妻子を忘れることが第一義的のことではなくて、道ならぬことにありての道ならぬこと、つまり、道が最も大事なことになるならねばならない。だから、道になつてをれば、國や親や子や妻を忘れてもよいと云ふことになるのではあるまいか。ところが、以上の如き結論をするにはもう一度、無差別愛と云ふものを省りみる必要がある。と云ふのは、道になつたことであつても、無差別愛や邪愛となることがないかと云ふことが、懸念されるからである。

實際こう云ふことがあつた。それは、一人の婦人が自分の病氣（ヒステリ性の頭痛か何かの）の爲めに、友達にすゝめられるままに天理教を信仰した。ところが、前述して來たやうに、身上（身體）は神様の借物である。それは悪いんねんによつてあなたの病氣は起きて來たのですから、たんのう（忍耐の意）して、ひのきしんし、神様につくしなさいと勧められた。その女は性來一本氣な女なので、それからと云ふものは神様に仕へたのだ。教祖の雛型をた通うしてもらはなければと云ふやうな工合で、金子を教會にもつて行つたり或るひは、お膳を教會にもつて行つたり、終ひには自分の着物帯と云つたやうなものまで教會に持つて行くやうになつたのである。そこで

その婦人の夫君が、威したり、賺したり、諫めたりしたが一向に改める様子もなく、家財道具を運ぶことばかり考へてゐるやうであつたと云ふ。そのうち夫妻との間にモメゴトが起きて、夫婦別をしたがその婦人は到頭發狂に近いやうな状態となつたと云ふことを、余は或老人から聞かされたことがある。まだ例はあるが、今この例をもつて見るも、天理教で教へる道は、決して道ならぬ、道ではないだらう。して見ればそれは道たるべき道であるにちがひない。ところが、この道たるべき道を行ふに際して、夫君が一家の平和を欠くおそれて財物の持込みを邪魔するとせば、この夫君の行爲は、道たるべき道を行つてゐる婦人に反對することになるから、夫君の行爲は、道ならぬ道を行ふものであると云はねばならない。ところがその結果より見ればどうかと云ふに、上例に於いては、一家は離散してしまわねばならない破目に終つてゐる。そして婦人は狂人に近くなるに至つてゐる。そしてその婦人は夫を忘れ、教會につくした。教會はこれを知つてか知らずか、何も云はぬばかりか、欲は埃りだと頻りに教へ込むと見える。欲を離れたと云ふことを示すには、婦人としては物質を提供し、勞力を提供することによつて自分の心を現はすより外に仕方があるまい。だから、一生懸命に教會につくすのは、教理を頭に吹き込まれれば、吹き込まれるだけ熱心になるは當然のことである。ところで何故天理教々會の會長は、そんなに物品

や金子をもつて来て、一家の平和を欠くやうなことはありませんか？若し一家の平和を欠くやうなことをしてまでも私しのところへもつて来るならば、(私しとは云はぬ神様にお返しすると云ふ事を常套語とす)それは夫を忘れてゐる行爲であるから、やはり、埃りとなる愛であるから、注意をなさいと云ふべき筈である。ところがそうは云はないで、欲を離れてひのきしん(勞働せよとの意)をせよと云ふけれども、物品金子を神にあげることによる一家の平和には言及せぬのが常である。こゝに於いて、上述の如き悲劇が起るのである。このことからして、天理教々理で教へる道は、正しいものであると假定するも、その道を通り行ふときには、矢張りその道に反したことをするやうになることがあることを知らねばならぬ。そこで、天理教のお道なるものも又、絶對的のものでなくて、相互に矛盾を含む教理が多いと云ふことを知ることが出来るのである。若し天理教が、國や親子や妻を忘れても、天理教の道を通らぬものは、それこそ無差別愛であり、國を思ひ親を思ひ妻子をのみ可愛いがるのが偏愛であり、邪愛であると云ふならば、それこそ天理教は危険思想を多分に含むものであると云はねばならぬ。

然も實際は、信仰が熱烈になればなるほど、家を忘れ、親の意見に反し、子を棄て、妻を出してまでも、お道の爲めになれば仕方がない。これが本當のお道(天理教)にかなつたことだと云ふ

ものがあるに至つては、その天理教思想なるものには、一層危険思想の多分に含まれてゐることを知らねばならぬ。

天理教が『カワイ』を説きながら、天理教自身に對する執着は之れを熱烈な信仰であるとは見ることが招來する結果から見て、この種の行爲は、偏愛であり、邪愛であり、無差別愛であると云ふことを言はないのは、これを云ふときは、信仰が反省的となり、周囲の意見も聽かんとする意志も起り、一家の平和と云ふことも考へるから、従つて無理なことをしてまでも教會に物品金子を運ばないやうになる。従つて、天理教の方から見れば、信者の信仰心が薄くなり、収入となる物品金子が少くなるから、ひたすら、お道くんと云ひ、お道信仰の人の反對をする人をば何んでもかでも、世界並みの人として、救はれざる人、いんねんの深い人、迷つてゐる人としてしまふのである。此處にも巧妙な、搾取に都合よき伏線があるのではないか。

次に述べねばならぬのは八埃の一つたる『ニクイ』である。先づ天理教學者の教説を聽くこととする。

「教祖様が、むごい心を打忘れやさしき心になりてこい。とお神樂歌にお示し下されたのもこの

『ニクイ』心を忘れて慈悲博愛のやさしき心になれよ、との御意かと考へるのであります。」(「天理教とは如何なる宗教か」第三十三頁)

「をのれ金持に爲らんとすれば身を粉にして勞働し勉強し、さうして金持となるべき基礎を作れ。もし然らずして、徒らに金持にならんとして、世の富者を羨む心を起さば、遂いには法律の罪人となる時があらう。天理に反するものは總べて塵埃である。天理に反する欲望は悉く塵埃である。故に人は勤儉力行して正當の財を蓄へよ。蓄へた財産は國家有益の事、子弟教育の事、公共慈善の事に能ふだけの支出をせよ。それを吝むものは正しい人間ぢや無い。それを吝む心はやがて心の塵埃である。」(一〇二—一〇五頁)

富んだ者は貧しいものを輕侮し、學んだものは學ばぬものを蔑視する。けれども富貴貧賤はもと天理の命に出たもので、人間の價に於いて何んの渝る處もない。富貴であるからとて驕り慢ぶるにも當らねば、貧窮であるからとて自ら卑むにも當らぬのである。

假し貧窮であるとしても天理に従つて勤勉勞働すれば自ら富貴顯榮に至る時がある如く、今日如何に富貴であつてもその行爲が天理に欠ける時は忽ち貧困の地に落ちる。——一一一頁。

靈魂は不滅である。さらばいかに貧困なものもこれを天命と諦めて、毫も天を恨まず。又少しも人を咎むることなく、いよく勵み、いよく勤むればその中に安心が必ず得られる。假へ富貴顯榮の地にあるとも是皆な天命と思ひ戒めて假りにも自ら慢ることなく、いよく慎しみ、いよく懼れて我本分を盡すことに勤むればその中に安心は必ず得られる。——(一二五頁)

働き得べき體力を持つてゐるものは神聖に正直に働け。勞働の底には必ず神の助けがある。勞働を爲さずして窮境に陥るものは、必然に來る神の御罪であるから同情すべきものではない。

——一七〇頁——「天理教側面觀」渡邊勝氏著

天理教に於ける天理教學者の教説はその代表的のものを以上の二例に止めてをく。けれども、以上の教説について、まことに、眞面目に説かれてゐることは、如何なることがあつても憎惡の心を起してはならぬと云ふことである。『ニクイ』の情を起してはならぬと云ふことは、とりもなほさず、『たんのう』することである。『たんのう』とは前段に於いて述べたからこゝでは再説することを避けますが、一言にして表らせば、忍耐であり、勘忍であり、無抵抗主義であるに外ならぬのである。『ニクイ』てふ情を起してはならない。何んでもかでも我慢せねばならぬと

教へる。『ニクイ』の情を起すことは埃りであり、罪であり、身上事上に障礙を起す因である。従つて、病氣や失脚失敗等を生ぜしめる源を爲すものであると教へる。成るほど、教祖は敵をも愛されたと教祖傳のどれにもこれにも述べてゐる。だが、實際現代に於いてはどうであるか？

天理教本部の最高幹部たる松村吉太郎氏は、田中豊州氏を相手取つて裁判沙汰したのは『ニクイ』の情が無かつたと云ひ得るか。それとても、天理教の道に反するものは、憎惡の念をもつて相手に對せよとの教理でもあるのか。もしあるとすれば、天理教々理に於いて二つの矛盾した命題を主張してゐることゝなる。そして二つの相反する命題が同時に主張されるときには、どちらかが、他者にその優位を譲らねばならぬのは誰れが聞いても道理であらう。そうだとすると、一體天理教々理に於ける斯る相矛盾した二つの命題（天理教々理には實際はこんな矛盾がざらにある）による主張はいづれを是としいづれを非とするのか。二つとも是であるとすれば——天啓の教たる天理教々理なる故——これほど解らぬ話はない。と云つて、どつらも非とするやうな天理教でもない。非としないからこそ、主張として述べるのである。けれどもこの教理にある二つの相反する思想を含む二つの主義のどつちかを優位とし、どちらかを無くさねばならぬ筈なのに、どちらもあるのは、どつらも天啓の教へとされてをり綜合的に見ることをしないで、一つだけの特



に取り立てゝ見るから他のものとの相違が目につかず、又それを見分けるだけの努力もしなければ熱心さもないからであらう。結局は天理教々理の不完全に罪を歸せねばならぬ。従つて天啓は矛盾した、道理はづれのことを云つてゐると言はねばならぬ。そして、最後には、天理教學者は牽強附會、阿世曲學的の解釋をのみつけずにも少し統一ある教理の組織を考ふべきであると思ふ。だが、今にしてその仕事をせざるところを見ると、矢張り怠慢の罪はのがれぬところであらう。

若し松村が天理教的行動だと自認して行つた裁判事件だとすると以上の見解がこぼまれることは出来まい。裁判事件は松村一個の考へで行つたものとすれば、これは明らかに、自らが自らの信奉する教理を蹂躪するものであり、全天理教々徒の先達として、天理教本部の最高幹部として、云はゞ天理教の大御所としての行爲ではどうしてもあり得ないと云はねばなるまい。何故ならば、裁判事件は事松村が原告である以上、松村は『ニクイ』の念より事を好んで起すに至つたものであると言はねばならぬ。『ニクイ』の念が無くて、どうして原告として裁判沙汰に及ぶべきか。裁判沙汰に及んで『ニクイ』の念が無くてこの行爲をしたとは如何な心理的狀態を以つてしても説明は出来ない筈ではないか。この事からしても吾々は、教徒には『たんのう』せ『たんのう』せと云ふ關係上『ニクイ』の念を起すことは極力戒めてはゐるが、實際は彼等はこの『ニクイ』の

念より種々なことが行はれてゐるとの事を確かなことからであると知る事が出来る。その例を擧るならば、彼の大西事件を起せしめた元因を爲す點に於いても首肯されるではないか。大西愛次郎をして宗教的教育を施し、よくこれを指導して行つたならば、あの様な不敬事件を惹起せずになさまつた事であらうに。然も大西愛次郎一人ではない、彼等天理教より云はせれば、お道の人たる布教師五萬人、全國の信者四十萬人をして、同じく不敬事件の流れを汲むものたるこの汚名を冠せしめるに至つたのは、そも誰れの罪か？子の罪は親之れが責に任せねばならぬ。母體に悪因縁あれば子にもその因縁の果はあらはれるに至るとはそれ天理教の極力説くところではないか。大西愛次郎一派と天理教とは因果の關係を爲すものである。悪結果を生むに至つた、天理教に罪なしとするは、明らかに天理教に於いて、最重要なる教義たる因縁の教理を破壊するものである。次に余は天理教の悪結果たる大西事件を瞥見して、その母體たる天理教の態度を窺はんとするものである。

昭和二年四月五日より端を發せる大西事件、即ち新派天理教の不敬事件、天理教研究會事件は、昭和三年八月二十四日解禁となり。各新聞はこの宗教界に於いての大本事件の二の足を踏んだ事件について報導した。

「新派天理教の不敬事件。」

全國に亘つて大檢舉。

主犯の天理研究所長大西以下百七十名起訴（本日解禁）

奈良縣北葛城郡磐城村にある天理研究所（大和丹波市町の天理教本部とは別派）に屬する全國各地の教師信徒等にかゝる不敬事件は、去る四月初旬奈良縣高田署に於て發覺の端緒を得、直ちに全國に手配し一方報導を禁止して、數百名の大檢舉を行ひ取調べの結果、地元奈良をはじめ東京、横濱、浦和、前橋、宇都宮、水戸、甲府、福島、仙臺、秋田、静岡、長野、新潟、名古屋、岐阜、福井、大阪、京都、神戸、大津、和歌山、安濃津、高松、徳島、鳥取、長崎、福岡、大分、札幌、の卅地方裁判所検事局に於て數百名を檢舉し内百七十九名を全部不敬罪で起訴し（拘留者中起訴猶豫となつたもの二百十六名）豫審を進めてゐたがその大部分は豫審終結し不敬罪として前記各地方裁判所（被告少數のところは最寄裁判所に併合）の公判に付された。事件は前記研究所長大西愛次郎（四八）が昨年四月五日發行した天理教のお筆先研究資料たる「道の友」の内容が國家の基礎を危くするが如き極端なるものであつてこれを全國各方面に配布した外多數の教師若くは信徒等はこれを盲信し、奇矯なる言動を爲し、殊にその宣傳隊なるものが府縣廳、

警察署その他の官廳を訪問しまことし、やかに宣傳したもので、第二の大本不敬事件ともいふべきものである。勿論極端な迷信の結果で當局の取調べに對してその非を悔いたものはこれを許したがつひに、迷盲を開くことが出来なかつたものに對しては斷然たる處置を取つたものであると。（東京日日新聞昭和三年八月二四日夕刊）

以上の報導によりて、どんなにか、無自覺な無反省な盲信者が多いかと云ふことが分るではないか。そして、それによつて天啓の教たるもの、全く獨斷に出づるものであり、それは神のお告げと感ずるもの、主觀上の問題で、決して客觀的のものでないと云ふことを益々確かりと把握することが出来るではないか。

例之、或る人が夢で自分の友人が死んだと見るとするとき、その人は他の人々に對して友人が死んだのだと云つたとしたら、他の人々は先づ幾日に死んだ？どうして君はそれを知つてゐる？等と聞くだらう。そのときその或る人は、夢で死んだと見たから確かに死んだのだ、と云つたとしたら、他の人々は、そうかそれぢやあ確かに死んだのだ、と云ふ人、思ふ人、確信する人は、何人あるでせう。讀者諸君のうちにもありますか。以上の様な例の時に、或る人の話しを聴い

て、死んだと云はれた友人の宅へ行つた人があるとする。そして君は死んだと云はれてゐるが虚言なのだなあ、と云ふ。それは迷惑すると云ので、皆のところへやつて来て、はじめて死んだと云ふのは嘘だと云ふことが分るのである。つまり、夢のことは、本當か本當でないか不明なのである。不明なことを分明なりとすることは、大間違ひであると云ふことをいよく深く知つて置かなくてはならぬのである。ところが案外或る人々は夢物語を聽いてそれはそうかなあ、と思ふ人が多いのである。又はそれはそうであるに違ひないと思ひ込んでしまふ人が多いのである。そしてそれ等は確信にまで行く。この場合を盲信と云ふのである。そして、いくらそんなことは分らぬことだ。分らぬことを分つたやうに云ふのは間違つてゐるんだと云ひ聞かせても頑として聽かない。これが迷信者の心理的狀態なのである。如何に考へ無しのことであるかが分るではないか。考へると云ふことをしないからすぐ人の云ふことを聽いて信じてしまふのである。元來日本人は、衣服が立派であり、偉そうに髭などを蓄へてゐたり、金縁眼鏡に金鎖、金時計に金指輪でも身につけて葉巻きでも呷いてゐると、あの人は偉い人だと云ふ。その實は昭和五年七月初旬に新聞紙で報導されたやうな町會議員の窃盜のやうなものがあつたではないか。實に人は見掛けによらぬものであつて、立派な邸宅を構へ、書生を養ひ下女を置き、豪然と構へてゐても大それた大欺詐漢がそ

のうちの主人公である如きは、日目の新聞紙上にザラに出る。更らに、無學文盲の田舎の人々を惑はしたり、迷はすものは何々博士であるとか、何々教授であるとか、何々縣知事であるとか、と云ふ人々に對する度を越した信用である。つまり、權威に對する信用の過ぎる結果、迷はされることになるのである。どこの宗教團體を見てもこう云つたやうな爵位學號をもつてゐるものを表看板として之れによつて自家の信用を重くし、信者を獲得せんと目論んでゐるものは決して少なくない。例へば、大西事件に於ける場合にありても陸軍豫備少佐小出利治郎（五六）が參謀を爲してゐるではないか。又、天理教にしても、廣池博士等が看板になつてゐるではないか。これをもつて見ても權威に従ふは民衆の心なりと云ふことが知れると同時に、自己を信用して、自己の足跡の後に従つて來る未信者をして不幸の目に遭遇せしめることは如上の權威の責任にもあることを知らねばならぬ。若し斯る自覺がなかつたとせば、それは、自家の權威を賣物にする、似て非なる權威であつて、實に爵位に對する、學號に對する大なる冒瀆であると云はねばならぬ。然るに世人の如何に盲者の多きことよ！如上によつて見るとき夢物語のやうなものを直ちに信じて疑はざるもの實に四十萬人とは！！これをもつて見ても盲者の數少しと云ひ切ることは出來ない。余をして云はせしむるならば、天理教もその實は斯る機構を構へて盲信者を作るものである

と斷ずるに躊躇せざるものである。これは敢へて過論ではあるまい。天理當局者の云はれる如く、天理教信徒の多きを以つて、正しいとは云はれざる理由又上述の叙述を熟讀することによりて容易に知り得るものではないか。若しそれ、一步を譲つて、數多きを以つて眞理に近きものであるとすれば、天理研究會の研究とても、上御一人を冒瀆する、國民として誠に恐惶に耐えざる結果を招來するとすればとて非眞理であるとは云はれないではないか。こゝに至つて、現代の天理教が信徒に於いて六百萬人を數へ、幹部又は役員に擬すべきものに知名のものを集めて、權威をつけ、財力を惜しまず豪大なる殿堂を建築して凡俗の愚眼を欺むき、財力的勢力を宗教界に張り、以つて未信者をして信用せしめんとすることは明らかにブルヂユアの態度であると云はねばならぬ。最も注意すべきは、大西愛次郎が、如上の不敬問題を惹起せるに對して、天理教々廳では之れに對して何んぞ云つてゐるか。否天理教々理に立脚せる態度を取つてゐるであらうか。彼等はこゝう云ふ。

「天理教から聲明書、全然別個と。」

天理研究會事件につき丹波市の天理教々廳では『天理教と天理研究會とは全然別個のものである』といふ意味の聲明書を發表した。(昭和三年八月二十四日、東京朝日新聞一面七段)

によりて知ることが出来る如く、全然別個であるとは、何を以つて全然別個であると云ふのか。天理教が天理研究會を産んだと云ふ點に於いて全然別個であるとは云へない。眞に天理教に於いて、宗教的態度に出でるならば、よし教理を曲解したにせよ、その責任の一半は負ふべき筈のものではないか。殊に、大西愛次郎の履歴を見るに、明治卅六——大正二年まで山口縣山口町天理教宣教所の所長であつたと云はれ、その教理の異説の爲めに天理教本部の忌諱にふれ、遂いに大正十三年二月天理教管長より、權小講義の職を免ぜらるゝに至つたものと云はれてゐる。

我々は、この事實より次のことを知ることが出来る。天理教々理にして、天理教の信仰をもつて且つ、大西を屈伏せしむるに足ることが出来なかつたと云ふこと。大西をして、曲説を爲すものとして、天理教の監督外に放逐し終つたと云ふ事は、危険なるものだとして柵からその危険物を出したと一般である。天理教は異端者を救ふ力なきものであると云ふこと、大西一人を救ひ得ざる爲に、四十萬の國民をして、愚者と云はせ、非國民と云はせるに至つたと云ふこと等を知ることが出来る。大西に對する天理教の態度の一つが斯くも大多數に迷惑を及ぼし、司直の手を煩らはざるを得ざるに至つたのにも拘はらず、恬として恥ずして『全然別個のものである』との聲明書を出したのは、餘人ならばいざ知らず、宗教家をもつて自任し、他宗教に優るものとして